930.2
Ko13
2

始

930.2
K013
2

廣島高等師範學校教授
小日向定次郎著

英文學史

ドライデン時代より
ヴイクトリア王朝初期迄

株式會社 文獻書院發兌

大正
13.10.30
内交

329-883

序に代へて

鬢にちらほらしらがも見え、痩せぎすの、あまり丈夫でもなささうな男が、杖をつきたてながら、足をふみしめながら、そそり立つ高山を攀ぢてゐる。初手からあぶなげであつたが、おほよそ三つ一ばかりの道のりを、まる一ヶ年もかかつて、どうやらのぼりおほせ、ひと息入れるいとまもなく、またゐへぎゐへぎ辿りはじめた。それでも根氣だけはよくつづき、殘りの道の半分を、這ふやうに登つて行つたのが、またまる一ヶ年である。さうして今岩間の清水をごくりごくり、渴いたのどにおとしてゐる。で、その男といふのは、言ふまでもなく私自身なのである。山の額から振りかへつて　通つてきたあとを眺めると、きつたつたやうながけや、そこぶかい谷や、うすぐらい木もりが隨處に、つづらをりの細路をさえぎつてゐる。よくもここまで來られたものだと、そのかるはずみをとがむるよりは、われとわが膽のふとさに驚かれるのである。へとへとにはなつてゐないまでも、隨分疲れてゐる事實をかくすことはできない。今更意氣地もなく、

あとへ引返すわけにはゆかないけれども、若しやむごいつめたい、どしやぶりの雨にでも敲かれたら、もしやあらいはげしい、山風にでも襲はれたら、折角張りつめてゐる氣に弛るみができはしまいかと、われながらそれが按じられてならない。これまでやうに、幸に日本晴れの日和がつづけば、更に半歳なり一ヶ年なり、すでに棒のやうになりかけてゐる弱脛をひきずつても、かならず絶頂をきはめて、目的をはたしたいと思つてゐる。

私のからだをつつむ、うららかな光、私の氣をひきたてる、きよらかな水、それは大方のひろやかに、あたたかい、胸のそこから流れだして來るものでなければならない。今の私にとつては、それが全くのなぐさめであり、ちからである。

大正十三年十月中旬

廣島の寓居にて

著　者

例　言

一　本書は既刊英文學史の續篇です。前篇では黎明期からミルトン時代までを扱ひましたが、本書ではドライデン時代から、ヴイクトリア王朝の初期までを調べて見ました。

一　古典主義の全盛期から、タムスンを分岐點として、古典派と浪漫派の二つの流れを、私自身深い興味をもつてたどつて見ました。さうして、その間における時代思潮の推移、竝びに大陸文學が、英文學に及ぼした影響を覚ねることも忘れなかつたつもりです。

一　作品に就いての評論は、出來るだけ獨斷を避け、可成著名な文學者の卓說を紹介するやうに努めましたが、原作を讀んで得た印象は書かないでは居られなかつたので、その都度私一個の卑見をも加へてゆきました。

一　原文の引用を前篇より多くしたのは、或は餘り重苦るし過ぎると言ふ方もあるかも知れませぬが、鑑賞を兼ねるのが、これを書いた當初の私の精神であるので、已むを得ないことと思ひますし、またそれが一方からは、便利であるやうに考へられるのです。

一　夏目漱石さんの十八世紀英文學評論のやうに、原文には一々譯文を添へたらと言ふ注意も受けてゐましたが、紙數がかさむので此度はそのままにしました。下卷を書いた後或時機に全部に渉つて譯文をつけやうかとも思つてゐます。

一　代表的作家に關しては、詳細な傳記を附しましたが、それは、一人の作家を完全に研究するには、その人の書翰が大事な材料であるやうに、作家の性格や行動は、その作品の基調を知るには是非なくてはならないものであると信じてゐるからです。

一　充分注意はしましたけれども、一方に校正をやりながら、目次も索引も私の手ひとつで整理したため、何節とか何章とかの、その數字に誤のあつたことを氣付きました。が、殆んど五旬に亘る長い間、きれぎれの校正をつゞけて、ついそこまでは目がとどかなかつたのでした。三四氣付いた英字の誤植と共に正誤することにしました。

一　何分にも大切な公務の餘暇の零碎の時間を割いてやつた仕事ですから、遺漏も缺陷も尠くはあるまいと思はれます。それに對しては、ひたすら大方の御垂示と御叱正を仰ぎたいと思ひます。

英文學史目次

第一篇（ドライデン時代）……一

第一章　王政復古時代の散文……一

第一節　王政復古期世相の一瞥……一

華美淫蕩の時代思潮——イーヴリンの「日記」の一節—上流婦人の醜態—假面の流行—舊教と新教—政黨爭—政治家の墮落—マコーリの「英國史」の一節

第二節　二つの珍らしき日記……八

イーブリン・ヂョン——「木材論」—「日記」—ランダン大火の一節—イーヴリンとピープスの執筆態度の差—二人の沙翁劇の批評

・ピープス・サミュエル—「日記」—筆致—ランダン大火の一節

第三節　英國近代文を基礎づけたる文人……一四

テムプル・ウキリアム——外交家としての活躍—「昔行錄」—「論文集」—詩と音樂の効用に就ての論の一節—上品明快な文體

サヴイル・ジョージ——「日和見の特徴」「雜錄」

ティロトスン・ヂョン——「法談遺稿」—新しい近代散文の模範文體

サウス・ロバト——ウキリアム・シャーロックとの宗論—「法談」—流暢にして底力ある文體—獨特の冷評と機智—貪慾に就ての法談の一つ

シャーロック・ウキリアム——バーニット・ギルバト——バーニット・トマス

スプラット・トマス——「ローナル・ソサイエティ史」—「キウリ傳」—數學的確適平易の文體

ステイリングフリート・エドワド——「オリギネス・サタライ」—ロツクとの論爭
ロツク・ヂヨン——「人智論」—彼の文體—「教育意見」—
ボイル・ロバト——科學及神學の造詣—ベイクンの實驗哲學祖述の第一人者—「形體と質の起源」
アイザツク・ニュートン——文體—「聖書の豫言に關する考察」
ベーン・アフラ——英國最初の閨秀作家—喜劇—無雜野鄙—小說—「オルーノコウ」

第二章　批評的雰圍氣と露骨なる諷刺詩……二六

亂痴氣無作法の時代——チャールズ二世の放縱不羈—ヒロウイツク・カプリツト流行の理由—批評と規則—古典の研究—當時のフランス文學—機智と常識—英文學への感化—戲曲と詩に於けるヒロウイツク・カプリツト

第一節　詩人としてのドライデン……二九

時好を趁ふて移る彼の性質——「アンヌス・ミラビリス」—「アブサロムとアーチトウフエル」—ヒロウイツク・カプリツトを諷刺詩への始めての適用者—「メダル」—「マク・フレクノウ」—「アブサロムとアーチトウフエル後篇」—諷刺の筆を宗教、道德に轉ず—「レリギオ・ライチ」—「牝鹿と豹」—ローマ教の讃美—「聖シリアの祝日の爲に」—「アリグザンダの饗宴」—好評—「ザ・フエーブルス」其他—「シギスモンダとギスカードウ」其他の飜譯

第二節　詩史劇作家としてのドライデン……四二

「王政復古期戲曲の復活」——「のらくら間夫」—「印度皇帝」—「グレナーダ征服」—ヒロウイツク・カプリツト劇戲曲の代表的作品—梗概—悲劇「オーランダジーブ」—秀作—オーランダジーブの獨語—マクベスの反響—センツベリーの批評—悲劇佳作二つ—「オール・フオア・ラブ」—此作から無韻律採用—「ドン・セバスティアン」—喜劇—「スペインの修道僧」其他—歌劇

第三節　ドライデンの戲曲論その他……四九

各戲曲及詩篇の緒論—「劇詩論」—沙翁評—「劇論集」—書簡文

第四節　道化詩の作者サミエル・バトラ及他の諷刺作家……五三

貧乏な生涯—「ヒューディブラス」—チャールズ二世の愛讀—內容—「ヒューディブラス」と「ドン・キホーテ」

オウルダム・ヂヨン——憎侶に對しての諷刺詩—警句、皮肉、—ドライデンやポープに次ぐ鋭い諷刺

フイリツプス・ヂヨン——「光る半圓銀貨」。　ポンフリツト・ヂヨン——「ザ・チョイス」

第三章　殿上詩人の一群……六一

ディロン・ウエントワース——「譯詩論」—「アルス・ポエテイカ」の飜譯

サツクヴイル・チャールズ——社交詩(ヴエル・ド・ソシエテ)—「陛上に在す凡ての淑女達に」

ウキルモツト・ヂヨン——小唄及び抒情詩

セドリ。チャールズ——小唄。　ジョージ・ヴイラズ——「下稽古」。　シエフイールド・ヂヨン——「諷刺論」

第四章　王政復古時代の戲曲とその作家……六七

第一節　トマス・オトウエイ其他……六七

此時代の戲曲の特徴——喜劇に價値あり—病的な感傷主義—作家の生活の反映

オトウエイ・トマス——「ドン・カーロス」—悲劇二つ—「事なきを得しヴエニス」—梗概—「孤兒」—梗概—沒我献身と義理の觀念

喜劇——社會風俗の描寫、世相の反映—喜劇作家

ウキチヤリー・ウキルアム——「田舍女房」—梗概—「腹藏なき人」其他

ヴンブラ・サー・ヂョン——「腹立ち女房」—梗概—皮肉な女性描寫—其他の作品
エサリッジ(サー・ジョージ)——英國風俗劇の本家と云ふべし—シェリダン、ゴウルドスミスの先驅—「桶の中の戀」其他—輕快な筆致
コングリーヴ・ウキリアム——「インコグニタ」—「老獨身者」—文壇の寵兒となる—ヴォルテーアとの會見—「世はさうしたもの」—梗概
フアークワ・ジョージ——「戀と德利」其他—「ボウ・ストラタヂェム」—梗概—現代式臺詞……八七

第二節　リー、サザーン、シャドウエル其他……

リー・ナサニエル——「ニーロ」—「ポンタス王ミスリデイティーズ」其他
サザーン・トマス——「不運な結婚」—「オルーノコウ」—アフラ・ベーンの「オルーノコウ」に借りしもの
シャドウエル・トマス——「イブソム・ウエルズ」其他—極彩色の風俗描寫
ロー・ニカラス——「タマレーン」其他—イリザベス朝作意の踏襲
シベ・コリ——「拒誓者」其他
クラウン・ヂョン——「サー・コートリ・ナイス」。リロウ・ジョージ——「ランダンの商人」—「癒らぬ好奇心」
クラウン・ヂョン——「サー・コートリ・ナイス」。リロウ・ジョージ——「ランダンの商人」—「癒らぬ好奇心」……九二

第二篇　古典時代（クラシカル・ピーリオッド）……九二

第一章　ポープ時代の散文……九二

オーガスタン・エージ——古典研究—僞古典主義—定期刊行物の發行—「デイリ・クラント」其他—有名作家の執筆

第一節　ダニエル・ダフオウと「ロビンスン・クルーソウ」……九四

「エセイ・オン・プロジェクツ」——諷刺文と論爭文—「脫救者」を處分する最近道」—勝し盞に立たざる—市民の同情—「曝屋を讃美するの歌」—「眞の英國人」—「ザ・リヴュー」—「事變兇災錄」—「ロビンスン・クルーソウ」—梗概—「疫病の年の記錄」—內容の拔萃—「キャプティン・スインダルトン」—「カヴリーアの回想錄」—「カーヌル・ジャック」—「モル・フランダース」—「ロクサナ」—ピカルーン小說—激石の批評

第二節　ヂョナサン・スキフトと「ガリヴ旅行記」……一〇五

幼時の賴りない生活——ミス・ヘスタとの戀—「ザ・ジャーナル・オブ・ステラ」—ミス・ヴノムライとの關係—「カディナスとヴアネサ」—「桶物語」—最初の散文—內容—宗教的諷刺文—「書物合戰」—アイアランドに移る—農民に味方、地主に對する諷刺文—「織物屋の手紙」—內容—「ガリヴ旅行記」—スキフトの人間嫌—文體—單純、平易、明快—政治的諷刺文の元祖—悲慘な晚年

第三節　隨筆の大家アディスンとスティール……一二七

アディスン・ヂョウジフ——勤勉柔順な學生時代—「ドライデン氏に」—ドライデンに知らる—「イタリアのそちこち」—「戰後」—「タトラ」への寄稿
スティール・リチャード——軍人生活—「行列」—「キリスト教の勇者」—四つの喜劇—「葬式」—梗概—眞實の婦人の描寫—スティールの創作慾度—「タトラ」發刊—社會問題を扱ふ
アディスンの「スペクティタ」其他の新聞——「サー・ロージャ・デ・カヴリ」—上品な滑稽趣味の鼓吹—「マーザの夢」—「色男の頭腦の解剖」—其他—「ケイトウ」—晚年……一三〇

第四節　バークリ・マンダヴイル其他の散文家……

バークリ・ジョージ——「視覺の新理論」—「人智の原理」—「ハイラスとフイロナス」—「アルシフロン」—「シリス」
マンダヴイル・バーナード—「蜜蜂の道話」—常識と諧謔

クー・ド・アンソニ——「人と作法と意見と時代の特徴」—ポープの「人間論」を基礎付たもの—文體—古典の香—ビューティ・イズ・トルース—自然神教
ポリングブロウク・ヂョン——作品
モンタギュー・メアリ——種痘法を移入す—書簡文作家—「土耳古から」
マンリ・メアリ——「新アトランティス」
ロー・ウキリアム——「眞面目なる要求」—獨逸ベーメンの共鳴者
クラーク・サミエル其他の人々

第二章　十八世紀の小說の勃興……一三八

第一節　四大小說家の特徴……一三八
小說——從來の小說—イリザベス時代の小說—ミルトン時代の小說—王政復古期の小說—ピカルーン小說
第二節　サミユエル・リチードスンと女性心理の描寫……一四〇
印刷業者——「通俗書簡文集」—「パミラ」—梗概—「クラリツサ・ハーロウ」—內容—一女性の數奇な生涯の歷史—傑作—フランスに聞ゆ—デイ・ダロウやルーソウの稱讚—バルザック「谷間の姬百合」の影響—「サー・チャールズ・グランディスン」—男性を描いて失敗—彼の稀有の女性心理描寫の才—文例
第三節　ヘンリ・フイールディングの小說と自然主義……一四六
若年の作品——「悲劇の悲劇」—「パミラ」の感傷主義にあきたらず、その裏を行く—「ヂョージフ・アンドルーズ」—「パミラ」の滑稽作換との銘打—「雜集」—「此世からあの世へ」—「ヂョナサン・ワイルド」—諷刺小說—人生の暗黑面—「トム・ヂョーンズ」—內容—個性描寫の巧さ—舞臺の變化—世相の活畫—各卷の緒言—「アミーリア」—最現實的で且情味深い作—女性の節操—作に漂ふ暗い氣分—フイールディングの作風—寂寞の晩年—「リスボンへの航海」—「トムヂョーンズ」の一節—英國小說の祖—近代小說への影響
第四節　トバイアス・スモリットと海事小說……一五五
處女作—海軍に入る—「ロダリック・ランダム」—一種の自叙傳—その作風—「ペリグリン・ピクル」—「ファーディナンド」—惡漢の行動—最不愉快な小說の一つ—「クリティカル・レヴュー」編輯—「ドン・キホーテ」の譯—ヒュームと「英國史」を著はす—「サー・ラーンスロット・グリーヴス」—ドン・キホーテ」を眞似て失敗—八つ當りの毒筆—「イタリヤ・フランス旅行記」—思ふまゝな嘲罵—「子」—「ハムフリ・クリンカ」—最優作—內容—スモリットの文例
第五節　ローランス・スターンと「トリストラム・シャンディ」……一六〇
「トリストラム・シャンディ」——奇拔珍妙な文體—ダイグレッションが生命—內容—トウビと蠅の條引例—溢るゝ情味—一茶の氣分—トウビとミシズ・ワドマンの條—「多感の旅」—淘情主義—「說教集」と「書簡集」
第六節　巨匠に追隨する群小作家……一六七
フイールディング・サラー。ポールトック・ロベト。ヂョンストン・チャールズ—「クリサル」

第三章　技巧派の詩人アリグザンダ・ポープ……一六八

片輪の天才——ドライデンの踏襲—「孤獨に寄する」—「牧歌集」—ヴージルの模倣—「批評論」—內容—批評の歷史的考察—「アルス・ポエティカ」や「ラール・ポエティーク」から取る所多し—理詰め—感覺的要素の絕無—詩としての無價値—詩形—「髮盜人」—創作動機—內容—上品な滑稽味の橫溢—「ル・コント・ダ・カヴリス」—妖精(四元)の織込—沙翁の「嵐」—ダ・クウィンシの評—精巧な戲想の

記念物—「キンザの森」—叙事詩—美しい自然の描寫—秀れた叙情詩二つ—「不運な女を吊ふ」—「ユロイザよりアベラードへ」—ホウマの飜譯—「ダンシアッド」—文人への八つ當り—内容—「人間論」—四つの尺牘—内容—宇宙と人間—人間を支配する二原則—自愛と理性—神の普遍愛—「道徳論」—尺牘體—人間の智識と性格—婦人の性格—富の利用—通一篇の常識論にすぎぬ—「雜詩集」—總評—洗練された修辭—グレイの他に比を見ず—ヒロウイッ・カブリットの完成—詩形と内容(警句)の一致—時代思潮の反映

第四章　技巧派詩人の一團……二八八

プライアー・マシウ—ポープに次ぐ技巧派詩人——華な外交家生活—長詩—「アルマ」と「ソロモン」—「ヘンリとエムマ」—彼の長所は短詩に—流麗に且稍々肉感的な戀歌—社交詩—テインの批評—「秘書官」其他

ゲイ・ヂョン——「田園の遊蔵」其他—ヒロウイック・カブリット—ゲイの特徴—平易な俗語、輕快な筆致—道化劇「そのいはゆる」中の短歌

フイリップス・アムブロウズ——「悲しめる母」其他

バーネル・トマス——「隱者」—「夜景の嵩」其他

テイケル・トマス。サミュエル・ガース。

ラムジ・アラン——蘇國詩人—「綠の野邊の歌會」—第一章はジェイムズ一世の作といふ—「おとなしい牧羊者」—田園の純な戀や平和な生活—一例—バーンズへの感化—「茶車雜錄」や「常盤木」—蘇國古歌の蒐集—「麗はしき集ひ」其他の叙情詩—プライアと彼の境遇—涙漫主義の芽生

キンチルシ・レディ——「夜の迷想」其他—ワーズワースの褒評—「夜の迷想」の靜寂な夜の描寫

ブレア・ロバト——「墓」—内容—無韻律の復活

ヤング・エドワド——「最後の日」—除靈な空氣—詩形に於けるポープの感化—「夜の思念」—無韻律—泡沫の人の世、死の闇影—長明の「方丈記」—「沈思」—内容—詩形—彼の作はむし多し

サマヴイル・ウキリアム——「獵」其他—無韻律

グリーン・マシウ——「岩屋」—「短慮」—快活な諷刺詩—ヒロウイック・カブリット

ダイア・ヂョン——「グロンガ丘」—自然の細な描寫—「羊毛」—ヂョンスンの評—ワーズワース、グレイの評—無韻律

バイロム・ヂョン——「牧羊歌」其他

第三篇　ヂョンスン時代……二一五

第一章　詩歌の自然描寫と浪漫主義の勃興……二一五

第一節　技巧の殿堂から自然の靈廟の讃讃、古典から涙漫へ……二二五

ポープの世界の行詰り——人工的庭園と自然の山野—詩に於るローマン主義—キンチェルシー—タムスン—バーンズ—小説に於けるローマン主義—バーシー—スコット—古典主義—イラズマス・グーウキンまで續く—古典、涙漫の並行

第二節　ヂェイムズ・タムスンと自然界……二二七

涙漫運動の開始者——「冬」—「夏」「春」—「秋」—「四季の歌」完成—内容—自然の描寫—劇的な人事の背景—無韻律—其他の詩—戯曲—失敗—幸福な晩年—「遊惰の城」—比喩詩—「仙女王」から思付く—スペンスイアリアン・スタンザの詩形—詩人の性格(憶劫がりな)に適合—「仙女王」を離れた獨特の境地—キーツを思はしむる詩の節々—自然神教禮讃

第三節　ウイリアム・シエンストウンと井リアム・コリンズの抒情詩……二三五

シエンストウン・ウキリアム——「女教員」—古譚の詩形—半道化詩—「ヘンリの宿屋にて書ける」—「哀歌、小歌、及牧羊詩」—「趣味の進歩」—詩壇革進者としての彼

コリンズ・ウキリアム——天才抒情詩人—「パーシアン・イクローゲス」—「オーツ・デスタリプナイブ・アンド・アレゴリカル」—鮮麗な形容と微妙な旋律—「黄昏に寄する」—ハヅリットの評—スキーンバンの激賞—而も世に認められず—「一七四六年に歌へる」—「パションズ」—英國抒情詩中の白眉—内容—自然に直面して美の捕捉—シェリーの面影—「自由」其他のオーツ—狂死……二三二

第四節　トマス・グレイと「哀歌」……二三三

「イートン・コレッヂの遠望」——「逆境」—「悲歌」—内容—大自然へ愛着—完璧の詩法—「詩の進歩」—「詩人」—彼の博學と推敲—ヂョンスンの妄評—「運命の女神」他二篇—スコットの詩の先驅—「湖水地方への旅日記」

第五節　異常な早熟の天才トマス・チヤタトン……二三三

幼時——古體の詩作—古詩を發見せりと世を欺く—「ロウリ・ポイムス」—「イリノオーとジューガ」—「惡善の唄」—十八歳で毒死す—詩形—殊更に古體古い綴りを用ふ—作例—ワーズワース・シェリの愛情—キーツの共鳴

第六節　散文詩「オシアン」とヂエイムズ・マクファースン……二四九

「オシアン」——ヂョンスンに疑はる—引例—文體—ナポリオンの愛讀—外國に擴がる

第七節　パーシの「古詩拾遺」とワートンの「英詩史」……二五二

「古詩拾遺」——古いバラッヅの蒐集—浪漫的運動への貢献

トマス・ワートン——「スペサの仙女王に關する論文」—「英詩史」—詩文學鑑賞への刺戟

第二章　十八世紀末を飾る浪漫派の四詩人……二五四

第一節　ウイリアム・クーパ……二五四

敏感内氣な性質——憂鬱症に罹る—「オルニイ・ヒムス」—「茶話」「會話」其他の佳作—「ヂョン・ギルピン」—「仕事」—題材の取方の新奇—引例—無韻律—獨創的な詩風—陰鬱な人生の見方—クーパ自身の言葉—「亡母の寫眞に」—「書簡集」—サウジの評—晩年—「益なき心配」其他—「ザ・カストアウエイ」—クーパの詩風

第二節　田園詩人ロバト・バーンズ……二六三

生立——西印度移住計畫—西印度移住キルマノック版初版—成功—エディンバラに出づ—歸農—貧窮の死—詩に漂ふ土の香—獨立の氣魂、愛國の精神—「二匹の犬」—民主的精神と社會及人間の改造の叫び—「農家の土曜日の夜」—スペンスイアリアン・スタンヅア—内容—人間バーンズ—「小鼠の巣を掘返して」—「ハイランド・メアリ」—「オウルド・ラング・サイン」その他のソングスの曲調—「面白い乞食達」—その他—豊な想像と輕い諧謔—「タム・オー・シャンタ」

第三節　ジョージ・クラブとその寫實主義……二七五

「書庫」と「村落」の原稿をバークに送る——認められる—「村落」出版—平和に見ゆる田園生活の裏面—「教會の記錄」—「洗禮」「結婚」「葬式」の三部から成る—内容—「市邑」—十數篇から成立—西鶴の世之助に似た物語—貧民と養育院—大都會の貧民窟—密通の罪は女のみにありや—ゴルズワージ—「市邑」は彼の最傑作—「別離」—「イノック・アーテン」やメスフイールドの「黄水仙の野邊」への暗示—「愛の旅」—戀に盲ひた男の焦燥—「無念」—欺かれた女の執拗な憎惡—「サー・ユースタス・グレイ」狂人の自叙傳—クラブの作風—陰鬱悲慘な人生の暗黑面の直寫—人間の心の巨細な檢討—人道主義

第四節　神秘詩人ウイリアム・ブレイク……二八三

幼時からの幻想幻覺——「ポエティカル・スケツチズ」—コウルリッヂの「クリスタベル」に暗示を與へた「美しきエレナー」—「無邪氣」—「經驗」—物柔な言葉の中に身戰く人生の事實を示す—「虎」—超

人の理想を歌ふ—「よしあし草」—「豫言の書」中の「天國の門」—神秘詩中の神秘詩—「天國と地獄の結婚」—ブラウニングの思想への暗示—「地獄の諺」—汲み切れぬ深い思想—彼の詩風

第三章　多方面の人オリヴ・ゴウルドスミス……二九〇

彼を古典主義派に入れた理由——内容からはむしろ濵漫派—詩形はポープの技巧の追蹤—喀傳外國へ放濵の旅—ヂョンスンの知己—「世界の市民」—ランダンの社交生活の忌憚なき批判—「旅人」出版—「ヴイーカ・オブ・ザ・ウエイクフイールド」—上梓の動機—筆を戯曲に轉ず—「お人好し」—「荒村」の出版—「屈んで勝つ女」—「ギリシヤ史」その他

第一節　詩人としてのゴウルドスミス……二九四

彼の詩の舞臺の廣汎と變化——詩形に於てポープに追蹤—「旅人」—機微な人生の考察と自然の描寫—神の攝理を象る國民の幸福を說ける一種の論文—「荒村」—富の濫用と奢侈の害毒を諷刺す—仕返し」その他

第二節　ゴウルドスミスの戯曲と小說……二九八

「ウエイクフイールドの準牧師」——梗概—準牧師の信念と人情—作に反映する作家の快活な無邪氣な性格—喜劇二つ—「お人好し」—梗概—主人公の寛大な樂天的性格—作に含めた諷刺—「屈んで勝つ女」—梗概—上品な明るい陽氣な茶番味—王政復古期喜劇との比較

第四章　十八世紀文壇の覇者サミユエル・ヂョンスン……三〇七

第一節　ヂョンスンの詩……三〇七

獨立獨歩自ら文壇に地盤を築いた——彼の性格—風變りな結婚—私塾を開く—生徒の中に後年の名優ガリックがゐた—「アイアリーニ」—「ランダン」—ヒロウイック・カプリツト—デユーヴイナルの

諷刺詩に飲ふ—物質文明の痛罵—ポウプの注意を引く—「人間の願望の虚栄」—落着いた道學的な詩「ドルリ・レーン座開場に際しての前口上」—高尚嚴肅な感情と穩健な批評能力—「前口上」

第二節　ヂョンスンの散文……三一四

雜誌經營——「ザ・ラムブラー」—「ズイ・アイドラー」—「辭書」—緒言に顯はれた著者の抱負—奇拔な定義—「ラセラス」—梗概—悲調—「スコトランドの西方諸島旅行記」—「詩人傳」—傑作—獨斷的偏頗な意見—クーパの憤慨—ヂョンスンの文體—ラテイン系の重々しい多彩な言葉—ゴウルドスミスの評語—「詩人傳」に於ける簡勁壯重自在な文章

第五章　古典派詩風最後の追蹤者及その他の二流詩人の一團……三二二

第一章　チヤーチル、ダーウキンその他……三二二

チヤーチル・チヤールズ——「ロシアッド」—詩形—諷刺詩

ダーキン・イラズマス——チヤールズ・ダーキンの祖父—植物學の造詣—「植物園」—リンネの植物組織の組述—内容—あまり極端なヒロウイック・カプリツトの用ひ方—彼以後此詩形の採用者跡を絶つ—「ツオーノミア」—チヤルズ・ダーキンやハーバート・スペンサの進化論の端緒

デイ・トマス——「スサンドフアドとマートン」—教授法改善を說ける教育小說—「瀕死の黑人」—奴隷制度撤廢の提唱

シューアド・アンナ——ダーキンを崇拜—「ルイザ」その他

第二節　ウエズリ兄弟、スマート、フオークナ、ピーテイ、エイキンサイドその他……三二七

ウエズリ・チヤールズ——宗教的。ウエズリ・ジョン

スマート・クリストフア——「デヴイッドに寄する歌」—狂熱的表白の連續—引例—非凡の觀察力と稀有の想像力—ブラウニングにより眞價を認めらる

エイキンサイド・マーク——「想像の快樂」—哲學的の詩—ポウプの推賞—無韻律「オーヴ・オン・シビラル・サブジエクッ」その他
フォークナ・キリアム——「破船」—コンラッドの「タイフーン」やメスフィ・ルドの「ドーバ」の感じ—「一般海事辭書」
ピーティ・ヂエイムズ——「眞理論」—ヒュームの說の難詰—「吟遊詩人」—豊な情緒と浪漫的な趣味
フリーガスン・ロバト・バーンズへの感化
グレインヂャー・ヂエイムズ——科學詩「甘庶」
グロウヴ・リチヤド——「レオニダス」その他の史詩—「ホウヴア提督の幽靈」
ワイトヘッド・キリアムの「執心家」。バーボールド夫人—「幼兒のための散文の讃美歌」—正義者の死」。カロライン・オリファント—バーンズ風の民謠
アンステイ・クリストファア——社交詩

第六章　十八世紀の散文……三四〇

第一節　ヂエイムズ・ボズウエルと「ヂョンスン傳」……三四〇
ヂョンスンとの關係——「ヂョンスン傳」—內容の一班—「ヘブライ群島旅行記」—ヂョンスンの同じ日記より勝る

第二節　デヴイッド・ヒュームの「英國史」と哲學……三四三
「人性論」——「自然宗教に對する對話」—「政談」—彼の哲學思想—「奇蹟論」—「英國史」委曲明暢の文章

第三節　エドワド・ギボンとその「ローマ衰亡史」……三四九
ロバトスン・ウキリアム——「蘇國史」—「英國史」との比較

懶惰な大學生活——生活の一變—ラティン語の古書の讀破—非英國的性格になる—自叙傳の賞賛—「ローマ衰亡史」第一卷—ヒュームの稱讃と社會の歡迎—完成—內容—ギボンの苦心

第四節　エドマンド・バークと「フランス革命評論」……三五四
「自然的社會の擁護」——ボリングブロウクの哲學の攻擊—「崇高なるもの、美麗なるものの觀念に對する哲學的考察」—「年鑑」の編輯—政治論—彼の雄辯—「フランス革命評論」—內容一班—革命黨の暴虐に對する憤慨—「或貴族に與ふるの書」—バーク散文中代表的の一つ
ペイン・トマス——バークに反對—「人權論」—「フランス革命評論」の駁擊。ウオルストウンクラフト。ゴドキン・キリアム—「政治的正義に關する考察」その他—シエリ、ワーズワース、リットン等への感化

第五節　アダム・スミスその他の散文家……三六一
スミスの「富國論」
ワイト・ギルバート——田園生活に終始す—「セルボーンの博物學」—書簡體—「釣の名人」に類似—書簡體文の他の例—スタンホープの「その子に與ふるの書」—スタンホープとヂョンスンの不和。—「ヂューニアスの手紙」
ワートン・トマス——散文家としての彼。バトラ・ヂョウフ—「宗教の類似」。ワーバートン・キリアム
ペイリ・キリアム——「自然神教」その他

第七章　シエリダンと彼を繞る戲曲作家……三六六
王政復古期以後戲曲の衰微——餘喘を保つ人工的喜劇—シエリダンと共に枯死—生立—「批評家」—喜歌劇の上乘なるもの—「競爭者」—梗概—「誹謗學校」—上流社會の風俗畫—梗概—洗練された可笑

味—婦人連の饒舌の引例
ガリック・デヴィッド——戯曲家としての彼—無價値。コルマン・ジョージ—「ボリ・ホニコウム」—「秘密結婚」—ゴウルドスミスの「お人好」より上出來と云はる—その他の作家……三七四

第四篇　ワーズワース時代……三七四

第一章　小說壇に於ける恐怖の小說……三七四

第一節　怪異と恐怖　小說……三七四
小說壇の新機運——ウオルポウル・ホレイス—「オトラントウの城」の內容—イタリア貴族の慳忍非道—寫實主義の反動。リーヴ・クララの「老男爵」の內容—ラドクリッフ・ノンの「ユードルフォウの不可思議」の內容—その他の作物—ルーイズ・マシウグレゴリの「田家」の內容—「驚異物語」—マチユーリン及ヂヤールズの悲劇「ベートラム」及び「漂泊者メルモス」—シエリ・メアリ・ウオルストウンクラフトの「フランケンスタイン」とその科學的基調—東洋奇譚の作家ベクフアド・キリアムの「ヴセック」の內容—「異常な詩家の回想錄」及び「南歐諸國からの旅日記」—ホウプ・トマスの「アナスタシアス」の內容—モーリア・ヂエイムズと東洋的ピカルーン小說—ハジ・ババの冒險物語」—その續篇
フレイザ・ヂエイムズとその作物—東洋趣味の流行。
歷史小說家の一群——リー・ソフイアの「リセス」と妹のハリエットの「カンタベリ物語」—ポータ・ヂエインの「サデアス・オヴ・ワルソー」と「蘇國の酋長達」—アンナ・マリアの「ハンガリアの兄弟」
アグイラ・グレイスの「ブルースの當時」—ヂエイムズ・ジョージ・ペイン・レインスフアドの「リシエリウ」及び「ヘンリ・マスタトン」

第二節　ウオルタ・スコットの浪漫的小說……三八一
略傳——獨逸の浪漫的運動の影響—故實考證の研究—民謠傳說の蒐集—「蘇國遊吟詩人の詩」—致富

と豪奢生活—「那翁傳」その他の雜著—「ウエイヴリ」の內容—「ガイ・マナリング」及「好古家」の內容
純歷史小說「オウルド・モータリティ」—「ロブ・ロイ」—單純な農家の生活描寫—「ハート・オヴ・ミドロウシアン」—「ラマムーアの花嫁」—「モンストロウズの昔語り」—「アイヴンホウ」及び「ケニルワース」の內容—「海賊」及び「ニゲルの浮沈」—東洋的色彩—「タリズマン」その他—「タリズマン」の內容
—その一節—晩年の作物—アンドルウ・ラングの批評
第三節　スコットの物語詩——「湖上の佳人」その他……三八八
「レノレ」の模倣「キリアムとヘリン」——ゲツツ・フオン・ベルリヒンゲン」の飜譯—「殘んの遊吟詩人の歌」の詩形內容—その一節—「マーミオン」—雄壯な叙事—その一節「湖上の佳人」の一節—「コウクビ」—「島々の長」その他—短詩

第二章　湖水派詩人——ワーズワースとコウルリッヂとサウジ……三九六

第一節　ワーズワースの人間愛と自然禮讚……三九六
略傳——學校生活と旅行癖—「夕の散歩」—南歐の行脚—「寫生帖」—人間愛とフランス革命との共鳴—保守主義の傾向—「罪と悲しみ」—「リリカル・バラッヅ」—グラスミーアの住居—理想の實行—ライダル・マウントの住居—三大力作

第二節　三大力作と短詩の研究……四〇一
生立と回顧を語る「序奏」——その結構—人事と自然の考察—「世捨人」と「觀光」—その結構—「漂泊の人」—哀話の一節—「孤獨の人」—その內容—自然描寫の一節—「落蹟」—その內容—「落蹟を取り戻す」—「牧師」—その內容—冠婚葬祭の儀式—「墓地」—その內容—墓の主達の歷史—同情の筆致—その一節—農民の無智と墮落—國民的價値なき偉大は空虛—「牧師の家」—永劫不滅は宇宙の原理—「觀同仁の神慮—「漂泊の人の說話」—「序奏」と「世捨人」と「觀光」を貫ける觀念—その根本思想—短詩

「虹霓」『不死不滅の暗示』『自然物の感化』『ルーシ・グレイ』『私達は七人』—『アリス・フェル』のブラッドリ氏の見解—『兄弟』『白痴の子』『ピータ・ベル』『水夫の母』『目しひたるハイランドの男の子』—人間味—自然物に對する温情—『雀の巣』『胡蝶』『栗拾ひ』『水松の木』—『鎌菊に』—『ハイランドの乙女に』『ひとり刈る人』—『郭公に』『雲雀に』—愛國的精神—『幸ある勇者』『ブルーム城の驛宴』『リルストウンの白牝鹿』—平凡を詩化『茨』—『詩人の碑銘』—偉大なる教師

第三節　コウルリッヂの性格と傾向……四二

略傳——バンテイソクラシの計畫—フランス革命の影響—思想の動搖—古典の造詣—辯舌—默想的『行く年に』—『老水夫』の腹案—『クリスタベル』—『キューブラ・カーン』の由來—『夜啼鳥に』—悲劇『悔恨』と『ザポリア』—獨逸の遊學—哲學の研究—神秘主義—シラの『ウオレンスタインの顯譯』—グレタ・ホール—氣紛と無邪氣—阿片の喫用—雜誌の執筆—『沙翁講演』

第四節　コウルリッヂの幻想と詩及び散文……四七

キュブラ・カーンの夢幻的情調——クリスタベルの韻律—內容—その一節『老水夫』の結構—その一節—教訓的含蓄—旋律の變化—想像の鮮明—『日出を讃美する歌』の絕唱—『イオリアの竪琴』—『秋の夕』—『三つの墓』—『暗き女』—『愛』—『フランス』—『落膽』—その他

散文——『沙翁講演集』—沙翁評論の新生面—『バイオグラフィア・リテラリア』—その內容—文學及び哲學評論—『遺稿』—宗教及び政治論—『友達』その他

第五節　詩人としてのロバト・サウジ……四二

サウジとコウルリッヂの因緣——精力の旺盛と健筆—叙事詩『ヂョウン・オヴ・アーク』—『ホルトガルの滯在と長篇『サラバ』—『キハマの呪ひ』—『マドック』—『ロダリック』—五篇の長詩とその內容—長處短處—諷刺詩『惡魔の散策』—對話の妙趣—『説に基ける短詩—『インチケイプ・ロック』—『天罰を蒙れる憐愍なビショップ』—『セント・マイケルの椅子』—『セント・キーンの墓』—戰に關する名詩—『ブレニムの戰ひ』—『モスコウの逃軍』—人事を詠んだもの—『バークリの老女』—『貴しき人のかどと』—『ブラフ・ペルズ』—書齋の感想—『ロドオの瀑』の旋律—その一節—『折に觸れて詠める』

第六節　サウジの散文——創作と飜譯……四〇

散文の種類——『半島戰史』『ブラジル史』—『ネルスン傳』『ウエズリ傳』—その他—澄透簡勁の筆—『ネルスン傳』の一節—『シードの記錄』—シードの字義—アルコサの園みの一節—『茶話』と『閑話』—諷刺文—『ドン・エスピエラの英國通信』

第三章　夭折せる詩壇の三天才バイロンとシエリとキーツ

第一節　力と激情の詩人ジョージ・ゴードン・バイロン……四五

略傳——父と母と祖父と—詩人の性格—猾介不羈—『無爲の時間』—『エディンバラ評論』の酷評—『英國の詩人と蘇國の評論家』—八つ當りの嘲罵—『チャイルド・ハロウルド』の成功—『邪教徒』『アビドスの花嫁』『海賊』『ララ』『コリンスの圍み』『パリシナ』—物語詩の特色—『ドン・ヂュアン』の出版—稚氣と覇氣—不幸な結婚—社會の非難—英國を去る—南歐の旅行と滯在—あの青白い顏が命取り—浮名の數々—『シロンの囚人』『タソウの悼き』—『チャイルド・ハロウルド』の完結—『ベッポウ』『マゼッパ』—詩劇『マンフリッド』『ケイン』『サーダナパラス』その他—『ドン・ヂュアン』の上梓—シェリとの往來—雜誌『リベラル』に寄稿—『天と地』『審裁きの夢』—シェリ死後の作物—物語詩『島』と『二篇の詩劇—ギリシア獨立—ミソロンギに永眠

第二節　『チャイルド・ハロウルド』と『ドン・ヂュアン』——詩劇及び短詩……四三

『チャイルド・ハロウルド』の結構——一種の日記—日沒叙景の一節—水郷ヴェニス『嘆息の橋』の上に立ちて—ロウマへの巡禮—コリシアムの回顧とその一節—ウオータルーの古蹟—その一節—アル

ブス山の嵐—ヴュリノウの飛瀑—大洋の描寫
「ドン・ヂュアン」の結構——冷評と嘲笑—ドン・ヂュアンとスペイン傳說—島長の娘との戀—トルコの女皇の戀慕—ロシアの皇后の寵幸—英國行き—英國上流社會への諷罵—作家の面目躍動—イスメイルの包圍—人物の同型—作家のムードの表現—個人主義—刹那の歡樂を逐ふ—激情の發露—女性の描寫—情熱の强烈—操志の薄弱—イタリア風俗と「ベッポウ」—短詩—「夢」「闇」「オーガスタに」「チロンの囚人」—代表的詩劇「マンフリッド」と「ケイン」—懷疑—悲史劇「マリノウ・ファリエロウ」「フォスカリ父子」——神秘劇「天と地」その他—スキンバーンのバイロン評—バイロンの詩の價値—外學文學への影響

第三節　愛と自由の詩人バーシ・ビシュ・シエリ……四六三

略傳—片意地と早熟—マッド・シエリ—小說「ザストロッチ」その他の出版—ルーイズ及びラドクリッフの影響—懷疑的傾向—「無神論の必要」—ハリエットと結婚—多情多感—破壞主義—慰愛の自由思想—メアリ・ゴトキンとの戀—イタリアの旅—ハリエットの死—メアリと結婚—イタリアの生活—リー・ハントと會談—溺死—碑銘

第四節　シエリの詩の紹介——叛逆と改造の精神と自己表現……四六七

宗教と社會制度の改造を欲求——「クキーン・マッブ」—孤獨の精神の表れ—寓意詩「アラスタ」—詩形と內容—夢幻的性質—その一節—浪漫的詩の精華—「回教徒の叛逆」—詩形—灼熱的叛逆の氣性—根本のモチーフ—人類愛—「回教徒の叛逆」の梗概—寓意—壓制と自由の表徵—自由の勝利—伊太利に於ける作物—「ヂュリアンとマダロウ」「アトラスの巫女」「エピサイキデイオン」「アドネイス」「おじき草」「生の行進」その他—短詩—「西風」「雲雀」「雲」その他—劇詩—「解かれたるプラミシュース」「チエンチ」「ヘラス」その他—散文—「哲學的改革意見」—「詩の擁護」—「アドネイス」と靈魂の不滅—「エピサイキデイオン」の內容—理想の一端—愛の哲學—幻滅の悲哀—「生の行進」の內容—餘

綜せる寓意—詩形—主觀の發現—「雲」—「雲雀」—「西風」—その一節—愛と美の不變性—「おじき草」自己表現—「心沮みて」「ユーガニアの丘」「想ひ出」その他の抒情詩—詩劇—「チエンチ」の內容—「解かれたるプラミシュース」の內容—高遠の理想—快心の合唱歌—「ヘラス」と自由解放の要望—シエリの長處と短處

第五節　唯美主義の詩人ヂョン・キーツ……四八五

略傳—不規則な學校生活——醫學から文學へ—「エンデイミアン」の不評—「ハイピアリアン」—「ラミア」「イザベラ」「聖アグニース祭の前夜」を含む詩集の出版—肺を病む—イタリアの轉地療養—ローマの客死
キーツのヘレニズム——翻譯書に依る希臘文學の研究—「エンデイミアン」の出典—その內容と詩形—その一節—色調と語呂—「美は眞であり眞は美である」—「ハイピリアン」の取材—ダンテイの「神曲」とミルトンの「失樂園」と「ハイピアリアン」—構想の洪大と描寫の魁偉—完全無缺の詩形—「ラミア」の內容—その一節—蠱惑的幻妖の美—「イザベラ」の典據—その梗概—熾烈の思慕と情熱の蠱惑—詩形の變化—「聖アグニースの祭の前夜」—內容と出典—その一節—詩形—繪畫的色調—浪漫的詩の極致—その影響—「ラ・ベル・ダーム・サン・メルシ」—浪漫的バラッドの逸品—オウツの藝術的價値—「ギリシア甕」「サイキ」「夜啼鳥」「憂鬱」「秋」—「聖マークの宵祭」の基調—「カリドオー」の技巧—キーツの詩の特質—時代の超越—象牙塔中の人—ブランデイスの評

第四章　戀愛詩人ムーアと擬古詩人ケアンブルとロウジアーズ……五〇四

第一節　ムーアの「愛蘭曲調」と「ララ・ルーク」……五〇四

略傳—アナクリアンの詩の飜譯——音樂の天才—樂符附きの「愛蘭曲調」—猥褻の譏りを受けた「オウツと尺牘集」
散文——華やかな智の閃めき—書翰體の「パリのファッチ一家」—戀愛小說「快樂主義者」—忠實正確

な「バイロン傳」
三人の「天人達の懸」の内容——四つの東洋の浪漫斯「ララ・ルーク」の屠價—「樂園と天女」の一節—「イラムの灯」の一節—鮮細な異國情調—詩と音樂の合致—「國ぶりの歌」「愛廟曲調」—「輕快と憂鬱」—「光る眼のレスビア」「水の出合ひ」—義勇奉公の現れ—「私の國の竪琴」

第二節　ケアンブルのとロウジヤーズの新古典主義……五一〇

ケアンブルの「希望の快樂」の内容——ゴウルドスミス追蹤—詩形—順境の一生—「ワイオミングの
ガートルード」「シオドリック」「グレノウの巡禮」—短詩—「ホウアンリンダン」—その一節—「ボール
ティックの海戰」「英國の水夫達」の特色—「兵士の夢」「人生の川」「アリン湖の娘」その他
ロウジアーズの古典趣味—「記憶の快樂」「人生」—ボウプの人間論と同型—彫琢の筆致—優婉の情
緒—「イタリ」の内容—史實と傳說を兼ぬ—イタリア旅行の印象—ラスキンのロウジアーズの詩愛讀……五一六

第三節　詩壇の巨星を周る一群の小星劇……

ホツグ・ヂエイムズ——「山の詩人」—「女王の通夜」
ベイリ・ヂヨアナ——「情劇集」—「家族内の昔噺」その他
カニンガム・アラン——民謠小唄—散文—英國傳バーンズ傳—「英國名匠傳」
コウルリツヂ兄妹——氣紛れと幻想—ハートリの「ソンニツト」—サラの「ファンタスミアン」—ハートリの端的純粹な散文—「北方人物誌」
ボウルズ・キリアム・ライル——「ソンニツト集」とその影響
カニンゲ・ジョージの「貧しき小刀磨所師」
フリア・ヂヨン・フーカムの「僧侶と巨人」——詩形オタヴ・リマー、アリストファニーズの翻譯
テイナント・キリアムと「アンスタ・フェイア」—その詩形
ヒーマンズ・フェリシア・ドラシアの即興詩——「國々の詩」「生活の實況と讃美の歌ども」その他
エリアツト・エビニーザ——「古老」—「小夢法の歌作り」—勞働生活の惨況の描寫—その一節—ブツ

ド及びモリスの先驅—彼の勞働生活の理想
マンゴムリ・ヂエイムズと奴隷制度の撤廢を扱つた「西印度」
ブロクタ・ブライアンの「英國の歌ども」——ウルフ・チヤールズの「ヂヨン・ムーアの葬り」
スミス兄弟・ヂエイムズとホレイスの「もじり歌」
詩劇「叛逆者ヂュリアン」の作者ダ・ヴイア(オーブリ・ハント)——「ヂヤニ・モリスン」の作家マザウエル・キリアム

第五章　小說勃興の機運と描寫の多方面……五二三

第一節　閨秀小說家の輩出と寫實小說……五三三

バーニ・フランシス——傑作「エヴイリーナ」の内容—ランダン生活のスケツチ—鋭い觀察と輕い諧謔—第二の傑作「シシリア」の内容—「カミラ」「さすらひ人」—「日記と書翰集」
エツヂワース・マライア——子女教養の爲の「父の助手」—常識的な「ベリンダ」と道德的な「通俗談」
「ハイカラ物語」—家庭小說「教へ草」「道の話」—愛蘭の田園生活描寫—「カースル・ラクレント」と「外住者」—その内容
オースティン・ヂエイン——處女作「ノーサンガ・アビ」—その内容—「分別と感情」—その内容—「驕慢と偏見」—その内容—「マンスフイールド・パーク」—その内容—「エンマ」—その内容—中產階級の如實描寫—「說得」その他—小說の種類—描寫の範圍—個性の躍動—機敏の觀察—精致の筆意—「驕慢と偏見」の一節—象牙の板に繪筆を—寫實小說の母
フエリア・スーズン——閨秀小說家の三幅對—三つの小說—「結婚」「相續」「運命」—蘇國の地主及び酉長の家庭生活—詼諧と諷刺
ブラントン・メアリ——「克巳」—「訓練」—道德的臭味
ミツトフアド・メアリ・ラツスル——「私達の村」—村落生活の實寫—晴れやかな明い氣分
トロロウプ・フランシス——「寡婦バーナビ」と「アメリカ人の家風」

マーゲリート・ブレシントン伯夫人の「幻燈」——シドニ・レイディ・モーガンの「我儘な愛蘭娘」——オウヒ・アミリアの「父と娘」その他

第二節　社會小說と海洋及び冒險小說……五三一

ゴトキン・キリアムの社會小說「カレブ・キリアムズ」——制度組織の不備——法律道德の缺陷——結婚問題——「フリートウッド」——人間終局の幸福——「聖リオン」

ベイカ・ロバートの「ハームスブロング」——ホルクロフト・トマスの「アンナ聖アイヴイーズ」——破壞思想

マリアット・フレダリック——海員生活——作家の體驗——「馬鹿のヒータ」——內容——「海軍士官候補生イージ君」——內容——滑稽趣味と「忠實なヂェイコップ」——難破を骨子とした「ニュートン・フォレスタ」——「マスタマン・レディ」——內容

ホール・バシルの「航海旅行の斷片」——チェイミア・フレダリックの「ペン・ブレイス」——グラスコック・キリアム・ニュージェントの「海軍兵役」

スコット・マイクル——熱帶の色彩——浪漫斯に寫實を加味——「トム・クリングルの航海日記」——「ちびの航海」

マクスウエル・キリアム・ハミルトン——軍事小說——「ウオータル——物語」「露營」その他

バニム兄弟・マイクルとヂョンと愛蘭人の生活——「オウハラ物語」

クロカカ・トマス・クロフトンの傳說の研究——「南愛蘭の御伽噺と傳說」

ゴールト・ヂョンの歷史小說——「エイアシア遺產受取人」「サー・アンドル・ワイリ」その他——鄉土的色彩——藍國人の生活——「殘人の地主」「教區の記錄」

ピーコック・トマス・ラヴの詩——「ロウドダフニ」その他彼の諷刺小說——「ヘドロング・ホール」「メリンコート」「ナイトメーア・アビ」「クロチット・カースル」その他——飄逸洒脫の作風——十九世紀のスターン

第六章　十九世紀初期の散文——隨筆と評論……五三八

第一節　雜誌文學の殷賑……五三八

「エディンバラ評論」「クオータリ評論」「ブラックウッド雜誌」「ランダン雜誌」その他——評論家の輩出——新思想と新評論——自然と自由——雜誌文學隆盛の理由——十八世紀の散文との相違の諸點——新機軸

エディンバラ評論——ヂェフリ・フランシスとスミス・シドニ——放膽の文と皮肉の筆——スミスの「ピータ・プリムリ書翰集」——ヂェフリの「文選」——ヂェフリ文例

ブルーム・ヘンリの政論——「ジョージ三世時代の政治家の縮圖」

「クオータリ」とカニング・ジョージ及びギフアド・キリアム——ギフアッドの諷刺文——「バヴイアッド」と「マエヴイアド」

デイズレイリ・アイザク——「文學の名物」——「チャールズ一世の傳記と統治」

クロカカ・ヂョン・キルスン——「フランス革命の初期」——「過去現在のアイルランド畧史」

ブラックウッドとキルスン・ヂョン——狂文——「ノクテイス・アンブロシアネエ」の特色——キルスン文集——「スコットランド人のかげひなた」

ロックハート・ヂョン・ギブスン——「ピータの書翰」——「スコット傳」——傳記文學の最長書——ロックハートの小說

マギン・キリアムとフレイザ雜誌——「片々錄」——沙翁論及び歷史小說

コビット・キリアムと「キークリ・リジスタ」——犀利な諷刺——スキフトの感化——「新敎改革史」——獨創簡徑の筆致——「ルーラル・ライツ」その他

第二節　コクニ・スクールの文豪ラムとハズリット……五四七

ハズリット・キリアム——略歷——文藝評論及び講演——「沙翁劇人物評」——「イリザベス時代の戲曲」「英國詩人」「現代詩人」「英國戲文作者」——コウルリッヂ評論の一節——その文體——隨筆——「圓卓」「茶話」「直」

言家」—警句と皮肉—彼の晩年
ラム・チャールズ——略歴—悲劇「ザヨン・ウッドヴイル」その他—姉メアリとの關係—獨身の理由—メアリとの合作—「沙翁物語」と「子供の爲の詩」—「沙翁時代英國戯曲家の標本」—撰擇の妥當—評論の明察—「イーリア隨筆集」の特色とその內容—ランダン生活の註釋—獨創の文體—「焙豚論」の一節—ラムの眞價

第三節　リー・ハントとダクインシの散文……三五

ハント（ヂエイムズ・ヘンリ・リー）——略歴—雜誌の經營—「イクザミナ」「インデイケイタ」「リベラル」—「バイロン翁と同時代の文豪」—長詩—「リミニ物語」及び短詩—「リミニ物語」の典據—隨筆「劇論集」—「機智と諧謔」「イタリア物語」その他—想像の富贍—警句の巧致—「ヒポクラテイーズの樞」—その內容—その一節—文體—晩年と「自叙傳」
ダクインシ・トマス——略歴—文學語學の天才—阿片の喫用と空想—「阿片喫用の自白」—その一節—その內容—「サスピリア・ダ・プロフアンデイス」「英國乘合郵便馬車」—作家の經驗—文體—小說「クロスエルハイム」——浪漫的な物語—「スペインの尼ざむらひ」—その內容—「雜組種族の遁走」—その內容—分析的特異性—「マクベス劇門敲きの場面」「殺害の藝術的考察」—「自叙傳的小品」—「湖水派詩人の面影」

第四節　サヴイヴ・ランドオの詩と散文……三六

ランドオ・ウオルタ・サヴイヴ——略歴—ランドオの性格—「自らを歌へる」—古典の造詣—長詩「ゲバー」—「イデイリカ・ヘロイカ」「ヘレニツクス」—悲劇「伯爵ヂュ・リアン」—その內容—散文の力作—「文學者政治家の假定の對話」—その內容—崇高な思索—錄心清冢の文字—「ヰリアム・シエイクスピーアの召喚と吟味」—古典の香ひ—「ペリクリーズとアスペイヤア」—「五日物語」—ペイタとランドオ—古典主義の新傾向

英文學史

（ドライデン時代よりヴィクトリア王朝初期迄）

文學士　小日向定次郎著

第一篇　ドライデン時代

第一章　王政復古時代の散文

第一節　王政復古期世相の一瞥

イリザバス時代が朝野を擧つて奢侈を極めた事情は詳しく說いたつもりである。王政復古期が又上下共にイリザバス時代に足をかけたほどの贅澤をしてゐたことから、その華美淫蕩な風潮が此時代の文學にどう反映してゐるか調べて見たい。

贅澤が最も目につき易いのは婦人の服裝であることは誰も知るところである。イリザバス時代の婦人の衣服の地質が凡て絹布繻珍天鵞絨など高價なものであり、精巧な綿紗や笹縁のカラやカフス

を用ゐたのはまだしも、三ッ揃の手袋を重ね、一番上側のひとつには目も綾な刺繍をしたものもあつたと言ふことである。耳輪を掛けたり、白粉をつけたりした習慣も此時代から生じたものである。紋日物日に子供に被せた服裝などよくその贅澤を表はしてゐる。絹布や繻珍などは珍らしくはなく靴下𦇚まで絹布を用ゐ、琥珀織の頸圈や領襟、刺繍の帶、栗鼠の毛皮で飾つた外套をつけさせ、さうして一ケ年に靴を五足も穿きかへさせたものもあつたさうである。然るに清教主義のクロムウエルの政治に移つてから、萬事萬端質實簡素を尙ぶやうになつた。笹縁もカフスも廢れた。外套もズボンも一切裝飾を避けた。衣服の色合も地質も地味なものを擇んだ。肩過ぎるまで長く垂らした捲れ髪をおつ被つた彼カヴリア風俗を嫌つて、坊主刈に頭を丸めたものが多かつた。ところがチャールズ二世の復位と共に、時代の風潮は急轉直下して衣食住共に華美に流れた。「昔は耻づべきことになつてゐた、女の脂粉を施すことが流行し始めた」と、イーヴリンもその日誌に記してゐる。チャールズ王はネル・ギン（Nell Gwyn）と言ふ素性賤しい傳法肌な女優を寵愛して、何十萬の金を消費し、なほ幾人も情婦を有つて居たほど放埒であり、淫蕩であつた。讀書好きと言ふ程ではなかつたけれども、文學の趣味もあつたし、頗る機智に長じてゐたらしい。が、その豪奢な生活振りは矢張りイーヴリンの日誌に出て居る。千六百六十七年二月十八日の處を見ると、「宮中演藝場で催された假面舞踏會を拜觀した。兩陛下を始め、お歴々の貴族達や貴婦人方が皆舞踏をされたが、その濃艶な刺繍の相應しい扮裝は限りなく華美やかなものであつた」とあり、又次の十九日には「宮中で喜劇を拜觀し、午後セント・ジェイムズ公園で一磅の觀覽料を拂つて相撲を見たが、陛下も御臨幸にて、力士は西方と北方に別れ、多數の貴紳の前に勝負を爭ひ、モリス秘書官殿と、ジェラード卿が行司をされた。勝は西方に皈した。賭事の金高は莫大なものであつた。」とあるのに徵しても、百數の大宮人は言ふまでもなく、一般の民衆まで、舞踏觀劇その他の歡樂に耽つてゐたことが推測される。千六百六十七年と言へば英國民にとりては黑死病の流行に加へて、商業の關係から和蘭との國交斷絶し、民心の大動搖を生じた記憶すべき千六百六十四年を隔ること僅に三年で、尙交戰狀態にあり、更に記憶すべきランダンの大火に依つて經濟的大損害を蒙つた千六百六十六年の翌年である。黑死病の流行は五月に始まつて、七八九の三ケ月に亘り猛威を逞うし、毎週死亡者二千人内外を數へた。貴族や富豪等は一人として市に止まるものもなく、軒並の商賈は悉く店を鎖して、唯死人を搬ぶ人夫の影のみが忙しかつた。全市悽愴の氣に充ちて、流言蜚語は頻りに行はれた。四十餘日の内にランダンの市は全滅すべしと言ひ、かつかともる石炭を鍋に盛つて、それを頭上に載せた狂人は、裸體のまゝ街中を飛び廻つて、天罰が市民の上に降つたのだと叫んだ。その恐怖の未だ全く去らなかつたその翌年の九月二日の夜に、熱鬧な市の一角から發した火は、吹きつのる東風に煽られて町數四百餘り、戸數一萬三千有餘を烏有に皈せしめた。殆んどつるべ打の災禍の中にあつて、王室の遊興は

毫末も衰へず、しかも朝野の奢侈放埒はますます度を加へて行つた。殊に上流婦人の淫奔はお話しにならない程激しかつた。而して假面と變裝の流行はそれらの女性の道德の頽廢を助長したものであつた。女王を始め、リッチモンド公爵夫人、バッキンガム公爵夫人などが、或時田舍娘に變裝してオードリ・エンド (Audley End) の緣日見物に出掛けたところ、どう身を扮してもその風雅な服裝や、氣取つた物の言ひ振から、倏ちそれと感付かれて、ほうほうの體で立ち去つたさうである。人目を包んで劇場その他のさかり場に出入した貴婦人達が膏藥を飾りにべたべたと顏に貼り、或は假面を被つたことは當時の風習であつたが、假面を被らないものを素面 (bare faced) と言つてひどく賤んだ傾きがあつた。良人のある身で變裝や假面にかくれて密男と媾曳をした上流の女性達こそどんなにか卑しむべきものであつたか知れない。決鬪も流行のひとつで、色戀が多くはその原因であつた。シュルーズベリ伯爵夫人がバッキンガム公爵と道ならぬ交際を結んでゐたのを伯爵が探り當て、公爵に決鬪を申し込んだが、不幸にも伯爵の方が重傷を受け、二ケ月餘りして世を去つた。然るに伯爵夫人と公爵との醜い關係は依然繼續して、道德心の弛みきつた時代ながら、世人はさすがに彼等の厚顏無耻に驚かされたさうである。而も伯爵夫人は公爵の身を按じ、小性姿に身を扮して、決鬪の場所に臨んだどさへ傳へられてゐる。風俗の紊亂、道義の廢頽は殆んどその極度に達して、千六百六十七年にクラレンドン伯の政治的勢力の失墜と共に組織されたカバル内閣 (Cabal

Ministry) の如き、陰謀に次ぐに陰謀を以てし、その無主義と無節操に於て比類なきものであつた。彼等は又羅馬舊教に加擔し、英國々教に反對して、國民の疑惧を招いた。王チャールズは舊教に歸依せるフランス王室に身を寄せて舊教に志があつたし、千六百七十年ドウヴ (Dover) の秘密條約に調印して、ルイ十四世から年々二十萬磅の補助金を受け、英國に内亂のあつた場合フランス軍隊の援助を借ると共に、一方ルイ王の野心を充たす爲に、スペインやポーランドを敵とし、フランス軍と協力して戰ふことを約束し、且舊教を信奉することを誓つた。然しチャールズ王は死の床に臨むまではその舊教の信仰を公にしなかつたけれども、子のジェイムズ二世は公然舊教の信仰を公表した爲に、國民は千六百七十九年に「排斥案」(Exclusion Bill) を議會に提出して、王室の上にさへ抑制の力を延べた。チャールズ王の治世二十五年間に内閣の更迭は頻繁に行はれて、政黨の爭ひも一際目立つやうになつた。而して民黨員 (Whigs) と王權黨員 (Tories) の二大政黨の樹立を見たが、民黨員は國教にも憚らず、又舊教を忌んだ國教違背者 (Dissenters) が多かつたし、王權黨員は田舍の豪士や僧侶など王室を中心とした保守的頭腦を有つたものが大部分を占めてゐた。さうして兩政黨共に宗教的色彩が頗る濃厚であつた。一般の社會と同樣に政治家の放蕩を慨嘆したマコーリの文章を引いて見よう。

Scarcely any rank or profession escaped the infection of the prevailing immorality; but

those persons who made politics their business were perhaps the corrupt part of the corrupt Society. For they were exposed not only to the same noxious influences which affected the nation generally, but also to a taint of a peculiar and of a most malignant kind. Their character had been formed amidst frequent and violent revolutions and counterrevolutions. In the course of a few years they had seen the ecclesiastical and civil polity of their country repeatedly changed. They had seen an Episcopal Church persecuting Puritans, a Puritan Church persecuting Episcopalians, and an Episcopal Church persecuting Puritans again. They had seen hereditary monarchy abolished and restored. They had seen the Long Parliament thrice supreme in the state and thrice dissolved amidst the curses and laughters of millions..... They had seen a new representative system devised, tried, and abandoned. They had seen a new House of Lords created and scattered. They had seen great masses of property violently transferred from Cavaliers to Roundheads, and from Roundheads back to Cavaliers. During these events no man could be a stirring and thriving politicians who was not prepared to change with every change of fortune. It was only retirement that any person could long keep the character either of a steady Royalist or of a steady Republican. One who, in such an age, is determined to attain civil greatness must renounce all thought of consistency. Instead of affecting immutability in the midst of endless mutation, he must be always on the watch for the indications of a coming reaction.

(" *The History of England*." *vol I. P 179.*)

斯うまで精しく當時の世態に通曉し、所謂君子豹變の政治家達の胸中を見透かした批評はマコーリでなくては出來ないと思ふ。兎に角に此時代は官吏も政治家も、僧侶も實業家も、貴族も平民も、女も男も、世を擧げて操志の堅實を欠いてゐた。風船玉のやうにふはふはしてゐた。道德は全く地を掃つてゐたと言つても差支へはない。その人情世態が此時代の文學にはつきりと反映されてゐる。ウイッチャリやコングリーヴ以下の戯作家の筆に寫され、ドライデンその他の詩人の諷刺詩に歌はれ、さうしてイーヴリンやピープス達の日誌に書き殘されてゐるのである。先づイーヴリンとピープスの日誌から始め、一わたり散文を見てから、詩と戯曲に及ぼして見よう。

散文を先にしたのは散文を重く見たわけではない。次のポウプ乃至ヂョンスン時代に比べると極めて貧弱である。ドライデン時代の散文家と言へば上記のイヴリンとピープスとドライデンを除いたら、政治家のウヰリアム・テンプル、哲學者のヂョン・ロック、ハリフアックス侯爵ジョージ・サヴイル、閨秀作家のアフラ・ベーン、宗教家のヂョン・テイロットスン、ロバト・サウス、ギルバートバ

ーニット及びトマス・バーニット位なものであらう。

第二節　二つの珍らしき日記

ヂョン・イーヴリン（John Evelyn）は千六百二十年ドーキングに近いウオットンといふ所で生れた。富裕な親を有つて、オクスフアドのバリオル大學やミッドル・テンプルで學問を修めた。四ケ年餘り大陸を漫遊して、二十七歳の時フランスのパリで、全權大使の娘メアリ・ブラウンといふ才媛を妻に迎へ、八十六歳の高齢を保つて幸福な一生を送つた。チャールズ一世と、クロムウエルと、チャールズ二世と、ジェイムズ二世及びウヰリアム三世の五代に亘る政治上の變遷を體驗し、その間に屢々要職に就いた。チャールズ二世とジェイムズ二世からは殊遇を受け、當時の閣僚や知名の人達との交際も廣かつたので、書き殘した日誌はこの時代を考察するに得難き資料となつてゐる。彼はフランス語、イタリ語及びスペイン語に精しく、學問は深いことはなかつたらしいが、頗る博かつた。三十有五の作物を書いたが、繪畫、彫刻、建築、貨幣制度、歴史、政治、道德、教育、農業　商業並びに園藝などの、雜多の問題に觸れてゐた。その内で名高いのが例の日誌 "*Diary*" と「銅版術」"*Sculptura, or the Art of Engraving on Copper*" と「木材論」"*Sylva, or a Discourse of Forest-Trees*" である。イーヴリンの名はその日誌と結び付いて記憶に止まるけれども、日誌は彼の骨を埋めた故郷のウオットンで千八百十七年に偶然古葛籠の底から發見されたもので、それまでは「木材論」の方が名高く、シルヴ・イーヴリン（The Sylva Evelyn）の名で通つてゐた。然し文學的價値を有するものは日誌であることは言ふまでもない。先づ自分の生年月、兩親の名、父の風貌性格など細かに記し、千六百四十一年の一月二日の父の葬式の日から正式に日誌をつけ始めて居る。

1641. 2. Jan. We at night followed the morning hearse to the church at Wotton, when, after a sermon and funeral oration, my Father was interred neere his formerly erected monument, and mingled with the ashes of our Mother, his deare wife. Thus we were bereft of both our parents in a period when we most of all stood in need of theire counsell and assistance, especially myself, of a raw, veine, uncertain, and very unwary inclination.

など情味ある筆である。六十五年間の日誌の記事は多方面に亘つて居るけれども、イーヴリンもピープスも黑死病と大火の記事は最も力を罩めて居る。千六百六十六年九月二日「此不幸な夜の十時頃、悲しむべき火は、ランダンの肴町附近に始まつた」と記し、その夜から三日四日五日に亘り、繁華な街々を燒いたときの、市民の狼狽の光景を目に見るやうに寫してゐる。

The Conflagration was so universal, and the people so astonish'd, that from the beginning, I know not by what despondency or fate, they hardly stirr'd to quench it, so that there

was nothing heard or seene but crying out and lamentation, running about like distracted creatures, without at all attempting to save even their goods; such a strange consternation there was upon them, so as it burned both in breadth and length, the Churches, Public Halls, Exchang:s, Hospitals, Monuments, and ornaments, leaping after a prodigious manner from house to house and streete to streete, at greate distances one from the other; for the heate with a long set of faire and warme weather had even ignited the aire and prepar'd the materials to conceive the fire, which devour'd after an incredible manner houses, furniture, and every thing…… Thus I left it this afternoon burning, a resemblance of Sodom, or the last day. It forcibly call'd to my mind that passage — non enim hic habemus stabilem Civitatem: (for here we have no continuing city.) the ruines resembling the picture of Troy. London was, but is no more!

ピープスの日誌にもランダンの大火の記事が詳しく載つてゐる。イーヴリンとピープスはその閲歴に相違があり、性格も異つてゐる。日誌の書き方も同じでないのは當然である。例へば芝居を見に行つてもピープスは沙翁の中「眞夏夜の夢」を評して、To King's Theatre, where we saw "Midsummer's Night's Dream," which I had never seen before, nor shall ever again, for it is the most insipid, ridiculous play that ever I saw in my life. (29 th, sep., 1662) と貶し、「オセロ」を讀んでは「俺はこれまで此劇を非常に立派なものだと思つてゐたが、ルーク (Sir George Luke) の書き卸した「五時間の冒險」"*The Aventures of Five Hours*" を近頃讀んでからは全くくだらないものに思はれる」と言ひ、又或時の如き、舞臺との距離が遠くて臺詞などよく聽き取れなかつたせいもあつたらうが、フォックス夫人とひとつ席に細君が見物してゐるのを見付けて、「俺の家内の外には美人らしい女は一人も居ない」と惚けてゐるのに引きかへ、イーヴリンは To a new play with several of my relations, "The Evening Lover," a foolish plot, and very profane; it afflicted me to see how the stage was degenerated and polluted by the licentious times (19th, June, 1668) など極めて眞面目である。趣味や鑑識は別問題として、兩人の性格の一端が覗かれる心地がする。

○サミユエル・ピープス (Samuel Peyps) は、千六百三十三年に生れて、イーヴリンより十三も年齢が少かつた。相當の家柄ではあつたが、父親はランダンの裁縫師から身を起した人である。ピープスは聖ポール學校から進んでケンブリッヂのモードリン大學に入り、二十三歳の時には、親戚のサンド井ッチ伯の秘書官になつた。サンド井ッチ伯はチャールズ二世がフランスから飯つて來た時分その艦隊の司令官だつた。そんな關係で海軍秘書官の要職に就くことが出來た。感傷的な小心

な人であつたが、それだけ職務には忠實であつた。勤勉な役人と言ふ丈で、イーヴリンの如き學者ではなかつた。若しピープスに日誌がなかつたら、文學史上に名を記される人ではないのだが、その日誌は頗る振つたものである。禁廷にも出入し、諸處の會合にも交り、朝野の噂小噂を小耳に挾んで、筆まめに日誌に書いてゐた。隨分聞きづらいことを聞きもしたらう。目障りなものを視たでもあらう。それを有の儘に書くことは、身分柄憚られたに相違ない。だから日誌には一種暗號を使つた。さうしてイーヴリンの場合と同じに、彼が死んでから、二百年餘り、誰にも讀まれずに居たものだが、その符牒を讀みこなした人が出來て、千八百二十五年になつて出版されたのである、が大分の省略は免れなかつた。ピープスの日誌はイーヴリンの樣に長年月に亘つたものでない。千六百六十年から千六百六十九年に至る十ケ年の日誌である。然し此十ケ年の日誌はイーヴリンが六十五年間に記した位の分量を有つてゐる。戰爭や、疫病や、ランダンの大火は言ふまでもなく、政治的陰謀も記されてゐる。上流婦人の醜聞も書かれてゐる。劇場の狀況から、流行の衣服から、贅澤な食事から、滅多には洩らすまじき作家自身の家庭の秘事さへ、洩さば賤しまるべき自身の氣質までも筆にしてゐるのである。

April 23rd. …… Spent the evening with my father. At cards till late, and being at supper, my boy being sent for some mustard to a neat's tongue, the rogue staid half an hour in the streets, it seems at a bonfire, at which I was very angry, and resolved to beat him to-morrow.

24th. Up betimes, and with my salt eele went down into the parlour and there got my boy and did beat him till I was fain to take breath two or three times, yet for all I am afeard it will make the boy never the better, he is grown so hardened in his tricks, which I am sorry for, he being capable of making a brave man, and is a boy that I and my wife love very well.

ランダンの大火の記事に就いては、延燒を食ひ止めるために火先の家を壞ち倒せよとの王命を市長に傳へたピープスが使者に立つたときの實驗を記してゐる。

At last met my Lord Mayor in Canning Street, like a man spent, with a handkerchief about his neck. To the King's message, he cried, like a fainting woman, "Lord! what can I do? I am spent: people will not obey me. I have been pulling down houses; but the fire overtakes us faster than we can do it." That he needed no more soldiers; and that, 'for himself, he must go and refresh himself, having been up all night. So he left me, and I him, and walked home; seeing people all almost distracted, and no manner of means used to quench the fire.

常の火事に見る美しい焰の色でなく、宛然鮮血を漂はしたやうに空一面に漲つてゐる火炎を見ると、泣かずには居られないと言つてゐる。イーヴリンの文體と較べて、品位を欠いでゐる代りに、生々と強い感じがする。イーヴリンとピープスは親交があつたと言つた。此大火の年の前年十一月五日の條にピープスがイーヴリンを訪ねて、イーヴリンの所藏の版畫や水彩畫なども見、イーヴリンの作つた詩や脚本など讀んできかせて貰つたことも日誌に出てゐる。「詩にはエピグラムで一つ二つ好いものがあつたが、脚本はイーヴリンが得意がつてゐたほど結構なものではなかつた」など、口が惡い。ピープスは劇通であつたばかりでなく、書畫を蒐め、骨董弄りもして、相當の鑑識を備へてゐたのである。ピープスとイーヴリンが、たがひに往來はしながら、日誌をつけてゐたことはどつちも知らなかつたさうである。浮世繪の卷物を擴げたやうに、その時代の世相風俗を寫して、言ひ合はせたやうに二つの日誌が、文學史上の骨董物として珍重されてゐるのは、面白いことである。

第三節　英國近代文を基礎づけたる文人

ピープスとイーヴリンの散文を見た後、第一にドライデンの散文を見るのが順序であるけれども、それは詩人としての・又戲曲家としての、ドライデンを扱ふ時に讓つて、その他の散文家を先に片付けて置かう。

「ガリヴの旅行記」の著者スヰフトと深い關係のある、サー・ウヰリアム・テンプル（Sir William

Temple）は、千六百二十八年にランダンに生れた。父は名高い法學者であつたので、テンプルも又ケンブリッヂで法律を修めたが、學位を取らずして學校を去つて、大陸漫遊の途に上ぼつたのは十九歳の時だつた。王政復古の後、外交家として屢々手腕を振つたが、千六百六十八年ヘイグ（The Hague）に全權大使として滯在して居た時分、フランスに對してオランダ、スヰーデンと共に三角同盟を結ぶことに成功したことなど著しい功勞であつた。チャールズ二世から二度まで國務卿として入閣を慫慂められたけれども、固辭して受けず、黑幕にかくれて劃策するところが多かつた。ヰリアム三世の如き彼を國家の功臣として尊重し、彼の忠告を求めたと言はれてゐる。五十の坂を越えて間もなく、全く公職を棄てゝ、サリ州のムア・パークに隱退したが、スヰフトが彼の秘書官として働いたのはその時分のことである。テンプルの書いたものでは「言行錄」"*Memoir*" と「論文集」"*Essays*" とがある。詩と音樂の効果を論じて斯う言つてゐる。

Whether it be that the fierceness of the Gothic humours or noise of their perpetual wars, frighted away, or that the unequal mixture of the modern languages would not hear it, certain it is that the great heights and excellency both of poetry and music fell with the Roman learning and empire, and have never since recovered the admiration and applauses that before attended them. Yet such as they are among us, they must be confessed to be the softest

and sweetest, the most general and the most innocent amusements of common time and life. They still find room in the courts of princes, and the cottages of shepherds; they serve to revive and animate the dead calm of poor or idle lives, and to allay or divert the violent passions and perturbations of the greatest and the busiest men; and both these effects are of equal use to human life; for the mind of man is like the sea, which is neither agreeable to the beholder nor the voyager, in a calm or in a storm; but is so to both, when a little agitated by gentle gales; and so the mind, when moved by soft and easy passions and affections.

(From "*The Essay of Poetry.*")

ドライデンやサヴイルの散文がさうであるが、措辭の上に細心の注意が拂はれて、氣品の高い而も平明な文章である。近代文の建設者の一人と見做されてゐるのは無理もない。

同じ文體の改革者の他の一人はハリフアックス侯ジョージ・サヴイル（George Savile, Marquis of Halifax）である。サヴイルは千六百三十三年にヨークシイアの舊家に生れ、王位復興に助力した功勞に對して、千六百六十八年ハリフアックスの子爵を授けられた。スチユアト家が遵奉した宗教を好まなかつたけれども、此王家を愛重した。ヨーク公爵の政策を嫌ひながらも、ヨーク公爵に不利な排斥案に反對した。さうして其排斥案の否決を見たのは全く彼の非凡な能辯の力であつた。千

六百八十二年に侯爵を賜はり、宮內卿となつたが、ジエイムズ二世が卽位するに及んで、樞密院議長の椅子に就いた。井リアム三世が英國に上陸したとき、彼は貴族院議長であつたが、ジエイムズ二世がフランスに脫れたとき、井リアム三世に恭順を聲明して、再び宮內卿に任ぜられた。千六百九十年全く政界を退き、五年して世を辭し、ウエストミンスタ寺院に葬られた。君子豹變の譏がないでもないが、時代が時代であつたし、政權に與かる身としては、個人の利害よりも主義よりも、國民の福利と國家の安泰を重視した結果に外ならないのであつた。若し强ひてその主義の朝三暮四を責めるなら、ドライデンの如き純文學者すら、その咎めを脫ることが出來なかつたのである。彼のこの立場を明にしたものが名高い「日和見の特徵」"*The Character of a Trimmer*" である。

This convenient word, *Trimmer*, signifies no more than this, that if men are together in a boat, and one part of the company would weigh it down on one side, another would make it lean as much to the contrary: it happens that there is a third opinion of those who conceive it would do as well if the boat went even without endangering the passengers. Now, 'tis hard to imagine by what figure in language, or by what rule in sense, this comes to be a fault, and it is much more a wonder it should be thought a heresy.

雜多の問題に觸れた論文集に當る一卷の「雜錄」"*Miscellanies*" がある。テンプルの筆と同じく

上品で明快であるが、テンプルよりも世間知りであつたらしい證據は、屢々きびきびとした簡潔な警句となつて表はされてゐる。

政治家と宗教家と、畑こそ違ふけれども、同じ雄辯家のヂョン・テイロットスン（John Tillotson）は、千六百三十年にヨークシイアのハリフアックスに近いサウアビ（Sowerby）に生れ、ケンブリッヂで修行し、タレア・ホールの特待校友であつた。リンカーンス・インの傳道師から身を起し、カンタベリの扶持持ちの僧となり、副監督となり、遂に監督長にまでなつたが、その職にあること僅に三年で千六百九十四年に死んだ。死後に出版された「法談遺稿」"*Posthumous Sermons*"は平易で明晰で而もよく洗練された文章であつて、テンプルやサヴイルのそれに比して少しも遜色を見ない、新しい近代散文の模範とされてゐる。

宗教家でもロバト・サウス（Robert South）は、テイロットスンとは稍毛色が違つてゐた。同じ商人の子ではあつたが、サウスははえぬきのランダン兒であつた。學問はオクスフアドのクライスト・チャーチで修めて、特待校友に選ばれたところを見ると、テイロットスンと同じ優秀な成績を擧げてゐたものであつたらう。僧侶の資格を取つてから傳道師として名を知られ、クラレンドン家の禮拜堂所屬の牧師となり、ウエストミンスタ寺院の扶持持ち僧となり、クライスト・チャーチの評議員となり、イスソップ教會の牧師となつた。晩年には副監督や監督になる機會はあつたけれども、

その職に就くことを肯じなかつた。而して八十二歳の天壽を全うして、骨をウエストミンスタ寺院に埋めたのは千七百十六年であつた。深い學殖に加へて、鋭い機智を有つてゐた。セント・ポール寺院の副監督シャーロック博士と戰はせた宗論は、白熱化し、サウスの毒舌は辛辣を極めて、遂に王自身仲裁に立つたほど、一時市民はその話しで持ち切つたさうである。サウスが遺した作物の主なるものは「法談」"*Sermons*"であるが、流暢で而も底力のある文章に、特獨の冷評と機智が流れてゐる。その法談の一つに貪慾を説いたものがある。際限もない人間の慾望は手が百本あれば、その百本の手は皆拾ひ集め引き掴むことに使はれる。取るばかりで與へない、貰ふばかりで還さない、丁度死と墓とが此世界からその獲物を奪ひ取つて、決して返すことをしないのに似てゐると説き進めて、金を蓄めるもよいが、それは徐々にすべきものだと言つてゐる。

For nobody perceives the grass grow, or the shoadow move upon the dial, till after some time and leisure we reflect upon their progress. In like manner, usually and naturally, riches, if lawful, raise by degrees, and rather come dropping by small proportions into the honest man's coffers, than pouring in like a torrent or land-flood, which never brings so much plenty where at length it settles, but it does as much mischief all along where it passes.

神學者で知名の人がサウスの外に數多あつた。サウスと論戰に火華を散らした井リアム・シャー

ロック（William Sherlock）（1641?—1707）に「三位一體說の辯明」"*The Vindication of the Doctrine of the Trinity*"の快著があり、サリスベの監督ギルバト・バーニット（Gilbert Burnet）（1643—1715）に「宗教改革史」"*An History of the Reformation*"「その時代史」"*An History of His Own Time*"があり、僧職には就かなかつたけれども、神學者として知られたトマス・バーニット（Thomas Burnet）（1635?—1715）に「神聖地上話」"*Telluris Theoria Sacra*"がある。是は又僧職にありながら、科學や文學に越味と造詣を有つたトマス・スプラット（Thomas Sprat）（1635—1713）に「ローヤル・ソサイエテイ史」"*The History of the Royal Society*"や「カウリ傳」"*The Life of Cowley*"がある。文章は達意を旨とすべきもので、對談するやうに少しも潤飾を用ゐず、赤裸々に、自然に書くべきものである、數學的に適確に平明に記さるべきものである。是が彼の持論であつたヂョンスンやマコーリが、彼の文體を推奬したのは此特色を認めたからである。エドワード・ステイリングフリート（Edward Stillingfleet）（1635—1699）も、當時有名の神學者であつた。その學殖に於て、辯論に於て、又人格に於て、テイロットスンと伯仲の間にあつた。異教主義者や拒誓者に對してのその論難攻擊の文が、彼著書の大部分を占めたが、散文家として彼の名を重からしめたのは"*Origines Sacrae*"であつた。ロックの唯理論に攻擊の箭を放つて、論諍を重ねたけれども、ロックの敵ではなかつた。屈辱を氣にかけ、怏々として樂まず、それが原因で死んだとさへ傳へられてゐる。神

學者でなほ記さるべき人は少なくあるまいが、「教條解釋」"*An Exposition of the Creed*"の著者ヂョン・ペアスン（John Pearson）（1613—1686）の名を記して、他の散文家に移らねばならない。

論爭でステイリング・フリートを沈默させ當代の大思想家はヂョン・ロック（John Locke）であつた。精神科學及び自然科學の兩方面に於て異常の進歩を遂げた此時代に、自然科學に於けるアイザック・ニュートンと、精神科學に於けるロックとは、等しく學界の重鎭として推重された。

ロックは千六百三十二年サマシットシアのリントンの生れ、父は辯護士であつた。ウエストミンスタ・スクールからオクスフアド大學に進み、卒業後希臘語及び論理學の講師として教壇に立つた。醫者になる考で、醫學殊に藥物學の研究に志した。喘息を病んでその研究を棄てなければならなかつたけれども、醫學に精しかつたのがシャフツベリ伯の知己を結ぶ緣となり、伯の家庭に入つて子息達の教育の任に當り、知名な政治家や文學者に接觸する機會を作つた。シャフツベリ伯の進退につれて、或は官途に身を置き或は外國に遁れたこともある。それまで發表した彼の學說が母校クライスト・チャーチの學者達の反感を買ひ、特待校友の名を除かれたのみならず、哲學上の反逆的煽動者として、邪教主義の巨魁として危險人物視された。時勢は一變した。千六百八十八年のその革命の年、井リアム三世を迎へたその船に陪乘して、ロックは英國に皈ることが出來た。和蘭に送つた五ヶ年の追放の憂き月日は、耀はしい而も生き効のある十六年を以て報ゐられて、七十二歳で

心靜に世を辭した。ロックの「人智論」"*An Essay Concerning Human Understanding*" は英國の哲學史上に見落すことの出來ない名著である。彼は此書を成すに十八年を費したと言はれてゐる。嚴正な推理力と、精密な觀察力を傾倒したものであつて、彼が全生涯の考察と回想の大要であつた。凡ての觀念、凡ての智識を經驗に基づけたロックは、ベイクン（Bacon）の門弟たるの觀がある。彼はベイクンを研究した、ホッブス（Hobbes）を讀破したが、彼等の亞流ではなかつた。より深い思索家であり、より尊い哲學者であつた。然し彼は文學者ではなかつた。文學的作物は一つもなかつけれども、一種の卓越した散文家であつた。彼自身が淡泊な常識に富んだ、而して少しも學者振つたところのなかつた人であつたが、その文體が又その人を能く示してゐる。「教育意見」"*Thoughts on Education*" に批評的研究の必要を力說すると同時に、文章はすらすらと品よくさうして明瞭に書くことを心掛けねばならないと言つてゐる。眞の宗教と言ふことを說いたものに斯うある。

Whoever will list himself under the banner of Christ, must, in the first place and above all things make war upon his own lusts and vices. It is in vain for any man to usurp the name of Christian without holiness of life, purity of manners, and benignity and meekness of spirit. "Let every one that nameth the name of Christ, depart from iniquity. Thou, when thou art converted, strengthen thy brethren," said our Lord to Peter (Luke xxii.). It would

indeed be very hard for one that appears careless about his own salvation, to persuade me that he were extremely concerned for mine. For it is impossible that those should sincerely and heartily apply themselves to make other people Christians, who have not really embraced the Christian religion in their own hearts. .....

(From the first "*Letten on Toleration.*")

ロックは又教育家であつた。爾來英國の教育が專ら力を語學に用ゐ、教授の方針も詰込主義壓迫主義に傾いてゐたのに對し、教材も、教授法も、自由に、寬潤に、さうして物の役に立つべき方法を採るべきことを說いた教育論は、ルーソオ（Rousseau）すらその著「エミール」"*Emile*" に移入することを躊躇しなかつた卓見であつた。

學問に忠實に、さうして道心堅固に、生涯を貫ける克己的生活は、洵に一代の師表と仰がれた人格を、ロバト・ボイル（Robert Boyle）に見ることが出來る。

ボイルは千六百二十七年マンスタのリスモー・カースル（Lismore Castle）に生れた。コーク伯の十四人目の子であつた。イートンで修行し、海外に遊ぶこと六ケ年、皈英してから物理化學の研究に沒頭した。彼の如き俗人にして神學の造詣と厚い信仰を有つた人は稀れであつた。東洋に於けるキリスト教宣傳に努力し、自費を以て聖書の飜譯を頒布した。ローヤル・ソサイテイの最も早き會員

の一人として、會頭に推されたけれども承けなかつた。イートンの學長に擧げられたけれども拒絶した。授爵の恩命が降つたけれども固辭した。さうして只深く學問の道に精進して行つた。彼は單なる科學者ではない。ベイクンの實驗哲學を祖述した第一人者であつた。彼の述作は精神的物質的二方面に亘つた六卷の書物となつて殘されてゐる。「形と質の起原」"*The Origin of Forms and Qualities*" など彼の高遠な學說を披瀝したものである。

ロックと親交があり、哲學の上にロックの有した地位を科學の上に占めたアイザック・ニュートン（Sir Isaac Newton）の名を逸することは出來ない。ニュートンは千六百四十二年にリンカーンシイアのウールスソープ（Woolsthorpe）に生れ、グラーンタム（Grantham）の語學校からケンブリッヂのトリニテイ・コリッジに入つて科學を研究した。二十四歳の時林檎の落ちるのを見て宇宙の重力律の暗示を得たのは、周知の事實である。同校の敎授として敎鞭を握りながら、重力學に、光學に、天文學に、新しい發見を重ねて、周圍の學者達から深甚の敬意を拂はれてゐた。一二度その大學から推されて代議士となつたが、五十七歳の時造幣局長に任ぜられ、八十五歳で天壽を終りウェストミンスタ寺院に葬られたまで、忠實に職責を完うした。その間にローヤル、ソサイエティの會頭になり、勳爵士の榮爵を授けられた。終始學者の態度を崩さず、謙讓身を持して、頗る國士の風格を備へてゐた。總じて科學者の書いた文章は平明であるが、ニュートンの文章も、その人を

示して、明晰で敬虔で嫌味がないと言はれてゐる。「プリンシピア」"*The Principia*" の名で知られてゐる物理學上の論文は兎も角「聖書の豫言に關する考察」"*Observatians upon the Prophesies of Holy Writ.*" の如き、文學を科學的に取扱つたものとして珍らしいものに相違ない。又その文體の上からも考慮せらるべき價値があるであらう。

最後に記さるべき散文家はアフラ・ベーン（Afra Behn）である。アフラ・ベーンは英國が生んだ最初の閨秀作家である。彼女は小說を綴つた、戲曲も作つた、詩も書いた。小說家とも戲曲作者とも詩人とも見られる人であるが、散文家として爰處に取扱つて置く。

彼女は千六百四十年にケント州のワイ（Wye）で生れた。父は理髮師であつた。アフラ（Afra は Aphra とも、Aphara とも又 Ayfara とも綴られてゐるが Afra が普通のやうである）が子供の時、西印度へ殖民に出掛けたが、航海の途上で父を失ひ、淋しい、長い月日をその殖民地で過した。十八歳の時に英國に皈つて和蘭人の血を引いたベーンといふ商人に緣付いた。宮廷に出入してチャールズ二世の目に止まり、オランダとの國交が破裂したとき、オランダの事情に通じてゐた關係から、チャールズ王の密意を受け、軍事探偵として、アントワープに赴いた。オランダの艦隊がテムズ川を上りランダンを襲擊する計畫を探知し、いち早く報告したけれど一笑に附せられて了つたさうである。早く良人に死別れて獨身で暮らし、美人であつた爲め艶種も多かつたらしい。女にしては稀有

の經驗と境遇が、文士として世を渡るに都合がよかつた。彼女の書いた喜劇は可なり多かつたが好色の君主や、しやれ者、きまぐれ者、道樂者など、その名からして想像されるが、おほかた雜雜野鄙で讀むに堪へないと言はれてゐる。それでもオトウエイ（Otway）が王の一役を務めたと言ふ、「無理强ひ結婚」"*Forc'd Marriage*" の如き、悲劇と喜劇をちやんぽにしたものや、「丸頭」"*Round Heads*" の如き王權黨の看客で大入を占めたさうである。千六百八十四年に一卷の詩集を公にし三年の後ウオラ（Waller）を悼んだ哀歌などに彼女の詩才を發揮した。小說も三つ四つ書いたが、オルーノコ "*Oroonoko*" が名高い。西印度に居た時分の思ひ出であつて、オルーノコは酋長の名である。彼女は才氣があつて、活潑で、多方面で、當時での新しい女であつたらう。フランスの閨秀小說家として知られたマリー・ラ・ファイエット（Marie La Fayette）と共に、アフラ・ベーンの名は可成知られたものである。ウエストミンスタ寺院に葬られて、今でもその廊下にある、黑い平石に彼女の名が刻まれて殘されてる。

第二章　批評的雰圍氣と露骨なる諷刺詩

ドライデン時代の詩は諷刺詩が目立つてゐる。優しい餘情のある抒情詩は片隅に引き込んで、けばけばしい露骨な諷刺詩が巾をきかせてゐる。譬へば地上の雜菊に光が薄れて、樫にからんだのう

せんかづらの花が、夕日に映えた趣がある。だらしのない不行儀千萬な取卷きの貴族連中と一緒に放縱不羈なチャールズ二世が、芝居見物のその席から、あたり憚らぬ高聲で輕口をきき、思ひ切りむきだしに批評を試みた時代である。外國の使節と共に陪食を仰せつかつたロチスタ（Rochester）が、使節の手前も憚らず、國王の面前も顧みず、キリグルー（Killigrew）に平手打を食はせても、大目に見こぼされたり、王の氣に入りのセドリ（Sedley）やバクハースト（Buckhurst）が、酒に醉ひ、一晩中殆ど丸裸體で市中を飛び廻はり、ふざけ散らした揚句、喧嘩をしでかし、夜警の巡査に咎められ叩かれたのは當然だが、巡査が却つて入牢の憂き目を見た亂痴氣不作法の時代である。そのセドリや、ロチスタや、ドーシットや、バツキンガムの公爵などの作つた詩に、よいものゝある筈がなかつた。チャールズが胡弓師に歌はせて興じた、聽くに堪へない淫猥な歌も、彼等道樂者の作つたものであつたかも知れない。總てが斯うであつたから、此時代の諷刺詩も、イリザバス朝にスペンサが歌つたやうな、上品な寓意的なものではなかつた。ドライデンの諷刺詩があるのも、バトラのもじり歌が出たのも、自然の歸結であらねばならない。而してドライデンでもバトラでも、その詩に用ひた詩形が悉く二行宛押韻した Couplets であることに就いてはその理由がある。堅苦しい因襲を打破して、全然氣隨氣儘に振舞つたチャールズの世に、アフラ・ベーンの如き所謂解放された女も現はれた世に、詩形ばかりが何故ヒロイック・カプリットに限られたのであらうか。私は前

に此時代に批評的氣分が漲つてゐたと言つた。一寸とした話しではあるが、ビーブスの如きシエイクスピアの劇に對して、大膽な批評をして居るではないか。物事を批評的に見る必要を說いた學者もあつたではないか。批評をするには何か定まつた規則が必要である。その規則さへ知つて居れば、創作は出來ないでも批評は出來る。作物の眞價を識別する能力はなくつても、その規則から割り出して批評丈は出來ないことはない。さらばその批評の標準とする規則は何處から得たか、それは古典の研究である。當時のフランスは、文學復興熱が高かつた。巧にラテン語を取り容れて、佛語を豐富にすると同時に、詩文に織り込む言葉の撰擇や、文法の規則に細心の注意を拂つた。表現の風致を旨とするやうになつてゐた。斯うした傾向は自ら詩歌戲曲その他の文學的作物に對して一定の樣式を指定し、權威ある規則を生み出した。諷刺詩や批評文學の方面でボアロー（Boileau）、フェーニロン（Fenelon）、ラフオンテーン（Lafontaine）、ラ・ブリーイエール（La Bruyère）の如き文豪の輩出を見たのも、同じ氣運が生んだのであつた。さうしてそれらの諷刺詩や批評の文字には機智の閃めきが見られた。常識の現はれが認められたけれども、總じて同情に乏しく潤ひが缺けてゐた。かくの如きフランス文學の直接の感化を受けた英文學は、引證や引喩や言葉までも、古典の香は高かつたに拘らず、規則にこだわつて、詩も戲曲も、ヒロイック・カプリツトの型に嵌められて終つた。單に技巧の上から見たら洵に完全なものであつたけれども、生氣の潑溂を欠き、本然の自

由を奪はれて、萎靡けてしまつた。刈り込んだ籬を見るやうに、こじんまりと體裁は整つてゐたが、自然生えの林を望むやうな奥床しさはなかつた。唯單に事件の推移や、自然の風物の叙述ならともかく、流れたり淀んだりする人間の感情、死灰のやうに靜かな時と、颱風のやうに狂ふ時とがある。その感情の發露を、どうして毎行五步づゝの對句の定まつ型に入れて表はすことが出來よう。それは無理な註文であるけれども、ドライデン時代の詩人達はそれが最上のものであると思つた。人事を主とした戲曲に至つては、詩よりも更にその形の上に自由であらねばならないのに、之にもヒロウイック・カプリツトを適用して、やがてその失敗を自覺したのであつた。然しながら詩の方面では、この詩形が次の時代のポープに依つて完成され、ヂョンスン時代までも永く維持された。殊に諷刺詩にあつては、殆んど古今獨步の感があるポウプのそれと相俟つて、英詩史の上に異彩を放つてゐる。

第一節　詩人としてのドライデン

ヂョン・ドライデン（John Dryden）は千六百三十一年にオールドヰンクル（Aldwinckle）に生れた。父は清教派の僧侶であつた。ウエストミンスタ・スクールに在學時代からぼつぼつ詩を讀み、譯詩に筆を染め、校長のバズビ（Busby）博士の注意を引き、奬學資金を給與され、ケンブリッヂのトリニテイ大學に進んだのは十九歳の時で、二十三歳でビー・エイの學位を取つて大學を出た。二三年してある劇場の座主と契約して戲曲を書き、可成の收入があつたらしい。從兄弟のギルバート・

ピカリング（Gilbert Pickering）がクロムウエルと親交があり、内大臣として樞要な地位に在つたため、自然クロムウエルに知られてゐた關係から、千六百五十八年にクロムウエルが死去したとき、"*Heroic Stanzas on the Death of Oliver Cromwell*" を書いて彼を頌揚し、深き哀悼の意を表したが、二年程經つかたたない内に「還り星」"*Astraea Redux*" を公にして、チャールズ二世を謳歌し、歡迎の辭を述べてゐる。ドライデンに好意を有たない人の眼からは、いかにも輕佻な人物に見えたであらう。然しそれがドライデンの氣質であつたのだから仕方がない。惡いと思つたことは何時でも捨てゝ、善いと考へたものを以て之に代へるのに躊躇しなかつた。時好を趁ひ風潮に隨つて移る人であつた。父が新教であつたかち子も同じ宗教を守る必要もないけれども、彼はチャールズ二世がローマ舊教に飯依の心があり、清教に反感を有つ人が多かつたとき、公然舊教に改宗した。私行の上にも多少そんな嫌があつた。從妹の一人に愛を求めながら誠意がなく、やがてバークシア伯の娘と結婚したなども、敵側の非難の種になつたらう。然し親戚に可愛い女性があつて、言葉を交える機會が多い丈戀も芽ざすことのあるのは當然で、いつも結婚するものとは定まつてゐないし、クロムウエルを讃美した口からチャールズを歡迎しても、新教から舊教に轉じても、それは時世であつたのだ。敢てドライデン一人を咎むべきことではないと言ふ人もある。とにかくにその妻が馬鹿で、癇癖の強い女であつた爲に、家庭の生活は幸福でなかつたのは事實であるけれども、彼

が王室編史官の職に就き、欽定詩宗に選ばれ、所謂ヒロウイック戯曲なるものが時好に投じて、生活は豈かであつたのも事實である。さうして戯曲に試みた五歩の詩句は、やがてその獨特な諷刺詩に用ゐらるべき詩形の練習として役立つたのである。

既に屢々說いたやうに、千六百六十五年にランダンに疫病が流行した。翌年には大火があつた。オランダとの海戰は一勝一敗であつたが、之等の出來事を材料として千六百六十六年に綴られた詩が「異變の年」"*Annus Mirabilis*" である。戰に勝つた英艦の兵士は、追擊に心が逸り、蘭艦の兵士達はさすがに去るを耻ぢらつた。その海上に、日はとつぷりと暮れて、月影が朧にかすむでゐる。

LXIX.

In th' English fleet each ship resounds with joy,
And loud applause of their great leader's fame:
And, slumbering, smile at the imagined flame.

然るに蘭艦の兵士は意氣銷沈して、再び起てさうにも見えない。全く疲れ果てゝ軍艦上にぐつたりと身を横へてゐる。その夢でさへも英艦の兵士とは悉く異つてゐる。

LXXI.

In dreams they fearful precipices tread:
Or, shipwrecked, labour to some distant shore:
Or in dark churches walk among the dead;
They wake with horror, and dare sleep no more.

此詩に次いで三つの諷刺詩を書いたが、それはもうドライデンが五十路の坂に足を踏みかけた時であつた。王室の恩顧に浴して、全く王權黨員の一人であつた彼は、民黨員の陰謀劃策に對して默視することが出來なかつた。シャフツベリ卿がチャールズ二世の跡を襲つて、王の兄弟のジェイムズの王位に就くことを妨げ、その代りにチャールズ二世の私生兒のモンマス公爵を王位に登さうとした陰謀に對して諷譏したものが名高い「アブサロムとアーチトウフエル」"*Absalom and Architophel*" であつた。聖書の物語を藉りて、チャールズ二世をデヴッド王に、モンマス公爵をアブアロムに、シャフツベリ卿をアーチトウフエルに當てゝある。從つて猶太人は英國人で、ランダンの市がサイオンになつてゐる。筋は斷片的に八つ當りをしてゐるので纏つて話すことは難かしい。又當時の歴史的背景を有たないでは理解し難い。今日ではその筆法と詩形とに注意を曳くより外、餘り感興を誘らない。爰處に引用する數行の詩に見えるシメイ（Shimei）と言ふ人物は、實はスリングスビ・ベセル（Slingsby Bethel）のことである。ベセルの父は忠實な王黨員であつたが、ベセルは屈指の共

和黨員であつた。千六百八十年にランダン市の行政官の一人に選ばれたけれども、風變りな男で薄汚いちやぶ屋に部屋借りをして、その職務にあつた間、たゞの一度も馳走を人にしたことがなかつたほどのしまりやであつたところから、to Bethel the City が客嗇の通り言葉になつた。ドライデンは彼の極度の客嗇と極端な過激主義を、斯う皮肉り且つ譏笑してゐる。

Thus heaping wealth, by the most ready way
Among the Jews, which was to cheat and pray;
The City, to reward his pious hate
Against his master, chose him magistrate.
His hand a vare of justice did uphold,
His neck was loaded with a chain of gold.
During his office treason was no crime,
The sons of Belial had a glorious time:
For Shimei, though not prodigal of pelf,
Yet loved his wicked neighbour as himself.
When two or three were gathered to declaim

Against the monarch of Jerusalem,
Shimei was always in the midst of them:
And, if they cursed the King when he was by,
Would rather curse than break good company.
.....
Chaste were his cellars, and his shrieval board
The grossness of a city feast abhorred:
His cooks with long disuse their trade forgot;
Cool was his kitchen, though his brains were hot.
Such frugal virtue malice may accuse,
But sure 'twas necessary to the Jews:
For towns, once burnt, such magistrates require,
As dare not tempt God's providence by fire.

一行十音節の對句は滑らかに且つ強く相手の急所を衝いて、寸分の隙もない。譬へば二頭立の戰車を列ねて驀地に敵の牙營に肉迫するの觀がある。ヒロウイック・カプリットは決してドライデンの獨創にかゝはるものではない。チョーサの古い昔に溯るまでもなく、近くミルトン時代に於てウオラカウリや、デナムや、ダビナント達が之を試みてゐる。然し諷刺詩に之を適用したのはドライデンが始めである。古典的諷刺詩として、新しき詩の一派を開いたのは彼の功績であらねばならない。此詩に對する辯難の諷刺詩が數限りなく書かれ、それが皆ドライデンの採つた詩形を踏襲したものであつた。それはとにかく、ドライデンは此諷刺詩に依つてシャフツベリ伯を倒す考であつたが、その豫期は裏切られた。シャフツベリ伯は無事に出獄したばかりか、世人は全くシャフツベリ伯を正しい人物と信じてゐたため、その釋放を祝つてメダルを鑄た。表には伯の肖像があり、裏面にはランダン塔が附してあつた。ヨーク公爵一味のものは皆之を胸につけた。チャールズは之を不快に感じて、ドライデンにその意を洩らしたので、その暗示から生れた第二の諷刺詩が「メダル」"*The Medal*" であつた。それに對して、トマス・シャドウエル（Thomas Shadwell）といふ反對側の詩人が、ドライデンの私行まで摘發して、がみがみと口汚く罵詈したのに對し、フレクノウといふ貧弱な一詩人の子にシャドウエルを見立て、シャドウエルの名を記して眞正面から殆んど完膚なきまでに擲きつけたものが「マク・フレクノウ」"*Mac Flecknoe*" であつた。「メダル」は三百二十行餘り、「マク・フレクノウ」は二百行餘りの短いものであるが、續いて「アブサロムとアーチトウフエル」の後篇を公にした。略ぼ前篇ほどの長さであるが、質に於ても前篇よりは劣るばかりでなく、

大部分は[illegible]子のネイハム・テイト（Nahum Tate）の筆に成り、ドライデンはその六分の一餘りしか書かなかつたのである。「アブサロムとアーチトウフエル」の前篇が千六百八十一年の十一月に公にされて以來、以上の長短四篇の諷刺詩は約一ヶ年の間に書かれたものである。孰も黨派的色彩の濃厚なものであるが、その諷刺の筆は宗教道德方面に轉じてゐた。「アブサロムとアーチトウフエル」の後篇を出したその同じ月の十一月に「俗人の宗教」"*Religio Laici*" が出版された。ウヰクリフ以來聖書の研究解釋が個人の自由に任されて、宗派を生み、その間に意見の杆格、感情の衝突が絶えないのを見て、イングリッシ・チャーチの如き根差しの強い宗派によつて導かれるのが、安全であると思つた。餅屋は餅屋である。宗教上の研究は矢張り神學者達がやるのが當然である。妄に俗人の行ふべきことではないと考へた。這般の消息を含んだ此詩は他の政治的諷刺詩と同じに、潤飾に乏しい一種の論辯に過ぎない。幾多の教訓があるにせよ、スコットやジョンスンが讃辭を惜しまなかつたものにもせよ、現代の詩歌の愛好者に取つて、興味の索然たるものであることは拒まれない。然しながら同じ宗教的教訓詩でも、「牝鹿と豹」"*The Hind and the Panther*" に至りては、諷刺と教訓とを兼ねたその寓意の運びに、「俗人の宗教」よりも深い興味を陵りもし、此詩の作られた土地の風景を巧に織り込んで清新な感じを與へてゐる。「俗人の宗教」に於て、彼は英國々教に左袒したのに引きかへ、「牝鹿と豹」ではひたすらローマ教を稱揚してゐる。冒頭にそのローマ教を牝鹿

に譬へて斯う歌ひ出してゐる。

A milk-white Hind, immortal and unchanged,
Fed on the lawns and in the forest ranged;
Without unspotted, innocent within,
She feared no danger, for she knew no sin.
Yet had she oft been chased with horns and hounds
And Scythian shafts, and many winged wounds
Aimed at her heart; was often forced to fly,
And doomed to death, though fated not to die.

獨立教徒の熊、クエイカア宗徒の兎、アナバプテイストの野猪、ブレズビテリアンの狼、自由思想派の猿、アライアン宗の狐と言つた工合に、各宗派をそれぞれ動物に擬して、その特徴を示し、優しい牝鹿のローマ教を保護する役割の獅子は、ジエイムズ二世に振りあてゝゐる。彼宗教改革に依つて殘した汚點が洗ひ清められないでゐる英國々教は、卽斑點のある豹である。

The Panther, sure the noblest next the Hind,
And fairest creature of the spotted kind;

Oh, could her inborn stains be washed away,
She were too good to be a beast af prey!

國教は非難されてはゐないけれども、さればとて全然批點の打ち處がないでもない。善いところもあり、惡いところもあると言ひ、それらの動物が皆牝鹿を嘆美するに至り、豹は牝鹿に近づき知己を求め、牝鹿と豹がその教義の爲に議論を戰はすのである。三部に分たれてゐる此詩の中で寓意の最もよく出來てゐるのは、第一部であると言はれてゐるけれども、第三部の中で豹が物語る乙鳥の話しは、ドライデンが晩年に試みた「寓話」"*Fables*" の筆意を見せて居る。

千六百八十八年の革命に由つて、ジエイムズ二世が位を滑り、井リアム二世が卽位してから、ドライデンは兎角轗軻不遇であつた。欽定詩宗の地位は日頃仲の好くないシャドウエルに奪はれ、王室編史官の職も剝れて、全く筆一本で立つて行かなければならなかつた。然し過勞の爲遂に倒れた。千七百年に至るまでの十二ケ年に、彼としては最も其特徴を發揮した諷刺詩や教訓詩よりも我等に取つてはより親しみのある名作を書き殘した。千六百八十七年に「聖シシリアの祝日の爲に」"*For St. Cecilia's Day*" と言ふ歌を書いて、音樂の守護神の德を稱へた。それから丁度十年經つた千六百九十七年に歌つた、「アリグザンダの饗宴」"*Alexander's Feast*" に再ひ同じ樂聖を讃美したが、"*The Ode to the Memory of Mrs. Anne Killigrew*" と共に短詩の大傑作である。ラン

ダン音樂會で年々聖シシリアの祝日に演奏會を催す定めになつてゐるので、その會から頼まれて唯一夜に書きあげたものである。俗に言ふ一夜づけであるけれども、夜つぴて一睡りもしないで一氣呵成に作りあげた此詩はドライデンの抒情詩中の傑作である。彼アリグザンダ大王がペルシアを征服して後悅びの饗宴を張つたとき、音樂に堪能な名高いギリシアの詩人テイモシアスは、大王の前に立つてその盛德を讃美し、樂を奏で且つ歌つた。蓋世の英雄もさすがにテイモシアスの歌節と琴の音に征服され、憐み、愛しみ、また昂ぶり、報仇の心も燃えて、どうすることも出來なかつたのである。音樂の德はさばかり大なるものであるけれども、テイモシアスの時代の樂器は七弦の元始的なものであつた。さるにシシリアが世に出づるに及んでオーガンを發明し、その妙なる響に誘はれ、天人すらも空を降り來たと傳へられてゐる故事を以て此詩を結んでゐる。

アリグザンダが美姫テイスと椅子を並べたのを、此英雄にして此佳人を得たのはまことに相應しと歌つた一節と、結末の一節を引用する。

The lovely Thais, by his side,
Sate like a blooming Eastern bride,
In flower of youth and beauty's pride.
Happy, happy, happy pair!

None but the brave,
None but the brave,
None but the brave deserves the fair!

.....

Thus long ago,
Ere heaving bellows learned to blow,
While organs yet were mute;
Timotheus to his breathing flute,
And sounding lyre
Could swell the soul to rage, or kindle desire.
At last divine Cecilia came,
Inventress of the vocal frame;
The sweet enthusiast, from her sacred store,
Enlarged the former narrow bounds,
And added length to solemn sounds,

With nature's mother-wit, and arts unknown before.
Let old Timotheus yield the prize,
Or both divide the crown:
He raised a mortal to the skies;
She drew an angel down.

此詩が極めて評判がよく、ドライデン自身も得意であつたのは、此詩を賞めた人に向つて、「今までこれより高尚な頌歌は作られはしなかつたし、又決して作られもすまい」と言ひ、又稍々謙遜して「私も年を取つて私自身の判斷を疑つたけれども、書いた時分に私の詩の中で一番秀れたものだと思つた」と言つたのに徴しても分かると思ふ。ドライデンの詩で猶一つ注意すべきものがある。それは詩聖チョーサからの飜譯「諷喩物語」"*The Fables*"であつた。「パラモンとアーサイト」"*Palamon and Arcite*"、「バスの女房」"*The Wife of Bath*"、「牝鷄と狐」"*The Cock and the Fox*"「花と葉」"*The Flower and the Leaf*"など、讀み難い古詩を讀み易い近代語に書き改めて、頗る重寶がられてゐるし、伊太利の文豪ボカーチオウの物語「シギスモンダとギスカードウ」"*Sigismonda and Guiscardo*"「シモンとイフイジェニア」"*Cymon and Iphigenia*"などの物語の譯から、シオクリタス（Theocritus）、リウクレチアス（Lucretius）、ホレイス（Horace）、ゲ

アージル（Virgil）、オウヴイッド（Ovid）、ホウマ（Homer）などの飜譯も、それらの國語に通じない人達に取つて、どんなに便利だか知れない。而していづれも洗練された流暢なヒロウイック・カプリットに移されてゐるのである。

第二節　詩史劇作家としてのドライデン

ドライデンは戯曲の作家としてよりも、詩人として優れてゐるのは勿論であるけれども、千六百六十三年に書いた「のらくら間夫」"*The Wild Gallant*" を手始に、悲劇喜劇を合せて二十七餘り戯曲を公にした。共和時代に演劇が禁止されてからこのかた、二十ケ年ばかりは戯曲は暫らく跡を斷つたけれども、王政復古と共に俄に劇道の勃興を見るに至つたのは自然の勢であつて、チャールズ二世を始め貴族達一般民衆の娯樂が、觀劇で有つたことは言ふまでもない。從つて文筆を職業とするものに取つて、脚本を書くことは此上もない金蔓であつた。名を賣ると共に懷を温めることが出來たのであるから、ドライデンの如きその方面に豊かな天分を有つて居たものが、此流行に乘り外す筈がない。然しながらその書いた戯曲は、今日では只二三を除く外は餘り讀まれない。殊に初期のヒロライッ戯曲は、それが戯曲家として最も彼の活動した時期のものであるに拘らず、殆んど顧みられなくなつた。「のらくら間夫」は寧ろ失敗の作であつたが、續いて「印度皇帝」"*The Indian Emperor*" や、「グレナーダの征服」"*The Conquest of Grenada*" を出して評判を取つた。

「グレナーダの征服」はヒロウイック戯曲の代表的のものであつて、臺詞から始め挿んだ歌曲まで悉く押韻を採つて居る。當時のフランスやスペインの戯曲が、やむごとなき人達の野心や戀を絡んだ筋合のものが多かつたし、英國の國情が既にそれらの戯曲に脚色されたところと酷似してゐた。「グレナーダの征服」の筋は所謂お家騒動に似てゐるけれども、日本のお家騒動の樣に妾などから起つたものでない。グレナーダの王の名門アベンセラージ家とジーグリ兩家の紛擾から始まつてゐる。そのごたごたの中へ飛び込むんで來る一人の他國人が此劇の主人公で、アルマンザーと言ふ傑物である。任俠氣の強い彼は、遂に一方の大將株の一人を殺して、捕はれ、いざ死刑と言ふ段となつて、彼がムーア人とスペイン人との戰ひに、ムーア人を扶けて武勇の譽の高い人であることが知れて、赦され、再びムーア人を援けてムーア人は勝利を得る。筋はこれから亂れて行く。グレナーダ王の思ひ女にアルマハイドといふ美姫がある。ジークリ家の頭首ズレマの妹のリンダラクサはアルマハイドに對して嫉に姝妬の刄を研いてゐた。折しも王弟アブダラがおのれに戀をしかけたのをよいしほに若し貴郎が國王であつたならと意味有りげなことを言ふ。ズレマは妹の野心を遂げさせようとたくむ。ふとした動機からアルマンザーは王弟アブダラの味方となり、アルマンザーとアブダラとズレマの三人が心を合せて、舞踏の催のあつたとき、武裝して王達を襲つた。王を逸したけれども美姫アルマハイドを捕へる。アルマンザーはか弱きアルマハイドを釋してやらうとしたけれども、アブ

ダラ達は聽き容れなかつたので、アルマンザーの心は再びアブダラから離れ王の味方になる。アルマンザーはアルマハイドを戀してゐた。アルマハイドもそれを知らぬではなかつたが、親の許なしに身勝手に振舞ふ女ではなかつた。それでアルマンザーは彼女の父や、又王にその意中を打明けたけれども斥けられ、つい絶望から亂暴もして縛められたけれども、その功勞にめでゝ、釋放される。アルマハイドに切なき別離の情を訴へてその市を去る。アルマハイドは正式に王妃になほされる。然るに多くの味方を有つてゐたアルマンザーの追放の爲に暴動が起る。王弟アブダラはスペイン人と結托して窃に劃策するところがある。王妃アルマハイドは王に懇請されてアルマンザーに使を遣つて招致する。王はアルマハイドとアルマンザーの間を疑ふ。アルマンザーの憤に乘じて、リンダラクサは彼を魅惑しにかかる。又リンダラクサの兄のズレマは嘗つてアルマハイドに對する昔の戀を忘れて、アルマハイドとアベンセラーヂ家の頭目アブデルメレッチが不義をして居るやうに言ひふらす。アルマンザーの心は穩かでなかつた。アルマンザーに對して嫉妬の心を弛めなかつた王は、スペイン人と戰つて死に、リンダラクサはアブデルメレッチに刺されて、その結末はアルマンザーがスペインの公爵の子であることが知れ、アルマハイドは良人に先立たれたその期があけた曉は、アルマンザーの妻になることを内諾すると言ふ筋である。斯ういふ復雜な脚色である爲に、事件そのものは變化に富んで舞臺を花やかにするけれども、性格の描寫の方面には筆が屆きかねてゐるのは

致し方があるまい。而してチャールズ二世の如き放縱な君主の興を晩る爲には、折節思ひ切り露骨な場面も觀せなければならなかつたに相違ない。裸體で道中は出來ないと言ふけれども、假令酒の上とは言ひ條、實際裸體で往來を跳ね廻つた自墮落な貴族達は、此戲曲に挿んだ舞踏の場面に相好を崩し、眼を張り、耳を欹てたであらう。その歌曲の一節を引いて見る。

Beneath a myrtle's shade,
Which love for none but happy lovers made,
I slept, and straight my love before me brought
Phyllis, the object of my waking thought.
Undressed she came my flame to meet,
While love strewed flowers beneath her feet,
Flowers which, so pressed by her, became more sweet.

他は殆んど引用に堪へないほど猥りがはしい。時好に投じようとした作家のあてこみのその胸の中が透いて見えるけれども、それはドライデンばかりではなかつた。さういふものでなければうけられなかつた時世であつたのだ。次の作の「オーラングジーブ」"*Aurengzebe*" もヒロラロイック戲曲の秀逸である。徹頭徹尾韻を踏んだ對句で押し通してゐる。此戲曲の書かれたのは千六百七

十五年で、「グレナーダの征服」を出してから五年になるが、此時から後は押韻を採ることを廢めた。全然廢めたのではないが無韻律を多く用ゐ、時に押韻律も交ふる程度に變じた。「オーラングジーブ」が他のヒロウイック戯曲より勝つてゐると言ふのは、作物の人物が無暗にざわつき、徒に豪語することがなく、しつくりと落ち付きが取れてゐるからである。沙翁のマクベスの反響と思はしめるオーラングジーブの獨語、世を果敢なんだ言葉の端々にオーラングジーブの人物を想見させ、屢々引用される名文句である。

When I consider life, 'tis all a cheat.
Yet, fooled with hope, men favour the deceit,
Trust on, and think to-morrow will repay:
To-morrow's falser than the former day,
Lies worse, and while it says, we shall be blest
With some new joys, cuts off what we possest.
.....
I'm tired with waiting for this Chymic gold
Which fools us young and beggars us when old.

彼の詩の或ものに見た教訓的傾向が既に此戯曲に見えてゐる。センツベリ氏が若しドライデンの戯曲の中、多少手を加へて今日舞臺に上ぼしうるものがありとすれば此戯曲一つであらうと言つたほど高尚なものである。オーラングジーブが出てから三年目に、「總て戀故に」"*All for Love*"が書かれたが、從來書いたものとは全くその面目を一新した。此戯曲から彼は沙翁以來殆んど定まつてゐた無韻律を採り始めたのである。「唯我ために書いたもの、舞臺に上ぼすべきものではない」と言つたにも拘らず、大うけにうけられたものであつた。同じ悲劇の「ドン・セバスチアン」"*Don Sebastian*"と「總て戀故に」の二つはドライデンの戯曲の佳作と言つてよいであらう。但し前者は無韻律に散文をあしらつてゐるのに反し、後者は全く無韻律で貫ぬいてゐる。「總て戀故に」の題材は沙翁の「アントニとクリオバートラ」と大した變りはない。アントニとクリオバートラの熱烈な戀、その戀故にこそアントニの部下の心はアントニから離れた。その戀故にこそイジプトの艦隊はクリオバートラに背いたのであつた。最後までアントニを忘れなかつたクリオバートラの眞實の戀はいぢらしいものであつた。最後までクリオバートラを捨て得なかつたアントニの戀を卑むわけにいかない。賴まれがたい人々の中で、主思ひのヴエンテイディアスのみはアントニと死を共にする。術盡き、勢窘まつて、クリオバートラに心を引かれながらもアントニが自裁したのは、義を重んじた、ヴエンテイディアスが先自刄したからである。アントニとウエンテイディアスとの間の對談は

「ドン・セバスティアン」に見るポルトガルの王セバスティアンと、その王の爲に誤解され迫害に惱んだ貴族ドラックスとの會見の場面と共に名高いものである。「總て戀ゆるに」は沙翁の模倣であることはドライデン自身言明したものであるが、ドン・セバスティアンと共に悲劇として成功したものである。彼諷刺詩に腕を馴し、頭を練つたドライデンに喜劇の良いものがない筈がない。「當世結婚」"*The Marriage a la Mode*" に多少の成功を收めて、「スペインの修道僧」"*The Spanish Friars*" の佳作を出した、「オルビョンとオルバニアス」"*Albion and Albanius*" や、「アーサ王」"*King Arthur*" は、歌劇であつて、寧ろ失敗の作だと言ふけれども小ぢんまりと纏りがついてゐる。

此等の悲劇喜劇歌劇を通じて一つ一つ緒論を附してゐる。批評の方面に一家の眼識を備へた作家の散文に得る處が少なくあるまい。既に擧げた散文家の顏觸れに、洩らしたドライデンの散文を一わたり見ねばならない。

第三節　ドライデンの戲曲論その他

王政復古時代の文學は總てイリザバス時代の浪漫的光澤を失つて、古典的色調が目立つて居る。自然の根を培ふことを忘れて、技巧の末に泥んでゐる。常識を重んじて空想を賤んだものである。批評的氣分の漲つた時代の代表者であるがドライデンの作物は悉くその特徴を備へたものである。

而してその批評的態度はその散文に最もよく現されてゐる。ドライデンの散文は量に於て甚だ多いものではない。各戲曲に附した緒論や、各詩篇を飾る緒言がその主なものである。「劇詩論」"*The Essay of Dramatic Poesy*"「史詩劇論」"*The Essay of Heroic Plays*" などの論文は彼が盛にその戲曲にヒロウイック・カプリットを適用した時代の產物であつて、フランスやスペインなどの當時の批評家の採つた態度を維持したものであつたが、無韻律を使用するやうになつてからは、その批評の立場を改めなければならなかつた。ビープスが沙翁の「眞夏夜の夢」を恐にもつかない作物と評したやうに、ドライデンもその「劇詩論」に沙翁の天才は認めながら、折節その鋭い筆法で褒貶を恣にしてゐる。

He (Shakespeare) was the man who of all modern, and perhaps ancient poets, had the largest and most comprehensive soul. All the images of Nature were still present to him, and he drew them, not laboriously, but luckily; when he describes anything, you more than see it, you feel it too. Those who accuse him to have wanted learning, give him the greater commendation: he was naturally learned; he needed not the spectacles of books to read Nature; he looked inwards and found her there. I cannot say he is everywhere alike; were he so, I should do him injury to compare him with the greatest of mankind. He is many times

flat, insipid; his comic wit degenerating into clenches, his serious swelling into bombast.

「樂劇論」"*Musical Drama*"「韻詩と無韻詩」"*Rhyme and Blank Verse*" なども又讀まるべきもので、今は「劇論集」"*Dramatie Essays*" として一卷に收められてゐる。

ドライデンの燃犀な批評の眼識は「劇詩論」にシェイクスピーアを、「諷喩物語」の緒言 (Preface) にチョーサを論じた筆に充分に示されてゐる。文章はそのヒロウイック・カプリットで綴つた詩と同じ價値を有つ、調和の取れた美しい散文である。尙チョーサを論じた一節を取つてその文體を見る便りにしたい。

He (Chaucer) must have been a man of most wonderful comprehensive nature, because, as it has been truly observed of him, he has taken into the compass of his *Canterbury Tales* the various manners and humours (as we now call them) of the whole English nation, in his age. Not a single character has escaped him. All his pilgrims are severally distinguished from each other; and not only in their inclinations, but in their very physiognomies and persons. Baptista Porta could not have described their natures better than by the marks which the poet gives them. The matter of their tales, and of their telling, are so suited to their different educations, humours and callings, that each of them would be improper in any

other mouth. …… It is sufficient to say, according to the proverb, that here is God's plenty. We have our forefathers and great-grand-dames all before us, as they were in Chaucer's days. Their general characters are still remaining in mankind, and even in England, though they are called by other names than those of monks, and friars, and canons, and lady-abbesses, and nuns; for mankind is ever the same, and nothing lost out of nature though everything is altered.

彼の書翰文がまた此チョーサ論を讀むやうに、はきはきと齒切のよいイディオマティックの英語で認められてゐる。從妹の一人に宛た次の手紙は彼が死ぬ前年の千六百九十九年のものである。

I am still drudging on; always a poet and never a good one. I pass my time sometimes with Ovid, and sometimes with our old English Poet, Chaucer; translating such stories as best please my fancy; and intend, beside them, to add somewhat of my own; so that it is not impossible but ere the summer be passed, I may be come down to you with a volume in my hand, like a dog out of the water with a duck in his mouth.

輕い諧謔も書き添へながら、どこやら淋しい感じのするのは年のせいもあつたであらうが、それでも元氣よく矻々と仕事を續けてゐた。定まつたやうに、朝の中は書齋に籠つて、讀んだり書いたりし

て、午後になるとぶらりと井ルの珈琲店に出掛けて、若手の文士達を相手に、文學談や評論に樂しく時を過した。トマス・ハーディが今英國の詩人達から曉の明星のやうに仰がれてゐるのと丁度同じに、老文豪として多大の尊敬を拂はれてゐた。「鴨を咬へて水から出て來た犬のやうに」彼諷喩物語を置土產に、人の心の浮き立つ五月の朝、永へに目を閉ぢ、遺骸はウエストミンタ寺院に運ばれて、手厚く葬られた。

第三節　道化詩の作者サミユエル・バトラ

彼王黨派の代表的詩人とも言ふべきサミユエル・バトラ（Samuel Butler）は千六百十二年に生れて千六百八十年に死んだのは慥であるけれど、その經歷は頗る曖昧である。ウスタ州のストレンシャムに生れ、フリー・スクールを出たばかりで、大學の教育は受けたかどうかは疑問になつてゐる。ジエッフリスといふ田舍の裁判官の書記をしたり、ケント伯爵夫人の許に奉公に出たが、その時分にみつしり學問したらしく、その詩の才幹はセルデン（Selden）の認むるところとなつて便宜を得た。彼の作物に最も關係の深いのはベドフアッドシアの金持の貴族サー・サミユエル・チユークに仕へたことである。チユークと言ふ人は、長老教會の信者で、過激な共和主義を標榜した一徹な偏屈者であつた。バトラの傑作「ヒューディブラス」"*Hudibras*"は、此人物のいろいろの癖を面白可笑しく書いたのだと言ふことである。五十歳に近くなつてカーベリ伯の秘書官になり、小金

を有つてゐたハーバートといふ、寡婦と結婚して、少しは生活の餘裕が出來たけれども、その臍繰金もやがて使ひ果して、失張り貧乏な一生を送つて終つた。「ヒューディブラス」は斷片的に梓に上ぼされた。千六百六十三年に始めてその最初の三篇を含む一卷を公にし、翌年に第二卷を出したが、暫らく中絶して、殘り三卷目は千六百七十八年に出版になつたものである。共和政治時代から既に瓢化た此詩を書いて居たのであつたが、憚るところがあつて、世に問ふことを控へて、チャールズ二世の統治に移つたのをしほに印刷に附した。チャールズが此詩を愛讀したことはバトラの次の四行からも推測される。

He never ate, nor drank, nor slept,
But 'Hudibras' still near him kept;
Nor would he go to church or so,
But 'Hudibras' must with him go.

然しそれほど此詩が氣に入りながら、何故バトラに貧乏生計をさせて置いたのであらう。何事も自個本位な國王を始め朝臣達は、清教徒の惡德を諷嘲し、その愚劣を嘲笑した此詩を痛快がつて讀みながら、その作家を愛護しようともしなかつたものである。

「ヒューディブラス」は梗概を記さねばならぬほど筋の立つたものではない。行きあたりばつたり

に筆を運んで、一つの事件から他の事件に移つて行く間に、思ひがけない幕が切つて落されたり、惡洒落が續發したり、機智は間斷なく閃いて、絶えず讀者をくすぐる。その間に偏固な僞善者のサー・ヒューディブラスと熱狂的な旋毛曲りの卮從ラルフォーの風丰がくつきりと浮いて居る。彼共和時代に演劇を禁止し、五朔節の無邪氣な舞踊りにまで干渉したのは事實であつたが、ヒューディブラスは間遠つた社會改革の實行に取りかゝるのである。熊に犬をけしかけて咬み合ひをさせることは流行の娯樂の一つであつたがヒューディブラスはその咬み合せ場へと志す途中、一隊の無賴漢が熊を曳いて行くのに出逢ひ、彼等に解散を命じる。折角の樂みを邪魔されて群衆はヒューディブラスに食つてかゝり、彼と群衆の間に擬戰が開始される。ヒューディブラスが勝つて、敵の首罪者を捕へ足枷を加へる。罪人の仲間が盛り返して、今度はヒューディブラス達が足枷を篏められる。幸に金持の寡婦のとりなしで釋される。づうづうしいヒューディブラスは色と慾の兩道かけて寢婦を口説く。彼古い喜劇のレイフ・ロイスタ・ドイスタに見たやうに、寡婦の用人達から散々な目に逢はされて腹の虫が承知せず、法律家や天文學者を抱き込んで復仇の談合に取りかゝるまで、兎に角筋は連がつてゐるけれど、あとを書く積りで遂に書かずにしまつたものか、尻切れ蜻蛉のやうに、最後の一篇に王政復古の直間際までの事件を記して筆を歛めてゐる。之に對して支離滅裂だとか、龍頭蛇尾だとか言ふなら、此詩の筋に無理が多いよりもより以上にその方が無理である。バトラが

唯此詩一つで堂々たる文豪の列に組み込まれたのは、他人には眞似ることの出來ない獨創的な手腕がなければならない。彼の着想の妙趣を引用によつて味つて見よう。

A wight he was whose very sight would
Entitle him mirror of Knighthood.

嚴めしいその風丰はまだ眞面目に書いてるが、そろそろ滑稽が出て來る。語學ときてはお手のもの、

Besides, 'tis known he could speak Greek
As naturally as pigs squeak;
That Latin was no more difficile
Than to a black-bird 'tis to whistle.

論理の堪能なることは驚くばかり。

He was in logic a great critic,
Profoundly skilled in analytic .....
He'd undertake to prove, by force
Of argument, a man's no horse;

He'd prove a buzzard is no fowl,
And that a lord may be an awl,
A calf an alderman, goose a justice,
And rooks committee men and trustee.

數學の蘊奥を極めて、德利でも、麵麭でも、牛酪でも、時間でも、幾何、三角、代數で割り出す。

In mathematics he was greater
Than Tycho Brahe, or Erra Pater:
For he, by geometric scale,
Could take the size of pots of ale;
Resolve, by sines and tangents straight,
If bread or butter wanted weight;
And wisely tell what hour o' th'day
The clock does strike by Algebra.

しち六ケ敷い雜語と、解り易い俗語とを巧に交ぜ合せた言ひ廻しや、俚諺のやうに暗示的な簡勁な名句が注意を引く。雜多の書物を手當り次第に讀んだと見えて、思ひがけない人名や地名が思ひがけない塲處に用ゐられて、讀者を烟に卷く。然し內亂時代や共和時代の出來事を絕えず諷示してゐる爲に、ドライデンの諷刺詩と同樣に其時代の歷史に通曉してゐるものでなくては、又少なくも註釋の助けを借りずしては、徹底的に理解することは困難である。會得されたやうで會得されない。靴を隔てゝ痒を搔くやうな感じもするであらう。はき違ひも見こぼしも出來よう。それでもどにかくに解つた丈で面白く讀むことが出來る。ヒューディブラスはその素構を Cervantes の "*Don Quixote*" に借りたと言ふけれども Don Quixote や Sancho Panza の法外な言動が人に腹を抱へさせながら、封建時代の武士の精神や行動を賤んではゐない。チャールズ二世がその封建時代の清廉な武士の氣節や、女性に對する慇懃な態度を蔑んだ時代のバトラは、自らその精神を反映して、ヒューディブラスもラルフォーも唯厭ふべく、卑しむべき人物に描いてゐる。彼はセルヴンテイーズに學んで、セルヴンテイーズと異つた見地から獨創的諷刺詩を書いたものである。彼の死後八十年を經過した千七百五十九年に、彼の遺稿が出版された。"*The Genuin Remains in Verse and Prose of Mr. Samuel Butler*" の中にはローヤル・ソサイエティを諷刺した、「月中の象」"*The Elephant in the Moon*" や散文も入つてゐた。

交際は狹く、友達も少ない孤獨な生活を續けて、バトラの死んだ時分には墓石を買ふ金さへなかつたが、兎に角に友人の骨折りでカヴエント・ガーヅンの聖ポール寺院の墓地に埋められ、千七百二

十一年に、時のランダン市長がウエストミンスタ寺院のボウイッ・コーナに彼の記念碑を拵へた。「麵麭を求めた人に石をくれてやつたものだ」とは、口さがなき人の言ひ草だつたが、「ヒューディブラス」の詩一つで此取扱ひを受けたバトラは、貧乏のしがひがあつたのである。

ヂョン・オウルダム（John Oldham）はドライデンに私淑し、ホレイスやジュヴイナルなどの作風を模倣した諷刺詩の作家であつた。千六百五十三年にグロウスタシアに生れ、大學に入るまでは長老教會の牧師であつたその父から教育を授けられた。オクスフアド大學を出てから僧職を避け教員になつて盛に諷刺詩を書いた。自我の强い男で、長上に向つてお上手を言つたり、機嫌取りをすることの絶對に出來ない性分で、後楯がなくして詩人として起つことの不利益は知つて居た。又詩人そのものが損な職業であることも自覺して居た。友達から度々親切に諫められたけれども、好きなものなら何とも詮方がないと正直にその諷刺詩にも書いてゐる。

Oft (I remember) did kind friend dissuade,
And bid me quit the trifling barren trade;
Oft have I tried (Heaven Knows) to mortify
This vile and wicked lust of poetry;
But still unconquered it remains within,
Fixed as a habit or some darling sin.

(From "*A Satire Dissuading from Poetry*")

「大學を出で、世に立たんとする友に寄せたる諷刺詩」"*A Satire addressed to a Friend that is about to leave the University, and come abroad in the World*" と言ふ長い標題の詩には、教師になるのと僧侶になるのと、どつちが前途の見込があるかと考へて、僧侶のつまらなさ加減を書いてゐる。貴族に抱へられ、其禮拜堂附の牧師になるを天へでも登つたやうに思ふけれども、先方で食はせて貰つて、年三十磅のあてがひ扶持で身を縛られ、食事の席へまで出て、御祈禱を述べねばならず萬事務め大事に振舞はなければ濟まないのは、その絹の袈裟衣が馬丁づれの什着と何の變りがあらう。

Some think themselves exalted to the sky,
If they light in some noble family,
Diet, a horse, and thirty pounds a year,
Besides the advange of his lordship's ear,
The credit of the business and the state,
Are things that in a youngster's sense sound great.

Little the inexperienced wretch does Kuow,
What slavery he oft must undergo,
Who, though in silken scarf and cassock dressed,
Wears but a gayer livery at best. .....
And if the enjoyment of one day be stole,
They are but prisoners out on parole:
Always the marks of slavery remain,
And they, though loose, still drag about their chain.

語格に整はないところがあるとか、押韻の上からも生硬だとか蕪雜だとか非難はあるけれども、寸鐵人を刺すやうなきびきびとした鋭い警句や、こそばゆい皮肉が閃めいて居る。ドライデンの詩のやうに全く調和の取れたものとも見えず、滾々として斷えず滑稽が流れ出るバトラの詩のやうではなく、その皮肉も嘲罵もむきになつて叩きつけてゐるのは、年齢が若かつたのと、根が正直な性質の人であつたからであらう。「ジエジユイット教徒に與ふる諷刺」"*Satires upon the Jesuits*" や「道德に背ける諷刺」"*Satire against Virtue*" の如き最も作家の性格が曝露されたもので、詩形の上から幾多の缺點があらうとも、古今の諷刺詩の名人達がその道具の投槍を鍛へるに用ゐた火よ

りも、火加減が荒つぽいにもせよ、ドラスデンやポウプを除いては、誰にもオウルダムの眞似は出來なかつたに相違ない。やつと三十歳になつたばかりで死んだのを、ドライデンは痛惜しておかなかつたと言ふことである。

オウルダムの外にミルトンの失樂園のあの壯重な調子をもちつた道化歌「光る半圓銀貨」"*The Splendid Shilling*" やマールボロラウが勝利を祝つた「ブレニム」"*Blenheim*" の作者ジョン・フイリップス（John Philips）（1676－1709）や、田園に隱れて靜に文學を樂しむ理想的生活を筆にした「擇み」"*The Choice*" の作者ジョン・ポムフリット（John Pomfret）（1667－1702）なゝ名の記さるべき詩人であらう。

第五章　殿上詩人の一群

王政復古時代の文學の隆昌を來たしたのは、貴族達に自ら戲曲を書き、詩を作つたものが多かつたのもその原因の一つでなければならない。彼等は他人の作物に對して忌憚なき批評もし、又作家を保護もしたのである。然しそれ等の貴族の作物は、その性行の半面を反映して、詩の神聖を汚したものが多かつた。彼ハーバートやクラショーなどの敬虔な眞摯な詩風を破壞したものである。爰處に簡單に彼等の生涯と共に一部の作品を紹介して見たい。

ロスコモン伯ウエントワース・デイロン（Wentworth Dillon, Earl of Roscommon）は千六百三十四年にアイアランドに生れ、千六百八十五年にランダンで死んだ。有名なストラファード（Strafford）の甥に當り、生涯の大半はフランスやイタリアで過した。他の貴族達のやうな蕩兒ではなく、學問も深く、篤實な資性を有つてゐたのは、彼がミルトンに私淑し、ドライデンと厚誼を結んだのでわかるし、又その書いた二つの作物からも察知される。フランスの批評文學の感化を受け、古典の香の高い二つの作物は「譯詩論」"*An Essay on Translated Verse*" とホレイスの「詩學」"*Ars Poetica*" である。前者は押韻の對句の形を取り、ホレイスの譯は無韻を取つた。

ドーシット伯チャールズ・サクヴイル（Charles Sackville, Earl of Dorset）は千六百三十八年に生れ、千七百九年に死んだ。二十八歳の時ヨーク公の配下に付いてオランダとの最初の交戰に與かり、其海戰の前夜作つた「今陸上に在ます總ての淑女達に」"*To all young ladies now at land*" といふ詩は所謂社交詩（Ver-de-societe）と稱する名高いものである。社交詩は殆んどドオーシットが開始めたもので、次の時代のマシウプライオー（Matthew Prior）から十九世紀のオースティン・ドブスン（Austin Dobson）に至るまで跡を斷たなかつた。乾坤一擲の大海戰を控へて、ワイトホールの宮廷にある女達の身の上を考へ、彼等に宛てゝ詩を讀む餘裕があつた。

Let wind and weather do its worst,
Be you to us but kind,
Let Dutchmen vapour, Spaniards curse,
No sorrow we shall find;
'Tis then no matter how things go,
Or who's our friend, or who's our foe ……

But now our fears tempestuous grow
And cast our hopes away,
Whilst you, regardless of our woe,
Sit careless at a play, —
Perhaps permit some happier man
To kiss your hand or flirt your fan.

文筆を玩んだ他の貴族達は酒色に耽溺して大抵夭死したのに、サクヴイル丈は七十歳の高齢を保つたが、金錢に事をかゝず、文藝に趣味を有ち、閑暇も充分にありながら社交詩の外には亂暴な諷刺詩や二三の小歌の外に餘り書き殘さなかつたのは、どうしたのであらう。

ロチスタ伯ヂョン・ウイルモット（John Wilmot, Earl of Rochester）は千六百四十七年の生れだが、三十三歳で死んだのは言ふまでもなく淫蕩亂行の結果であつた。王政復古時代隨一の道樂者であつたばかりでなく、表裏の甚しい陰險な人物であつた。その諷刺詩の如き、讀むに堪へないほど汚いものだと言ふけれども、その小唄や抒情詩のあるものは、驚くほど純な感情の現はされたものもあるのは不思議である。單純で平明で哀に優しい心ばえも見えるやうである。

My dear Mistress has a heart
Soft as those kind looks she gave me;
When, with love's resistress art,
And her eyes, she did enslave me;
But her constancy's so weak,
She's so wild and apt to wander,
That my jealous heart would break
Should we live one day asunder.

の如きその一例である。ミルトン時代のカルウやドンに較べて、さのみ遜色を見ないものもあるけれども、エドマンド・ゴスの評したやうに、妖色麗しい稚兒がいたづらに泥土の中を轉がり、薄汚なくなつたため、往來の人は急いで通り過ぎ、その稚兒に備つた美點を認めることをしないと同じに彼の詩が一般の人に顧みられないのは尤のやうで氣の毒である。

サー・チャールズ・セドリ（Sir Charles Sedley）は千六百二十九年に生れ千七百一年に死んだ。ロチスタ伯にも劣らない遊蕩者であつた。「桑園」"*The Mulberry Garden*" や「ベラミラ」"*Bellamira*" 以下六つばかりの戯曲を書いたが、「ベラミラ」の如きは尾籠甚しきものとして非難の聲が高かつた。社交詩やそれらの戯曲に挿んだ小唄などがむしろより多く知られてゐる。

Song.

Phillis is my only joy,
Faithless as the winds or seas,
Sometimes cunning, sometimes coy,
Yet she never fails to please;
If with a frown
I am cast down,
Phillis smiling
And beguiling

Makes me happier than before.

Though alas! too late I find
Nothing can her fancy fix,
Yet the moment she is kind
I forgive her with her tricks;
Which though I see,
I can't get free, —
She deceiving,
I believing, —
What need lovers wish for more.

バキンガム公爵ジョージ・ヴイラズ（George Villiers, Duke of Buckingham）は千六百二十八年に生れ、五十九年の生涯の大半は放蕩三昧に過したもので、道徳をなみし、廉耻をわきまへない、烏滸の痴者（しれもの）であつた。落首、謌り歌、戀の詩を數多書いたが、ドライデンの史詩劇などを嘲笑した、道化劇「下稽古」"*The Rehearsal*" は他の作家との合作であるが、大部分は彼の手になつたもの

である。ドライデンの「アブサロムとアーチトウフエル」に出て來る多藝なジムリ（Gimri）はヴイラズをあてたものである。

マルグレイヴ伯ヂョン・シエフイールド（John Sheffield, Earl of Mulgrave）なゞは莫迦げた道樂はしなかつたらしい。ロスコモンと同じ樣に批判的敎訓的な詩を書いてゐる所を見ると、他の倚輩のだらしのない放埒に眉を顰めてゐたであらう。韻文で書いた「諷刺論」"*The Essay on Satire*" 「詩論」"*The Essay on Poetry*" 及び二つの悲劇が主な作物である。「諷刺論」と「詩論」はドライデンの作だと言ふ說もあるが、地位身分の高い人でなければ言ひ得ない筆意から推して、マルグレイヴの書いたものに相違ないと、コータツプは斷言してゐる。シエフイールドは千六百四十九年に生れ、千七百二十一年に死んで、ウエストミンスタ寺院に葬られた。

第四章　王政復古時代の戲曲とその作家

第一節　トマス・オトウエイ其他

王政復古期の戲曲が極めて特徵のあるものであることは既に說いた。ドライデンの史詩劇もその一つではあるけれども、殊に特徵を示してゐるのは悲劇よりは喜劇である。それらの貴族達が道樂に書いたものは別として、脚本で飯を食つてゐた作家達の書いたもの丈でも數の上から言つたら可

成多い。そうしてそれらの脚本は今日では全く舞臺にのらないし、又のぼさるべき性質のものは少ないけれども、讀んだ丈で當時の人々の道德觀念の低いことや、生活の自墮落であつたことが、くつきりと眼に映る。イリザバス時代に見た戲曲のロウマンティックな奥床しい香は失せて、殆んど正視するに忍びないほどに現實に着した人々の醜態を、遺憾なく曝露してゐる。フランスの浪漫斯や東洋諸國の史實に材料に探つた時代物でも、ランダン市の目前の實生活を脚色した世話物でも、一般に病的な感傷主義に傾いてゐる。欠陷だらけな當時の社會の裏面と、墮落した人間の弱點を寫した喜劇の鏡を通して、作家自身の生活までも反映せしめてゐる。一人一人作家の生活を訊ねてその主な作物を覗いて見よう。

トマス・オトウエイ（Thomas Otway）は千六百五十二年にミドハーストに近いトロットン（Trotton）に生れた。父は僧侶であつた。オクスフアド大學に入つたけれども、父に死なれて學費が續かず、學位を取らずにランダンに出て、俳優にならうとしたが失敗に終つた。俳優から轉じて彼は戲曲作家になつた。ロチスタ伯に可愛がられ、二十四歳の時に書いた「ドン・カーロス」"*Don Carlos*" はロチスタの後援があつた爲に可成に成功した。その翌年にはラシーン（Racine）の「テイタスとベレニケ」"*Titus and Berenice*" やモリエール（Molière）の「スカパンの詐謀」"*The Cheats of Scapin*" などを飜譯した。續いて書いた「當世向きの友誼」"*Friendship in Fashion*"

は隨分尾籠なものとして非難された。千六百八十年に「孤兒」"*The Orphan*" と「ケイアス・マリアス」"*Caius Marius*" の二つの悲劇を出したが、孤兒は傑作の一つである。更に「兵士の運命」"*The Soldiers Fortune*" と、「事なきを得しヴェニス」"*Venice Preserved*" の二つを、千六百八十二年とその翌年とに一篇づゝ書いたが、「事なきを得しヴェニス」は又傑作であつた。詩も書いたが、千六百八十年に作つた「詩の神に就いての詩人の詫言」"*The Poet's Complaint of his Muse*" と、彼が死んだ年の千六百八十五年の「ウヰンザの城」"*Windsor Castle*" が知られてゐる。相當に作物を書き殘しながら此作家の生涯は悲慘なものであつた。「ドン・カーロス」を書いた頃、バリ（Mrs. Barry）といふ女優に血道を上げたが、生憎バリにはロチスタ伯と言ふ歴然とした且那がついてゐたので、かあいさうに彼は二人から散々嬲り物にされた。悶々の思に堪えかね周旋をして呉れたものがあるのを幸ひ、聯隊の旗手になつて、一時劇道を退いたこともあつたが、捨鉢の氣分も手傳ひ、酒ばかりに日を送つた。遂には借金で首が廻らず、執達吏の留置場に欝ぎ込んだり、薄汚いちやぶ屋の奥に身を晦したりしてゐたが、愈々食ふに困まつて、ある日ある珈琲店へ赴き、居合せた一人の紳士に合力を求めたところ、餘りな彼の憔れ姿に同情した紳士は、拾圓金貨を一枚掌に載せてやつた。早速麵麭屋に駈けつけ、頰張つた麵麭の塊が咽喉に痞へて、それなりけりとは嘘のやうな話である。

オトウエイの二つの傑作「孤兒」と「事なきを得しヴェニス」の梗概を記いて見よう。「事なきを得しヴェニス」ではヴェニスの元老の一人にベルヴイデラ（Belvidera）といふ娘がある。ベルヴイデラはジャフエイア（Gafteir）といふ男と親の許さぬ戀に落ちて、勘當の身の上である。ジャフエイアはピエールと言ふ男と結んで同志十四人が徒黨を組んで、元老達を一擧に塵殺にしやうと謀る。ジャフエイアはベルヴイデラの愛に絆されてその陰謀を洩らす。ベルヴイデラは良人の生命の保證を得て父にその陰謀を告げる。謀叛人は皆捕はれて、死刑に處せられる。ピエールは巨魁であるので極刑に逢せられることになる。ジャフエイアが秘密を洩らしたので元老達は助かつたし、ヴェニスも事なきを得たのであるから、ベルヴイデラの父の取なしで、ジャフエイアは生命に別條はなく、晴れてベルヴイデラと夫婦になることも不可能ではなかつた。然しジャフエイアはピエールに義理がある。兄弟も及ばぬ親しい交際もし、死なば諸共と誓つた間であつた。ピエールは死に臨んで一目逢ひたいと言ふのをどうして默止することが出來よう。ジャフエイアは窃に決心の臍を固めた。友を裏切つたその罪の輕からぬことをつくつく思ひ廻らした。元老達を欺いてピエールと共に徐かに斷頭臺に上ぼつたジャフエイアは、ピエールを先づ刺して後返す刄に自らを刺して死にベルヴイデラは良人の最期を知つて思ひつめて又死ぬ。近代のフランス詩人フランソア・コペーの「王冠」"*For the Crown*" と共に外國文學に現はれたものとしては戀愛に義理を絡らませた面白い

ものである。ジャフエイアがピエールに向つて「私には妻があるけれども、貴郎の怒を宥める爲なら、その妻を殺めてもよい、私の子まで息の根を止めても悔はしない」といふ文句や、親達の勘氣を蒙つてまでジャフエイアに操を立てぬくベルヴイデラは、沙翁の「ヴェニスの商人」や "*The Merchant of Venice*" や「オセロウ」"*Othello*" などから思ひ付いたやうに思はれる。又劇の中で注意を引くのはアクイリナ（Aquilina）といふピエールの情婦である。そのアクイリナに客筋のアントニオは元老院の内でこそ一流の雄辯家であるが、一度アクイリナの室に足を踏み入れたが最後海鼠のやうに盪けて、アクイリナの言ふまゝに四つ這になつて這ひ廻る痴態も演ずる。さうした滑稽染みたところは輕く散文で書き流し、他は總て無韻律で筋を運び、作家の周到な用意も見えて、讀み桀えのする作柄である。

「孤兒」の筋はモニミア（Monimia）といふ可憐な乙女が兩親に早く死に別れて、父の親しい友のアカストウに引取られて養育を受けてゐた。アカストウにカスタリオ（Castalio）とポリドオーレ（Polydore）と言ふ二人の息子がある。而して二人が一樣にモニミアに懸想する。カスタリオは溫順な人物であるけれども優柔な嫌があり、ポリドーレは活潑であるけれども輕佻の譏を免れない男である。ポリドーレの愛は眞劍で無かつたのに反し、思ひ詰めたカスタリオの戀をモニミアは受け容れて、禮拜堂附きの牧師を媒に立てゝ密に夫婦の誓を立てたが、その夜を去らず、思ひもよらな

い悲劇の種子が芽ぐむ。カスタリオが明瞭りとモニミアとの結婚を父に告げ、ボリドーレにも打明けて置いたなら、事なく濟んだのであるが、さうしなかつたばかりにカスタリオがモニミアと逢ふ約束の時間と場所をボリドーレが探知し、すつかりカスタリオになりすまして暗に紛れモニミアと契つて室を去る。さうとは知らず又モニミアを訪れたカスタリオはモニミアの逢つてくれない心を疑ひ憤る。翌朝ボリドーレから昨夜の經緯を聞かされたモニミアは身も世もあらぬ惱ましさに心が狂ひかける。ボリドーレはカスタリオが既にモニミアの良人であつたことを知つて、はしたなき振舞を悔ゆると共に男らしく覺悟の臍を固める。カスタリオに喧嘩をしかけ、決鬪の末カスタリオの刄に貫かれ、モニミアも毒を仰ぐ。カスタリオも弟を殺し、妻を先立てゝ世を儚なみ自殺を遂げるのがその大團圓である。ボカーチオウの十日物語などから暗示を得たかと推される節もあり、どうやら時代の嗜好に合せ好奇心を唆つてゐるやうに思はれるけれども、モニミアの破滅には充分同情が湧き、心弱い女達は觀て居て、ハンケチを涙に濡らしたに相違ない。日本の芝居殊に近松あたりの心中物に似たものがあるやうに思ふ。カスタリオに對する心の誠を語るモニミアの最期の臺詞を引い置く。

Mon. When I'm laid low in the grave, and quite forgotten,
Mayst thou be happy in a fairer bride!

But none can ever love thee like Monimia.
When I am dead, — as presently I shall be,
For the grim tyrant grasps my heart already, —
Speak well of me. ……
How my head swims! — 'tis very dark. Good night!

ドライデンとオトウエイ丈の悲劇に就いて見て、シエイクスピーアは偖置き、他のイリザベス朝の戯曲家の書いた悲劇に較べて著しく不自然になつてゐる。それらの献身的行爲が總じて態とらしく、感情の表現も作り過されて、嫌味があるといふ人もあるけれども、強ちさうばかりも言はれまい。東洋人殊に日本人に持有な忠孝二道や、又一般に義理の觀念は西洋人には理解されない場合が多い。オトウエイ達がその人物に自我の衣を脱いだ人情美を描いたのを德とせねばならない。けれども此時代の戯曲は悲劇よりも喜劇に價値がある。喜劇は全くその社會の風俗の描寫であり、世相の反映である。道德觀念の全く痲痺した此時代の人々が、脚本といふ大きな委見の中をのさばり歩いてゐる卑しい口をきゝ、猥がましい行を敢てしてゐる。此時代の喜劇に對して痛切な非難を浴せたのはマコーリであるけれども、若し此等の喜劇作家の筆を借らなかつたら、此時代の眞相を知ることが困難であつたかも知れない。ボカーチオウの十日物語が人間思想史の員を飾る產物であるやうに、王

政復古期の喜劇は、たといその花の色は毒々しく、香のよくないものであつても、英國の戯曲史上の花であらねばならないと思ふ。

喜劇の作家として井リアム・ウイチャリ（William Wycherley）から始める。ウイチャリはシュルーズベリ（Shrewsbury）附近の豪士の子で、千六百四十年に生れ、十五歳の時フランスに遊學し、王政復古に際し、英國に皈つた。生れつきの美男子であつたところへ、フランス仕込の交際上手で身がもてなかつたのは當然であつた。オクスファド大學に入つたけれども學位は取らずに終つたし、一度ローマ教に皈依し、やがて國教に改宗したなどは、自ら彼の性格を語つてゐる。ヅルーリ・レイン座で演せられた「森の戀路」"*Love in a Wood*" と「腹藏なき人」"*The Plain Dealer*" など書いたが、「田舍女房」"*The Country Wife*" はモリエールの「女學校」"*L' Ecole des Femmes*" その他から、「腹藏なき人」は同じ人の「人間嫌ひ」"*Le Misanthrope*" から借りたと言はれて居るけれども、共にウイチャリの喜劇の傑作である。

「田舍女房」ではピンチワイフといふ紳士が田舍で娶つた妻を伴れてランダンに出る。ランダンは道樂者の巣窟である。ピンチワイフ夫人は、いつか女たらしのホーナー（Hornor）といふ男に丸めこまれる。地味な田舍の單調な生活から、華美な自由な都會の生活が既に夫人の心に食ひ込んだところへ、圓轉滑脫な口前のよいホーナーに逢つて、夫人の心は客氣の強い、萬事高壓的な良人から

離れて行く。ピンチワイフの妹のアリシアはスパーキッシといふ男と婚約があるのに、そのアリシアに、之も女たらしのハーコートが巧に取り入る。通人のスパーキッシは、ハーコートが頻にアリシアの甘心を買はうとするのを、對岸の火事を見るやうに平氣でゐるのと、野暮なピンチワイフがホーナーに妻を奪られはしまいかと、躍起勃起するのが好い對照である。筋は隨分くだくだしいけれども伊達男達の女性に對する見解や批評の言葉に機智の閃きが見え、警句に富んでゐる。「腹藏なき人」に至つては「田舍女房」よりも一層猥りがはしい喜劇である。モリエールから借りて來た主人公の人物アルセスト（Alceste）は、モリエールの描いたやうな、寛大な温かい心の所有主でなく、濟度しがたき殘酷な好色者である。ウイチャリはモリエールを模倣しながら、モリエールの純一な高雅な精神を彼自身の爛熟した不道德の空氣で汚してしまつたと言はれてゐる。嘗つてチャールズの子のリッチモンド公爵の家庭教師をしてゐた頃、ドロギーダ伯爵の若い未亡人と私通したため、家庭教師の地位を失つたのはまだしも、未亡人が死んだとき、その財產をせしめようとして悶着を起し、七年の永い年月を囹圄の人となつたが、その前後の不身持は御話しにならないほど甚しかつたさうである。ドライデンはウイチャリを友達に有つたことを誇りとし、さうして此「腹藏なき人」を、英國で上演された戯曲の中で、最も大膽な、有益な諷刺劇だと評したのは、臭ひ物身知らずの譬に洩れず、畢竟道德の標準が違つてゐたからで、決して正しいものとは言はれないけれども、たとい上

つ面にもせよ描いた人物を働かして、輕いさうして明るいその對話に、一種の魅力を感ぜしめる。千七百十五年に死んだ、バトラと同じく、コヴエント・ガーヴンの聖ポール墓地に葬られた。

サー・ジョン・ヴンブラ（Sir John Vanbrugh）は、ヂャイルズ・ヴンブラといふ砂糖精錬業者の次男で、千六百六十四年ランダンで生れた。ウイチャリと同じく、パリで教育を受け、その後の經歴は極めて變遷が多かつた。フランスに在つた間に、間諜の嫌疑を受けて、バスティールに幽閉されたこともあつたし、英國に皈つてから、大尉として軍隊生活もやり、建築師としてグリニッヂ病院や數多貴族の邸宅の設計に從事したこともあつた。で、さうした定まつた仕事があつた爲め、他の戲曲家のやうに放蕩はせず、晩年にはその功勞に報ひられて勳爵士の列に入り、千七百二十六年世を去つた。ヴンブラの喜劇の中では「僞せ友達」"*The False Friend*"、「徒黨」"*The Confederacy*"、「間違ひ」"*The Mistake*"など、フランス物からの飜案や改譯は別として、「ぶりかへし」"*The Relapse*"、「腹立ち女房」"*The Provoked Wife*"などが代表的作物である。「腹立ち女房」ではサー・ヂョン・ブルートと言ふ氣むづかしい良人の機嫌氣褄を取りつくらふその夫人にはコンスタントと言ふ愛人がある。さうして女にかゝつては男は皆鈍いものに極め、一國の政治を執らせても女がやつぱり男よりも偉いと、女同志が寄れば、おほぺらに陰口もきく。そんなら何故女が政治的陰謀をやつて見ないかときけば Because we have intrigues of our own, that makes us more sport. と逃げる。

良人を掌に丸めて、面白可笑しく世を渡るのが上分別と心得てゐる。さうかと思ふと凡ての男達からちやほや持て囃され、凡ての女達から嫉まれるのを無上の樂みと考へてゐる當人からして、己惚と嫉妬の强いファンシフルと言ふ貴夫人がゐる。ファンシフルは面帕を掛けては、聖ジェイムズ公園をぞめき歩るき、さうして女嫌ひを標榜して居るハートフリーと、ブルート夫人の妹ベリンダの親しい關係を嗅ぎ出し、岡燒が嵩じて、ベリンダには、ハートフリーの妻だと告げ、ハートフリーに宛ては、ベリンダには男があつて、既に唯の體ではないと手紙を書く。それがためにベリンダはハートフリーを怨み、ハートフリーはベリンダとの結婚を延期すると言ひ出す。ファンシフルのわる悪戲が露見して芽出度收まるのであるが、筋はどうでもよいのだ。氣のきいた、輕い巧な對話を通じて上流の風俗や習慣をありありと辿ることが出來る。上流社會の人の酒や踊や骨牌に夜を更かしてゐるだらけたその生活振がサーヂョン・ブルートの口から出て居る一節を取る。但しブルートガ女の委に身を扮して、保安官と面會つての對話である。

Just. Pray, how may you generally pass your time, madam? Your morning, for example.

Sir J. Sir, like a woman of quality, I wake about two o'clock in the afternoon; I stretch, and make a sign for my chocolate; When I have drunk three cups, I slide down again upon my back, with my arms over my head, while my two maids put on my stockings; then, hanging

upon their shoulders, I am trailed to my great chair, where I sit and yawn for my breakfast; if it don't come presently, I lie down upon my couch to say my prayers, while my maid reads me the play-bills.

Just. Very well, madam!

Sir J. When the tea is brought in, I drink twelve regular dishes, with eight slices of bread and butter; and, half-an-hour after, I send to the cook, to know, if the dinner is almost ready.

Just. So, madam!

Sir J. By that time my head is half-dressed, I hear my husband swearing himself into a state of perdition that the meat's all cold upon the table; to amend which, I come down in an hour more, and have it sent back to the kitchen, to be all dressed over again.

朝飯も晩餐も殆んど同時で、それから演劇見物か舞踏會に出掛けて後は、再び酒や骨牌に夜をあかすのである。多少誇大に書いた氣味もあるけれども、ピープスの日記を讀んだ眼には全く事實を寫したものと思はれるのみならず、明快な流暢なその散文は、浮世繪の大家ホガース（Hoggarth）のマリッジ・ア・ラ・モウドの一枚を眼前に展べたやうな感じを起させる。

サー・ジョージ・エサリッジ（Sir George Etherege）はかの「桑園」や「ベラミラ」の作家サー・チャールズ・セドリと全く同じ肌合の戯曲作家で、ワイトホールの宮の放逸度なき貴族の一人であつた。フランスに淹留して法律を學んだが、英國に飯つてからは飲酒と女色と博奕に身を持ち崩した。ミッドルトンやドライデンなどと交り、道樂に喜劇に筆に染め、不義密通に絡んだ複雜な事件を突き込んで書いた。「桶の中の戀」"*Love in a Tub*"、「出來ない相談」"*She Would if She Could*"、「はいから男」"*The Man of Mode*" の三つがそれである。勿論モリエールあたりのフランス劇の影響に據るものであるけれども、謂はば英國風俗劇の本家本元と言つた格で、殊に「はいから男」の Sir Fopling Flutter は當代しやれものの代表者で、作家自身を描いたものと見られてゐる。そのけばけばしい對話や濡れ事のいきさつを輕く書き下した文體はヴンブラなどに見る處と差違はない。風俗劇として十九世紀のシエリダンやゴウルドスミスの前驅をなしたものと見てよい。「はいから男」でやんやと名を賣つたエサリッヂは、それなりさつぱりと劇壇から足を洗つて、外交家として一活動したが、革命と共に公職を退き、井リアムに恭順を拒んだため、バリへ落ちて、千六百九十一年に其處で死んだと言はれてゐる。

ウッチャリの喜劇には諷刺の筆意が見え、オトウエイのには動情の力が籠つてゐた。セルダンやエサリッヂのものには、耀かしいまで快活な氣分が溢れてゐる。是等の人々の特徴を一つにしたやう

な作家が井リアム・コングリーヴである。

井リアム・コングリーヴ（William Congreve）は千六百七十年リーズ（Leeds）に近いバージイー（Bardsey）に生れた。父が陸軍の將校で、家族を纏めてアイアランドに移つたため、コングリーヴはそこのキルケニイ（Kilkenny）大學からダブリン大學に籍を移した。革命以後英國に赴いて、ランダンのミヅル・テンプルに入つて法律を修めた。ドライデン達と知己になつて、古典文學の飜譯に筆を染め、二十二歳の時匿名で「インコグニタ」"*Incognita*"といふ小說を出し、その翌年「老獨身者」"*The Old Bachelor*"といふ喜劇を書いて、一時に成功を收め、ハリファックス卿から認められて官途に就き、交際社會の花形としてはでやかな生活をしてゐた消息は、サカリ（Thackeray）の名著「イングリッシ・ヒューマリスツ」"*English Humourists*"に文壇の流行兒として、巨細に寫されてゐる。ドライデンやポウプや、その他貴夫人達から餘りにお世辭を振りまかれて、よい氣になり、彼の戲曲にすつかり感心してゐたヴォルテーア（Voltaire）から訪問を受けたとき、取り濟まして、戲曲などは私のほんのなぐさみ、どうぞたゞの紳士として見て貰ひたいと言つたのがヴォルテーアの氣に障はり、若し貴郎がたゞの紳士だつたら、何にも私は御面會になど來はしないと鋭い皮肉を浴せられたのは名高い話しである。「老の獨り身」と同じ年に、「二心者」"*The Double Dealer*"を書き、二年の後「思ひ思はれ」"*Love for Love*"を更に二年して「弔ひ嫁」"*The Mourning*

Bride"といふ悲劇を物して、オトウエイの"*Venice Preserved*"と共に王政復古期の悲劇の傑作として認められた。以上擧げた喜劇と言はず悲劇と言はず、一つとしてそつはなかつたが、「弔ひ嫁」を書いてから更に二年後の千七百年に「世はさうしたもの」"*The Way of the World*"を公にして、劇壇を去つた。コングリーヴは常々戲曲を書くことを紳士として恥づべきことのやうに考へてゐた矢先、「劇場の褻瀆不道德に就いて」"*Short View of the Immorality and Profaneness of the Stage*"といふ小冊子をジリミ・コリアー（Jeremy Collier）が書いて戲曲家に警告を與へてゐた爲、幾分その影響もあつたと見え、「世はさうしたもの」があまり評判のよくなかつたのに、すつかり氣を腐らし、それ以來ふつつり戲曲に筆を斷つて終つた。「世はさうしたもの」の主人公ミラベル（Mirabell）といふ好男子は、ミラマント夫人（Mrs. Millamant）と戀仲であるが、その戀路の邪魔をするウイッシフアト夫人（Mrs. Wishfort）は、浮氣なミラベルから心有りげな振りをされて、心を弄ばれた揚句、捨てられた爲、ミラベルを憎んでゐる。逢はない中は人を使つて、暗殺してでもやりたく思ひながら、Oh, he has witchcraft in his eyes and tongue;—when I did not see him I could have bribed a villain to his assassination; but his appearance rakes the embers which have so long lain smothered in my breast. 逢へばまた昔の戀の餘燼が胸に燻つて、可愛くてたまらなくなるといふ。そのウイッシフアト夫人の娘は、フエインノールと言ふ紳士に緣付いてゐるが、母の家

へ出入した關係からミラベルと親しい友達であるのを、フェインノールは妙に氣を廻はして、何ぞ二人の間にわけのあるやうに疑り、フェインノール夫人はまた、良人がその友達のマーヴッド夫人と關係が結ばれてゐるやうに取り、がみがみと犬も食はない夫婦喧嘩の花を咲せる。而してフェインノール夫人から疑はれたマーウッド夫人がまた、ミラベルがお好きである。人さまざまに思を包んでいくら隱し立をしても現はれずには居ない、世の中はさうしたものである。If it must all come out, why let 'em know it, 'tis but the *way of the world.* 結局ミラベルとミラマントが手を握り合ふことになるのであるが、筋は念入りにごたついてゐる。强ちコングリーヴの作ばかりではないが、流暢で巧妙な對話にその道德の頽廢した上流社會の醜態を、餘蘊なきまでに描き盡くしてゐる。

コングリーヴは圓轉滑脫な所謂世渡りの上手な人であつたらう。內閣が度々更迭しても、いつも何かしら金になるやうな地位を與へられ、文壇から退いても、尙文學者達から厚き敬意を拂はれて平穩無事に世を送つたが、流行の放縱な生活は免れず、濡れごとも少なくなく、妖艶花の如き女優ブレイスガートル夫人との情事や、またマルボロウ公爵夫人との關係などは、かくれなき事實である。然しながら、その晩年は絕えず痛風に惱まされ、殆んど失明するまで眼を患ひ、千七百二十九年に死んで遺骸はウエストミンスタ寺院に運ばれたが、朝野の名士を網羅して、國葬に等しき盛觀を示したと言ふことである。

ジョージ・ファークワ（George Farquhar）は僧侶の子であつたらしく、千六百七十八年にランダンデリ（Londonderry）に生れた。コングリーヴと同じダブリンの大學に笈を負ひ、半途で學問を止め、同地で役者になつたが、ドライデンの「印度皇帝」を演じたとき、どう間違つたか眞物の劍を使つて仲間の役者に重傷を負はせ、舞臺を退き、暫らく軍人生活をした。それからランダンに出て戲曲作家となり、二十一歳で處女作「戀と德利」"*Love and a Bottle*" を書いて名を知られ、その翌年「變らぬ二人」"*The Constant Couple*" を出して、大受けに受けられ、續いてその續篇の「サー・ハリ・ワイルデーア」"*Sir Harry Wildair*" を書き卸した。「不實者」"*The Inconstant*" 「雙子の競り合ひ」"*The Twin Rivale*" 「驛馬車」"*The Stage Coach*" 「徵兵士官」"*The Recruiting Officer*" など年々ひとつの割合で書いてゐたが、それが糊口の爲めであつて、コングリーヴなどのやうに道樂仕事ではなかつた。とかく逆境に置かれて心遣ひが多く、二十九歳で死んだけれども、六週間餘り病床にあつて書きあげたと言ふ「伊達しやの計略」"*Beaux Stratagem*" がその脚色に無理がなく、最も秀れた出來ばえであると言はれてゐる。

遊びが過ぎ、金につまた伊達しやのエイムウエル（Aimwell）とアーチャ（Archer）の二人が世を忍ぶためにうはべは主從に拵へて田舍へ流れ込み、レイディ・バウンティフルといふ慈善家に目星をつけ一芝居うつ。その門前でエイムウエルが急病を裝ひ、アーチャがせかせかと駈け込み救助

を求める。いろいろ介抱を受け氣がついた振をして、バウンティフル夫人の娘ドリンダ（Dorinda）の手を握りしめて意を通はす。ドリンダの兄のサラン（Sullen）は智慧袋の小さい男であるが、倶樂部に入り浸りで、適々家に皈れば、つらく妻にあたり散らす。サラン夫人はきかぬ氣の女で良人に對して不滿であるからいがみ合が絶えないところへ、アーチャのすつきりとした、よい男振に加へてまめまめしい如才ない擧措に心が動き、若し良人がアーチャのやうな人物だつたらと思ふ。アーチャはそれを知つて誘惑の手を延ばす。一方初心なドリンダの心は、すつかりエイムウエルのものになつて終ふ。アーチャはあつかましくサラン夫人の寢屋に忍んだとき、偶然三人の强盜がバウンティフル夫人の邸宅を襲ふ。アーチャはその賊の一人を捕へ、更にエイムウエルを援けて、殘る二人の賊を捕縛する。アーチャは負傷したのをもつけの幸と、サラン夫人の愛を求める。サラン夫人の兄のサー・チャールズ・フリーマンがランダンから出て來て、サラン夫婦の不和を聽き、離婚問題が持ちあがる。アーチャや兄のチャールズを前へ置いて、サラン夫人が良人のサランとの問答は斯うである。

Mrs. Sul. Pray, spouse, what did you marry for?

Squire Sul. To get an heir to my estate.

Sir Chas. And have you succeeded?

Sbuire Sul. No.

Arch. The Condition fai's of his side.— Pray, madam, what did you marry for?

Mrs. Sul, To support the weakness of my sex by the strength of his, and to enjoy the pleasures of an agreeable society.

Sir Chas. Are your expectations answered?

Mrs. Sul. No.

Count Bel. A clear case! a clear case!

Sir Chas. What are the bars to your mutual contentment?

Mrs. Sul. In the first place, I can't drink ale with him.

Squire Sul. Nor can I drink tea with her.

Mrs. Sul. I can't hunt with you.

Squire Sul. Nor can I dance with you.

Mrs. Sul. I hate cocking and racing.

Squire Sul. And I abhor ombre and piquet.

Mrs. Sul. Your silence is intolerable.

Squire Sul. Your prating is worse.

Mrs Sul. Have we not been a perpetual offence to each other? a gnawing vulture at the heart?

Squire Sul. A frightful goblin to the sight?

Mrs. Sul. A porcupine to the feeling?

Squire Sul. Perpetual wormwood to the taste?

Mrs. Sul Is there on earth a thing we could agree in?

Squire Sul, Yes—to part.

Mrs. Sul. With all my heart.

結婚の動機が既に誤つて居る上に、趣味も性格も全く反してゐる夫婦が、幸福であり得ないことはわかつてゐるが、現代にも斯んな夫婦が少なくあるまい。一方エイムウエルはその兄の子爵が死んでその相續人となり、ドリンダと公然結婚式を擧げるので、レイデイ・バウンテイフル家では結婚と離婚の手續きを同時に行ふことになるのが此喜劇の結びである。コングリーヴなどの喜劇に較べると、餘程教訓的な意味を含んでゐるのは、作家の温かい正直な性格が現はれたものであらうけれども、アーチャがサラン夫人の室に忍ぶ一幕の如きは今日では到底舞臺に上ぼさるべき性質のものではあるまい。

第二節　リー・サザーン・シャドウエルその他

如上の作家の作風に多少の相違はあるけれども、おしなべて放埒と華奢と冷酷と、さうして頓才とが、殆んど共通の基調であることは否まれないと思ふ。なほその才筆は多少見劣りがするけれども、なほ四五輩の記さるべき戯曲作家がある。それはナサニエル・リー（Nathaniel Lee）トマス・サザーン（Thomas Southerne）トマス・シャドウエル（Thomas Shadwell）ニカラス・ロウ（Nicholas Rowe）コリー・シバ（Colley Cibber）ジョージ・リロウ（George Lillo）ヂョン・クラウン（John Crowne）などである。既に散文家として擧げたアフラ・ベーンの如きも又王政復古期の戯曲家として見らるべきことは言ふまでもない。又シバやリロなどに至つては、年代から言ふと、十八世紀に入るべき人であるけれども、王政復古期以後戯曲は全く衰微して、シエリダンやゴウルドスミスの出るまでは書く機會がないので、此處にその名を記して置きたい。

ナサニエル・リーは、千六百五十三年頃に生れ、ウエストミンスタ・スクールとケンブリッヂ大學で教育を受けた丈は判明つてゐるが、その他は不明である。俳優にならうとして大學を去り、それが失敗に終つたのはオトウエイに似てゐる。バッキンガム公爵やロチスタ伯などに知られたのはよいが、いつもそれらの人の取卷き株で、自ら耽溺生活に入つたのであらう。役者を止めて戯曲に筆を執り、二十二三歳の時ヒロウイック・カブリットで「ニーロ」"*Nero*"を出したのを始めとして、

十數篇の史劇と悲劇を書いたが、無韻律で綴つた、「競り合ふ女王達」"*Rival Queens*"）や「ポンタスの王ミスリデイティーズ」"*Mithridates' King of Pontus*" が佳作とされてゐる。又ドライデンと合作の「イーディパス」"*Œdipus*" や「ガイスの公爵」"*The Duke of Guise*" などがある。三十一歳の時狂氣して、五箇年餘り瘋癲病院に監禁されてゐたが、一時病氣が癒え「パリスの虐殺」"*The Massacre of Paris*" を書いた。やがて病氣はぶりかへし、帝國劇場の一座から十磅ばかりの年金を惠まれて、かつかつ命を繋ぎ、或夜ちぶや屋で鱈腹飲んで皈宅の途中、雪中に打倒れ、窒息して死んだのは三十九歳の時であつた。

トマス・サザーンは千六百六十年にダブリンに生れ、その土地の大學を卒業の後ランダンに出て、ミヅル・テンプルに入つて法律を修めたが、ふと氣を變へて軍隊に入り、更に戯曲家として劇壇に立つに至つた。元來人間が利口で、几帳面で、節儉家であつたから、小金を蓄めて當時の文士仲間には珍しい八十六歳と言ふ高齢を保つことが出來た。二十二歳の時の「忠實な兄弟」"*The Loyal Brother*" を始め總てで拾篇の戯曲を書いたが「不運な結婚」"*The Fatal Marriage*" と「オルーノコウ」"*Oroonoko*" の二つの感傷的な悲劇が傑作であつた。「オルーノコウ」はアフリカの土民の酋長が奴隷賣買の犠牲になり、故郷を離れ、悲慘な運命に玩ばれる物語を脚色したもので、筋はアフラ・ベーンの小說から借りたものである。筋違の滑稽な場面を挿んだため、悲劇として輕過ぎるとか、あの年齢まで生きたのだから、もう少し書けさうなものであつたとか言ふのは無理である。量の多いばかりがよいのでもなく、悲劇だからと言つて、喜劇を交ぜて惡い筈もない。それがため却つて悲劇の効果を增す場合もある。オトウエイやリーと竝んで王政復古期悲劇作家として卓越な地位を保つてゐる。

トマス・シャドウエル（Thomas Shadwell）はドライデンからその諷刺詩の一つに、糞味噌に叩かれた人である。ノーフアク（Norfolk）の人で千六百四十年生れで、ケンブリッヂ大學に暫く籍を置いたこともあり、外國に遊學し、皈英後戯曲に筆を執り、モリエールの喜劇の一つを種に「すねた情人」"*The Sullen Lover*" を手始めに十二篇餘りの戯曲を書いて、五十二歳で死んだが、「イプソム・ウエルズ」"*Epsom Wells*" の外讀むに足るものはないと言はれてゐる。性分でもあつたらうが、ベン・ヂョンスンに傾倒した丈あつて、滑稽諧謔が突發して、面白いには相違ないけれども、例の口の惡いビープスが、彼の戯曲の一つ "*The Royal Shepherdess*" を見て、お話しにならない馬鹿氣たものだと評したやうに、戯曲のテクニックの上から取柄の尠ないものかも知れない。然しその場面も言葉扱ひも思ひ切り猥がはしいのが、又時代の風俗を、他の作家より一層こつてりと書き現はしたものとも見られないでもない。欽定詩宗には隨分くだらぬ人物も多いけれども、シャドウエルがドライデンの後を襲つたのは心得違ひであつたし、沙翁の「嵐」"*The Tempest*" や「タイマン・

オヴ・アゼンス」"*Timon of Athens*" を改譯して得意顏で有つたのも、片腹痛き仕業だと、言つた人もある。

ニカラス・ロウ（Nicholas Rowe）はデヴオンシアの人で、千六百七十四年に生れ、千七百十八年に死んだが、法學を修め、富裕な父を有ち、金に不自由がなかつたので、慰み半分に戲曲を書いた「タマレーン」"*Tamerlane*"「悔悛女」"*Fair Penitent*"「ジエーン・シオー」"*Jane Shore*" など、フランス語に譯されたほどフランス人からは受けた作物であるが、大抵イリザバス時代の戲曲家、例へばマーロウやマッシンガやシエイクスピアなどの作意を踏襲したに過ぎない。ジョージ一世登極に際し、テイト（Tate）の後を承けて欽定詩宗に拔擢され、官途に就いたなど、むしろ幸運な人であつた。

コリ・シバ（Colley Cibber）は俳優であり、又有名なランダンの劇場の一つの Drury Lane の座主であつた。戲曲も書き散文も達者に綴つた。千六百七十一年ランダンに生れたが、父はオランダの畫家であつた。十六篇ばかり戲曲を書いたが「拒誓者」"*The Non-Juror*"「粗忽な亭主」"*The Careless Husband*" などが多少讀まれるけれども、性格の描寫も機智もたどたどしく、最も出來のよい「拒誓者」すら、モリエールのタータツフ "*Tartuffe*" の換骨脫體である。サザーンと丁度同じ八十六歳の天壽を享け、而も千七百三十年以後欽定詩宗に擧げられたが、ポウプから憎まれて、ダンシア

ド "*Dunciad*" の中に祭り込まれたのは氣の毒の樣であるが、彼に取つては名譽であらう。

ヂョン・クラウン（John Crowne）に「サイエスライーズ」"*Thyestes*" と言ふ悲劇と「サー・コートリ・ナイス」"*Sir Courtly Nice*" と言ふ喜劇があつて、後者はジエイムズ二世の天覽に供せられたと傳へられてゐる。クラウンの死んだ年は千七百三年とされてゐるけれども、生れた年は不明であり、經歷もはつきり知られてゐない。

ジョージ・リロウ（George Lillo）はむしろポウプ時代に入るべき人であるけれども、ポウプ時代には戲曲家として特に擧ぐる作家は殆んどないので、茲處に記しておく。リロウの生れたのは千六百九十三年で、三十六歳で死んだ。ランダンのムーアゲイトの富裕なオランダの寶石商の子であつた。「ランダン商人」とも又「ジョージ・バーンウエル」"*George Barnwell*" とも呼ぶ一種の家庭劇と、「癒らぬ好奇心」"*The Fatal Curiosity*" とが名高い。

リロに王政復古期の戲曲と共に十七世紀の文學の筆を歛め、改めて十八世紀に筆を起さねばならない。

第二篇　古典時代（クラシカル・ピーリオッド）

第一章　ポープ時代の散文

十八世紀の上半期のポウプ時代はオーガスタン時代（The Augustan Age）とも言ひ、ヂョンスン時代へかけて古典文學の勃興を見た時代である。ギリシア、ローマの古代の文豪達が定めた掟を遵奉し、同時にフランスの文士達の作物が盛に讀まれて、徒に空想の翼を張り擴げず、分別の勝つた、簡潔な、さうして精緻な散文の批評と辛酷な諷刺詩とが、特徴を示してゐる。謂はゞ王政復古期に起つた古典研究の波動の連續と言つたやうなものである。斷つておきたいのは、古典の研究は此時に始まつたわけではない。遠いイリザバス時代にもあつた。然しイリザバス時代は、王室に對する忠誠と言ふことがその當時の人の頭には可成強く浸み込んでゐた。愛國心が旺盛であつた。情熱があつた。從つてローマンティックの情緒に導かれて、どことなくのんびりとして、しかも清新の氣力に充ちてゐたが、クロムウエル時代から王政復古期へかけて、その國民の愛國心は鈍り、忠義は薄らぎ、理智に赴き、冷靜に飯して、その文學から生氣と情熱を失つた。技巧の末に走つて、自然の本を忘れて終つた。ポウプからヂョンスン時代へかけての文學は、此點から言ふと、眞の古

典主義の現はれでなくして、僞古典主義であると言ふことが出來るかも知れない。私は又批評が爛んであつたと言つた。

批評氣分の横溢はやがて小冊子の流行となり、相次いで定期刊行物卽ち新聞雜誌の發行に見るに至つたことは事實である。日刊新聞の英國に初めて現はれたのは千七百二年三月十二日に發行された日刊新聞「デイリ・クラント」"*The Daily Courant*"で、ダフオウ（Defoe）が起した「リヴユー」"*The Review*"の如き、千七百四年から約十ケ年刊行を續けた。スヰフトの執筆した「イグザミナ」"*The Whig Examiner*"や、アディスン（Addison）の出した「ウイグ・イグザミナ」"*The Whig Examiner*"の如き次第に政黨的色彩を帶びた。同じアディスンの執筆した「スペクテイタ」"*The Spectator*"や「ガーディアン」"*The Guardian*"などがあり、「タトラ」"*The Tatler*"や「メドリ」"*Che Medley*"にはスティール（Steele）が主として筆を執り、或は寄稿した。二三號で廢刊したものもあつたけれども、殆ど枚擧に遑なきほど新聞雜誌の發行を見た。千七百四十五年には、小說家として高名なフイールディングが「トルー・ペイトリアット」"*The True Patriot*"に執筆したし、千七百五十年から三ケ年ばかり續いた「ランブラ」"*The Rambler*"や千七百五十八年から、之も約三ケ年發行した「アイドラ」"*The Idler*"などには、當時文壇の牛耳を握つたヂョンスンの書いたものが絶えず現はれたなど、どんなに新聞や雜誌が歡迎され、又重要視されてゐたかが推量されやう。是丈の前提のもとに、それら

の新聞雜誌と關係の深いダフオー、ス井フト、アヂスン、及びスティールからポープ時代に入つて見る。

第一節　ダニエル・ダフオウと「ロビンスン・クルーソウ」

ダニエル・ダフオウ（Daniel De Foe）は千六百六十一年にランダンのクリプルゲイトに生れた。父は獨立新教徒で、肉屋をして居たが、ダフオウを牧師にする積りで、マーティンといふ人の經營してゐたニューイントン・グリーンの脫教派の宗教學校に入れた。然し彼は僧侶にはならずに、二十四歳の時コーンヒルでメリヤス製造業を始めて、失敗に終り巨額の借錢を拵へた。一時義勇近衛騎兵聯隊に入隊したこともあつた。三十二三歳の頃その借錢濟をする考で、煉瓦製造を始めたが、之も捗々しくなかつた。常備軍の必要を論じた小冊子を出したのが三十六歳の時で、冊誌の書き始めであつた。井リアム三世の味方となつて "*Essay on Projects*" を書いたのはその翌年である。その後政黨に關係し、辯難論爭にその頗る覇氣に充ちた短刀直入の筆を振つた。文壇に立つやうになつて彼は唯フオウと言ふ短かい名が引き立ない爲に、D. Foe 又は De Foe, 又はDefoe と綴つたのださうである。大學の門こそ潛らなかつたが、マーティンの學校に在學時代、充分の學殖を備へてゐたのである。でも、ス井フトやポウプやアディスンなどから甚く輕蔑されてゐた。ポウプの "*Dunciad*" の中に Earless on high stood unabashed De Foe. とあるのは、ダ・フオーが嘗つて曝し臺に起たせ

られたことを言つたものである。然し耳がないなどは根もない嘘である。「名は何と言つたか忘れたが明盲目の奴」と毒づいたなど、——尤ポウプとス井フトは特別に偏頗な人間ではあつたには違ひないが——文士の狹量を示してゐるばかりでなく、ダフオウを認めることの出來なかつたのはス井フト自身も明盲目の譏りを免れまい。

ダフオウの書いた當時の公の問題に關する諷刺文や論爭文は冊子として出版され、或は新聞に載せられたものであるが、非常な數に上ぼつてゐる。その中で最も名高いのは「說敎者を處分する最近道」"*The Shortest Way with the Dissenters*" であつて、その文句の中には、秘密集會の場所に居合せたものは、何人を擇ばず放逐するがよい、さうして說敎者は絞首せらるべきものだ、とあつたので國敎派の人々は頗る痛快に感じたところ、豈計らんやダフオウはその裏を言つてゐたことが判り、議會の問題にまでなつて、冊子は不淨役人の手で燒き捨てられ、罰金を取られた上に三日間曝し臺に立たなければならなかつた。此刑罰を受けることは此上もない恥辱であるから、多くの場合にあつて、見物人から嘲笑されたり、唾を吐つかけられたり、泥や瓦礫を飛ばされたりし、ひどいのになると腐つた玉子や猫の死骸など叩きつけられるのが普通であるのに、ダフオウを取り捲いた群衆は、曝し臺を花輪で飾り、花束を投げて、酒の飲み廻しをして、彼の爲に祝盃を擧げた。これによつてダフオウがランダン人からどんなに好感を寄せられてゐたかが知られる。曝しものになつた後獄舍

に投せられ、再び政府の惡口をきかないと言ふ條件附で、やがて釋放されたが、ダフオウは默つては居なかつた。「曝し臺を讃美するの歌」"*A Hymn to the Pillory*"を作り、心に疚しいところのないもの、眞直な心を有つてゐるものは不當な耻辱を與へられても、少しも耻しいとは思はないと言ふ意を寓せしめて、暗に當局を當擦つた。詩と言へば嘗つて井リアム三世を攻擊した謗り歌が世に出たとき、ダフオウは「眞のイギリス人」"*The True-Born Englishman*"といふ諷刺詩を書いてそれを反駁し、八萬冊を賣り盡したさうであるが、畢竟詩は彼の畑のものでなかつた。獄中でも絶えず筆を執つて、不偏不黨の公平な精神から政治問題を論じた。スカンダル・クラブといふ倶樂部を想像して、その倶樂部で種々評議をした體にして、一般の社會や家庭生活の利益になるやうな報告を載せた新聞を發行したのが「リヴユー」"*The Review*"で、最初は一週二回であり、軈て三回づゝ出版され、千七百十三年まで續行されたが、入牢中に發行し始めたものである。アデイスンやスティールも同じ精神で雜誌を出したけれども、ダフオウが先鞭をつけたのである。入牢中に猶一つ「事變兇災錄」"*A Collection of Casualties and Disasters*"を書いた。ランダンの大火と並んで名高い暴風雨の記事で全く想像になつたものであるが、彼の「疫病の年の記錄」"*The Journal of the Plague Year*"と共に、世間の人は實錄だと信じたものである。それらの論文の外に、數多小說を書いてゐる。その一つは「ロビンスン・クルーソウ」"*Robinson Crusoe*"である。前篇を千七百十九年の四月

に出版し、翌年八月にその後篇を上梓した。十二三年前に「ヴイール夫人の幽靈」"*The Apparition of Mrs. Veal*"を書いたが、事實らしく思はせる怪談で、小說ではない。「ロビンスン・クルーソウ」は全く小說である。此小說が世界の隅々までも汎く行きわたつて、學問の有無に關係なく、年齡の長短を問はず、今も猶幾百千萬の讀者を樂しまし、不思議な魅力を有つてゐることは周知の事實である。題名は昔の學友に同名のものがあつたのに假り、筋は一部分ではあるが、アリグザンダ・セルカー(Alexander of Selkirke)と言ふフアイフ生れの水夫が、南太平洋のジュアン・フアーナンデイーズといふ島に取殘され、永年孤獨な生活をした實歷談に取つたものである。ロビンスン・クルーソウが家を離れ、船員の群に加はり、トルコの海賊に捕へられて奴隷になる。小さなボウトに乘つて逃亡を企てたが、食物と飲料水の欠乏に惱まされ、適々海岸に上陸すれば、猛獸や蠻人に脅かされて苦しんでゐる內に、ブラジル行の船に救はれて一段落を告げる。やがて殖民事業に志し、同志を語らつてギニーへ渡る途中暴風雨に遭遇ひ、他の船員は悉く死滅し、クルーソウ丈が孤島に漂着する。自ら家を造りなどして、どうやら命を繋いでゐる。野羊など捕へて飼養を始める。或日海岸に人の足跡のあるのに吃驚かされる。人食人種が捕虜をその島へ伴れて來て、殺して食はふとするを見て、クルーソウはその捕虜を救つてFridayと名付ける。そのフライデイが無二の伴侶となる。難破の折幸に手に入つた聖書を明暮讀んでゐたが、今はフライデイと共に尊き法の心の糧を分け合つて、倶

に暮らした三年は、全く幸福なものにされたと、クルーソウは躬ら言つてゐる。クルーソウはフライデイに據つて慰藉を得、フライデイはクルーソウによつて清きキリスト教信者になる。結局英船に救はれて、クルーソウは本國に皈るのである。身の毛の竦つ怖しい事件を織り込みながら、巨細にクルーソウの行動を記して眞に迫つてゐるし、單純な言葉を驅つて、すらすらと書き流してゐる。而もクルーソウが徒らに落膽せず、厚く自ら恃んで、常識と勤勉の力により、その難境を切り脱けることの出來たことを示して、得難き教訓を殘してゐる。フライデイを救つた當時からフライデイがクルーソウを父の如く慕ひ、主の如く仕へた顚末を斯う記してゐる。

I gave him bread and a bunch of raisins to eat, and a draught of water which I found he was indeed in great distress for by his running; and having refreshed him, I made signs for him to go lie down and sleep, pointing to a place where I had laid a great parcel of rice straw, and a blanket upon it, which I used to sleep upon myself sometimes; so the poor creature lay down and went to sleep.

He was a comely handsome fellow, perfectly well made, with straight long limbs, not too large, tall and well-shaped, and, as I reckon, about twenty-six years of age. He had a very good countenance, not a fierce and surly aspect, but seemed to have something very manly

in his face, and yet he had all the sweetness and softness of an European in his countenance too, especially when he smiled. His hair was long and black, not curled like wool, his forehead very high and large, and a great vivacity and sparkling sharpness in his eyes. The colour of his skin was not quite black, but very tawny, and yet not of an ugly, yellow, nauseous tawny, as the Brazilians and Virginians, and other natives of America are, but of a bright kind of dun olive colour, that had in it something very agreeable though not very easy to describe. His face was round and plump, his nose small, not flat like the negroes, a very good mouth, thin lips, and his teeth fine, well set and white as ivory. ……

Never man had a more faithful, loving, sincere servant than Friday to me; without passion, sullenness or designs; perfectly obliging and engaging; his very affections were tied to me, like those of a child to a father, and I daresay he would have sacrificed his life for the saving mine upon any occasion whatever. The many testimonies he gave me of this put it out of doubt, and soon convinced me that I needed to use no precautions as to my safety on this account.

ロビンスン・クルーソウが完結になつて後二年、「疫病の年の記錄」" *The Journal of the Plagne*

Year" が出版された。ピープスやイーヴリンの日記にも見えるやうに、ランダンに大火のあつた前年の千六百六十五年に疫病の大流行があつたが、その疫病の怖ろしさを目擊した人の物語體に書かれてゐるので、此書を讀んだ人は實際の歷史と信じて終つたと言ふ程、記事が綿密であるけれども、冷靜に考へながら讀むで見ると、大半想像ででつちあげた作であることが容易に發見される。例へば或る商人の妻が姙娠をしてゐて疫病にかゝつた。二人の雇人は逃げて終つて、產婆も看護婦も賴むことが出來ない、亭主は狂氣のやうに軒並の家を叫んで歩るき、やつと疫病のあつた家の監視人に、看護婦の周旋を依賴して飯つて見ると、胎兒は死んで生れ、引續いて妻も絆切れて終ふ。翌朝監視人が看護婦を伴れてその家へ行つて見たら、亭主は疫病に感染したのではなかつたが、生れた子を側にして、聢かと妻を腕で抱きながら死んで居た。尤之なんぞはありさうな話しであるが、親戚のものが死んで茫然自失したその男は :—

Who was so absolutey overcome with the Pressure upon his Spirit, that by Degrees, his Head sunk into his Body, so between his Shoulders, that the Crown of his Head was very little seen above the Bones of his Shoulders.

さうしてそのまゝ一年ばかり生きてゐて、とうとう死んで終つたなど記してゐる。死人を滿載した車が幾臺となく墓地の門前に置かれたなりでゐるけれども、車が寺へ來るまでに、窓から、或は露臺

から死人を搔き載せ、人足どもが何處からとなく擔つて來て積み込むので、どんな人の死骸なのか薩張判らないと書いたところもある。

In our parish of Aldgate the dead-carts were several times, as I have heard, found standing at the churchyard gate, full of dead bodies; but neither bellman, nor driver, nor any one else with it. Neither in these nor in many other cases did they know what bodies they had in their cart, for sometimes they were let down with ropes out of balconies and out of windows; and sometimes the bearers brought them to the cart, sometimes other people; nor, as the men themselves said, did they trouble themselves to keep any account of the numbers.

ロビンスン・クルーソウの外に五つ六つの小說を書いて居る。誘拐されたのが始まりで、浮浪民の手に賣り渡され、世の中の荒浪に揉まれ揉まれて、幾多の變遷を經、遂に海賊になる物語の「ケアプテイン・シングルトン」"*Captain Singleton*" や、千軍萬馬の中を往來した勇者の日記で恨漫斯と歷史を兼ねた「カヴリーアの回想錄」"*Memoirs of a Cavalier*" や、相應の家柄に生れながら、仲間が惡かつたばかりに、盜賊にまでなりさがり、結局殖民地へ遣られる「カーヌル・ジャック」"*Life and Adventurers of Colonel Jack*" の經歷談や、盜みもすれば、淫も嬉ぎ、度々良人を取り換へて、世の中の男を手玉に取り、惡いことを仕盡した揚句、悔悟の涙を絞る女の一生、恰もホガースの畫を見るや

うな細かい筆で書かれた「モル・フランダーズ」"*Moll Flanders*" などがある。モル・フランダーズと同じ種類の女ではあるが、手練手管で上流社會の男をたらし、榮耀榮華を仕盡し、面白可笑しく月日を送つたが、遂に暗い濕めつぽい獄舍の中で果てる、フランス亡命者の娘「ロクサナ」"*Lady Roxana*" の一代記など、何れも盜賊や兇狀持や惡漢や賣淫婦の冒險や經歷を描いた所謂ピカルーン (Picaroon) 小說であつて、讀んで氣持のよいものでない。ダフオウの小說は氣質小說でもなければ、空想小說でもない。撥情小說でもなければ、滑稽小說でもない。たゞの勞働小說である。どの頁を開けても汗の臭がする。しかも紋切形に道德的である。或意味に於て無理想現實主義の十八世紀を最下等の側面より代表するものである」と漱石は評してゐる。それでも道德的である丈はアフラ・ベーンの小說よりは優れてゐる。リチヤードスンやフイルデイングを經て、サツカリやデイキンズに至る小說發達の道程として見落すわけにいかない。ロビンスン・クルーソウが出された千七百十九年から千七百二十八年に至る十年間に、以上の多くの小說の外に、"*A Tour of Great Britain*" や、"*The New Voyage round the World*" など旅行案內や航海記も書いてゐる。隨分多方面な作家であつたけれども、今日ではロビンスン・クルーソウ以外にダフオウの小說を讀む人は尠ない。ラムの如き公平な批評家すら「それらの小說の人物が女中や水夫などの讀者階級より以上の、高い階級の人から人氣を集めることは、もう二度とあるまい」と言つたのは尤である。

ダフオウの晩年は甚だ不幸であつた。何か政治問題で面倒が持ちあがり、それに家庭にも面白くないことがあつて、家出をして身を隱し、氣でもふれたものか、二年ばかり宿無しでほつつき歩るき、最後にムーアフイールドの、ある下宿屋で死んだのは千七百三十一年であつた。

第二節　ヂヨナサン・ス井フトと「ガリヴ旅行記」

ダフオウの名がロビンスン・クルーソウと結びついて知られてゐるやうに、ス井フトの名はガリヴの旅行記で記憶されてゐる。

ヂヨナサン・ス井フト (Jonathan Swift) は千六百六十七年にダブリンで生れた。父はキングス・イン (King's Inn) の賄方をしてゐたが、元より貧乏であつたのみならず、ス井フトの生れる少し前に死んで終つた。父の兄弟に母と共に引き取られ、乳が足りなかつたか乳母に育てられ、その乳母から聖書を讀むことを習つて四歲の頃には、聖書がどこでも讀めたと言ふほど、非凡な頭腦を有つて居た。六歲の時にキルケニイの語學校に送られ、母は遠い親類を賴つて寄寓することになり、母子別れ別れになつて、淋しい悲しい心持で、浮世の浪風に揉まれなければならなかつた。十四歲の時ダブリン大學に入り、好い加減な勉强をして學位を取つて後、當時大外交家として聞えたサー・ウイリアム・テンプルの秘書として、その邸に寄寓することになつた。テンプルはス井フトの母方の遠緣でサリ (Surrey) のムーア・パークに贅澤な邸宅を持つて居たが、テンプルの家にはテンプルの妹の

友達でヂョンスンと言ふ婦人が同居してゐた。ヂョンスンにはヘスタ（Hester）と言ふ可愛い娘が一人あつた。スヰフトはヘスタの家庭教師と言つた格で親切に讀み書きを教へた。ヘスタはスヰフトに懷き慕つた。スヰフトはムーア・パークに居た十年餘りを矻々と勉强してゐたが、彼の淋しい心の慰安となつたのはヘスタの純一な愛であつた。スヰフトにはヘスタが闇夜の星のやうに感じられた。スヰフトがムーア・パークを去つてランダンへ出てからも、ヘスタと絶えず書翰の遣り取りをした。千七百十年頃書き始めた "*The Journal to Stella*" はヘスタがまだあどけない少女の頃から睦み合つた昔を偲ばせる言葉遣ひ、自身を "Poor, dear, foolish rogue!" だとか ヘスタを Pappet だの my dear だのと呼んだのを略字で P. D. F. R. 'Ppt. 、或は M. D. など記して、その手紙に當時の文學や政治に關係した細かな記事があり、又スヰフト自身の平生の行動や思考を餘さず書いた珍書である。例へば、

"Mr. St. John, lord Bolingbroke's brother, came this day at noon with an express from Utrecht, 'that the peace is signed by all the ministers there, but those of the emperor, who will likewise sign in a few days;' so that now the great work is in effect done and I believe it will appear a most excellent peace for Europe, particulary for England. Addison and I, and some others, dined with lord Bolingbroke, and sate with him till twelve. We were very

civil, but yet when we grew warm, we talked in a friendly manner of party. …… Well, but you are glad of peace, you Ppt. the trimmer, are not you? As for D. D. (Mrs. Dingley, Stella's friend) I don't doubt her. Why, now, if I did not think Ppt. had been a violent Tory, and D. D. the greater Whig of the two! It is late. Night, M. D."

夜遲くまで机に向つて斯うしてエスタに宛てて手紙を書くことを怠らなかつた。スヰフトがヘスタに逢つたのはヘスタが八歳で、スヰフトは十四違の二十二歳であつた。此書を書いたのはそれから廿年餘り經過した時で、スヰフトは一角の文學者として、又政客としてランダンで活動してゐたがヘスタとの手紙の往復は絶えず續いてゐた。「彼は朝晩彼女に手紙を出すことがしばしばある。一本手紙を出すと、同じ日の中にきつと又新しい手紙を書く。彼女の可愛い小さな手を離すことが出來ないと言つた風だ。遠いダブリンで、彼女が彼のことを思ひ出し、逢ひたがつてゐるといふことを知つてゐる。枕の下から彼女の手紙を取り出して、彼を愛した、あの可愛い純な女に話しかけでもするように、親しさうに、お父樣らしく、撫でいたはる優さしい言葉で話しかける。「おまち」とかう書く、或朝——千七百十年の十二月十四日なんだが、——お待ち、私は此朝寢床の中でお前の手紙の返事を書かう」とサッカリが這般の消息を面白く書いてゐる。それでスヰフトはヘスタ卽ステラと結婚したかどうかは判然しない。尤スヰフトが千七百十三年ダブリンの一寺の副監督として赴任

した時、ステラもその迹を趁つて、近處に住んでゐたとも言はれてる。又ステラがテンプルの私生兒であつたと言ふ説もあるが、據處がないわけでもない。といふのは、テンプルが死んだ時、一千磅の金を彼女に遺したので、さう推測されてゐるのだ。ス井フトはヘスタをそれほど愛してゐたが、もう一人關係をつけてゐた婦人があつた。それは同じ名のヘスタ・ヴノムライ（Hester Vanhomrigh）と言ふランダンの豪商の娘だつた。ス井フトは餘り人好きのする人ではなかつた。大の皮肉屋で、或意味から言ふと、人間そのものを憎み嫌つた人である。そのス井フトにステラ（Stella）の名で知られてるミス・ヂョンスンと、ヴネサ（Vanessa）で通つてゐる、ミス・ヴノムライといふ二人の美人に、血道をあげさせたのは不思議である。ヴネサは父に死に別れた時分、遙々ランダンからアイアランドへ立越え、ダブリンから十哩ばかりのケルブリッジに近く一家を持ち、ス井フトに結婚をせがんだが、埒があかず、ステラとス井フトの關係の眞相を知らうとして、ステラに宛てゝ手紙を書いたとき、ス井フトが之を知つて、甚く憤り、ヴネサにその手紙を投げつけたとかで、ヴネサは焦慮の末、程なく死んだと傳へられてゐる。ヴネサとス井フトの關係はス井フトの "*Cadenus and Vanessa*" といふ一篇の詩に書き殘されてゐる。ス井フトは既にオクスファドを出て、僧侶の資格は持つてゐたが、監督になりたい志望を持つてゐた。民權黨から王權黨に轉じたのも、將又罵言讒謗の毒筆を揮つて、新聞や雜誌に王權黨の提灯を持つたのも、その野心を充したいからであつた。政黨に關係を結びな

がら、アディスンやスティールやポウプ、アーバスノット、ゲイなどと交つて文壇に雄飛したけれども、嘗つて書いた「桶物語」"*The Tale of a Tub*" や「ウンザの豫言」"*The Windsor Prophecy*" などが一部の人の感情を害して、ダブリンの聖パトリック寺院の副監督の地位しか得られなかつた。ハノウヴ家の登極と共に王權黨は失脚し、ス井フトは年來の嘱望も水泡に飯して、遂にダブリンに蟄居して終つた。彼の榮達の障害となつた「桶物語」とはどんなものであつたか。

「桶物語」は千六百九十六年に書き、テンプルの邸に居た時の作であつて、ス井フトの筆を染めた最初の散文である。桶物語と言ふ珍妙な名稱に就いては序文が之を明かにしてゐる。「船乘が鯨に出つくはすと空つぽの桶をなぐさみに投げてやる習慣がある、それは鯨を桶の方へ誘き寄せて、船を引つくり返させないやうにする爲なのだ。ところで、謂ばその鯨にあたる當代の才人達が、宗教や政治に喙を容れ、矢鱈にそれを攻擊をする。無暗にあらを拾ふ。國民といふ船は甚だ危險である。そこで "and it was decreed, that in order to prevent these leviathans from tossing and sporting with the commonwealth, which of itself is too apt to fluctuate, they should be diverted from that game by a Tale of a Tub. And, my genius being conceived to lie not unhappily that way, I had the honour done me to be engaged in the performance." とあるやうに、此桶物語をその鯨、否才人達にあてがつて、ともすれば動搖したがる國民を醜弄したり、おもちやにすることのないやうにするのだ

と言つてゐる。筋はピータとジャックとマーティンといふ三人の兄弟が、親譲りの上衣を着て仕事にかゝる。ところが、長兄のピータが獨り幅をきかし、兄弟が相互に反目して別れ別れになり、自由行動を採ることになるが、氣性の荒いジャックは上衣の裝飾を悉く引き千切つて、形ばかりの雜色の襤褸にして終ふ。マーティンは又上衣の裝飾は除くけれども、地質を損じない程度に、丹念に補綴つて、それを着てゐる。さうしてそれぞれ一角の出世をする。つまりローマ教會とイングランド教會とピューリタン教會の三つの宗派の分裂を示したのである。舊弊に泥まず、過激に墮さない、比較的穩健なイングランド教會の肩を持ち、他の二宗教を嘲笑したもので、極めて滑稽に見えて、哲學的深みを有つてゐる諷刺文である。人間本然の性質のその根底を探り、歴史上の凡ての時代と場所に適合するもので、「ガリヴの旅行記」を書かなかつたら、恐らく此書は、スヰフトの作中の最傑作であつたらう。但しスヰフトは例の人間嫌ひと言ふ偏見があり、不恭非禮な言辭を弄んでゐる爲に、折角提灯を持つつもりだつたイングランド教會からも、疑惑の眼を向けられ、出世の妨げとなつたのは是非もないことである。スヰフトがテンプルの家に寄寓してゐた時分は、テンプルを訪れる知名の政客や文士などに紹介されて知己を結んだが、「桶物語」を書いたその翌年に「書籍の戰ひ」"The Battle of the Books" を書いてゐる。それは當時の文士達の間に、古代と近代の作家の優劣長短に就いて議論が沸騰したとき、テンプルは古代作家黨であつた。スヰフトはテンプルの意見を賛して敵

に當つた深酷な諷刺文であつた。而して「桶物語」と「書籍の戰ひ」の二つは共に千七百四年に公にされたものである。千七百十四年から千七百二十一年へかけて、ずつとアイアランドに住んでゐたが、此間にアイアランドの爲に二三の有名な作物を出してゐる。既に說いたやうに、年來望をかけた監督になり損ない、拗者の横柄なスヰフトは、アイアランドに引籠つて、アイアランド人から大持てに持てた。當時のアイアランドは新教徒と舊教徒の反目が甚しかつた。新教徒は旭日昇天の勢で幅を利かしてゐたのに反し、舊教徒は孤城落日の姿で元氣がなかつたけれども、それでもなかなか負けては居ず、互に鎬を削つて、迫害の加へつこをしてゐた。そんな國情であつたところへ、アイアランドの大地主や大資本家が、アイアランドから吸收した富を英國その他へ持ち出して、終ふために、アイアランドは貧乏になるばかりであつた。殊に農民の窮乏は見るも氣の毒な狀態であつた。いかに人間嫌ひなスヰフトでも、それに心を動かさない筈がない。例の皮肉たつぷりな諷刺文を數多小冊子に書いて出版した。

地主の横暴のためにアイアランドには貧民と乞食がうようよしてゐる。而して貧民が又無暗に子を産む。若し其子供を生後一ヶ年位で豚の子同樣に市場に出したら、燒いたり煮たりした肉料理がそれらの富豪の食卓を賑はすであらう。さうすればその親も助かり、貧民の數も減つて國の爲にもなり、金持はそれらの滋味に舌鼓を打つことが出來て、一舉三得であると言ふ樣な理屈を箇條別に

して提案した「貧民の子供が親や國の荷厄介にならぬやう、そしてその子供を公共の利益になるやうにする內端の提案」"*A Modest Proposal for Preventing the Children of Poor People in Irland from being a Burden to their Parents or Country, and for Making them Beneficial to the Public*" より言ふ長い表題の論文を始め．アイアランドの農民のために、製造業のために、英國に向つて皮肉たつぷりの提案をした。そのたんびに英國當局の眼は光つた。その中でも最も名高いのは「織物屋の手紙」"*The Drapier's Letters*" であつた。內容の手紙は七本で千七百二十四年に書かれたものである。此の冊子を書いた動機は斯うである。バーミンガムの投機師のウヰリアム・ウッドといふ男が半片の銅錢を鑄造してアイアランドへ供給する許可を得た。それは惡い貨幣を鑄造して、ウッドが私腹を肥やすばかりでなく、益々アイアランドを窮地に陷れるものと信じたスヰフトは M. B. Drapier といふ匿名で、ウッドの半片貨がその價値極めて劣等であることを指摘し、苟も愛國心のあるものは誰でも此貨幣を受取らぬがよい、又英國製の品物は一切使ふなと忠告し、「私の店の呉服物に一磅に十七志の租稅を課せられる位なら、首を絞られた方がましだ」と熱烈火のごとき議論を發表した。之を讀んで、唯さへも感激し易いアイアランド人は昂奮の極に達し、狂氣のやうに騷ぎたてた爲め、政府をしてその特許を取消すの己むなきに至らしめたものである。書翰の第一に斯うある。

Brethren, Friends, Countrymen, and fellow-subjects:—

What I intend now to say to you, is, next to your duty to God, and the care of your salvation, of the greatest concern to yourselves and your children; your bread and clothing, and every common necessary of life, entirely depend upon it. Therefore I do most earnestly exhort you as men, as Christians, as parents, and as lovers of your country, to read this paper with the utmost attention, or get it read to you by others; which that you may do at the less expense, I have ordered the printer to sell it at the lowest rate. It is a great fault among you, that when a person writes with no other intention than to do you good, you will not be at the pains to read his advices. One copy of this paper may serve a dozen of you, which will be less than a farthing apiece. It is your folly, that you have no common or general interest in your view, not even the wisest among you; neither do you know, or care, who are your friends, or who are your enemies.

畢竟アイアランドの福利を思へばこそ書くのであるが、四年前愛國者の一人が、自國の品物を使へ、英國製のものを使ふなと絶叫したとき、その冊子 "*Proposal for the Universal Use of Irish Manufactures*" (1720) を印行した印刷業者は甚しい懲罰を受けた。それも氣の毒だが、その時の審

官はアイアランド人でありながら、その印刷業者を罪に落して終つた。洵に言ひ効のない話しだと前置して、偖ウッドの貨幣に言及し、

Now you must know, that the half-pence and farthings in England pass for very little more than they are worth; and if you should beat them to pieces, and sell them to the brasier, you would not lose much above a penny in a shilling. But Mr. Wood made his halfpence of such base metal, and so much smaller than the English ones, that the brasier would not give you above a penny of good money for a shilling of his; ..... For example, if a hatter sells a dozen of hats for five shillings a-piece, which amounts to three pounds, and receives the payment in Wood's coin, he really receives only the value of five shillings.

引用した部分はまだまだ手柔かい方である。四つ目の書翰が最も激烈なものであつた。政府は型のごとく印刷者を拘引し、三百磅の懸賞附で作家を物色したが、遂に作家は出て來なかつたし、印刷者も此度は無罪放免で濟んだ。當時のスヰフトの人氣は素晴らしいものであつた。往來を通ると、誰彼となく帽子を脱いで挨拶をするし、英國へ行つて戻つたときなど、花火を打ち揚げ、寺鐘を撞き鳴して、その役宅へスヰフトを送り込んだ。その同じ年の千七百二十六年に、彼ダフォウの「ロビンスン漂流記」と共に世界的名著の「ガリヴ旅行記」"*Gulliver's Travels*" が出版になつた。永

劫の生命を有つ此書が生れたのはよいが、スヰフトが眞劍に愛したステラのヘスタ・ジョンスンには其翌々年死に別れて、いとど淋しい暗い心を愈々淋しく暗くした。

「ガリヴ旅行記」は筋を記くまでもなく、小學の兒童でも理解が出來る程度に平易な文章であるし、諷喩も明瞭である。例へば、ガリヴが最初難破して流れ着いた島で、身の丈六寸ばかりの人間に取り卷かれることから書いて、その島には帝王も居れば、大臣その他の諸役人も居て、各自榮達の道を計つてゐる。乃ち地面から三尺ばかりの高さに糸を張つて、その上で綱渡りの藝當を演ずる。綱から落ちずに、一番高く飛べたものに空いてる官職が振り當てられる。總理大臣にしたところで、他の大官連中より僅か一寸ばかり高く飛ぶ丈である、と言つた工合に、凡てが小さいけれども、小さいなりに國法を犯したとか、習慣を破つたとか、紛擾が絶えないこと、人間の度量の狹いこと、規模の小さいこと、目的の莫迦らしいことを嘲笑つてゐる。綱渡りの一節を取る。

The Emderor hada mind one day to entertain me with several of the country shows, wherein they exceed all nations I have known, both for dexterity and magnificience. I was diverted with none so much as that of the rope-dancers, performed upon a slender white thread, extended about two feet and twelve inches from the ground. Upon which I shall desire liberty, with the reader's patience, to enlarge a little.

This diversion is only practised by those persons, who are candidates for great employments, and high favour at court. They are trained in this art from their youth, and are not always of noble birth, or liberal education. When a great office is vacant, either by death or disgrace, (which often happens) five or six of these candidates petition the emperor to entertain his majesty and the court with a dance on the rope; and whoever jumps the highest without falling, succeeds in the office. Very often the chief ministers themselves are commanded to show their skill, and to convince the emperor that they have not lost their faculty. Flimnap, the treasurer, is allowed to cut a caper on the straight rope, at least an inch higher than any other lord in the whole empire. I have seen him do the summerset several times together, upon a trencher fixed on a rope, which is no thicker than a common packthread in England. My friend Reldresal, principal secretary for private affairs, is, in my opinion, if I am not partial, the second after the treasurer; the rest of the great officers are much upon a par.

此嶋は Lilliput. であるが、ガリヴは此嶋を出て、再び海に浮び、暴風雨に遭遇つて、見知らぬ嶋に着く。此嶋のものは總てが大きい。野の草の丈が二十尺、畑の大麥は少くとも四十尺の高さに達してる。畑の一隅の生垣の高さは百二十尺ある。偖て人間は六十尺が平均で、寺の尖塔ほどの高さで雲

を突くやうである。その話し聲は雷鳴の響のやうに強い。畑の中に逃げ込んだガリヴは、九歳ばかりの女の兒の生きた人形になる。女の兒の身丈は四十尺で、それが小さい方なのだからやりきれない。やがてガリヴは國王の前に伴れ出され、體が小さいばかりに種々な危い目に逢ふ。爲に攫はれ、土龍の丘に落され、屋根の棟へ猿の爲に持つて行かれたりする。國王はガリヴから英國の國情を聽いて、その小さな野心や小競り合を嘲笑する。此巨人の住む國 Brobdingnag から、或日箱ぐるみ鳥に攫はれ、海中に落され、さうして通行の船に救はれて一先づ歸國する。又航海を企てゝ Laputa といふ嶋に行く。此嶋には哲學者や數學者達が住んでゐるが、彼等は眞理を愛するのではなく、その學說を實際に役立てようとするのでもなく、單に空想に生きてゐるばかりである。嶋の中には學士會院と言つたものがあつて、あらゆる學者を網羅し、諸種の研究に從事してゐる。胡瓜から光線を造り出さうとして、八年間も矻々とやつてるものもある。土臺から始めずに、屋根から取りかゝる新建築法を案出した建築家が居る。大理石を柔かにして、枕や針差しを造らうとしてゐるものもある。蹄鐵を嵌める勞働を省かうとして、馬の蹄そのものを化石させようとしたり、羊毛のない羊を得る爲に、小羊の毛の伸びないやうにする方法を考へてゐるものもある、と言つた調子で、總て學問や科學の濫用を諷罵したものである。Laputa から數多の國々を經て最後に Houyhnhnms (whinnims と讀む) の國へ赴く。此國では馬が、理性が最も發達して、最も開けた動物である。さうして Yahoo と

いふ名で代表させた人間は道理のわからぬ、不潔な有害な野獣である。體力も智力も、人間は遙に馬に劣るものとしてゐる。個人としてスヰフトの好きな人間が皆無ないではなかつたが、ポウプに宛てた手紙に "I heartily hate and detest that animal called man, although I heartily love John, Peter, Thomas and so forth" と書いたのでも、全體として人間が嫌で堪らなかつたことがわかる。政治上の爭も、戰爭も、くだらなくて仕方がない。況して個人の小さな感情の衝突なぞ、ばかばかしくて見て居られなかつた。人生そのものが全く價値のないものに考へられた。そんなに世の中が厭であり、人間が嫌でありながら、自殺をしなかつたのは、此諷刺の筆があつて、人間に對する胸中の鬱憤を絶えず筆の上に洩らし得たからであらう。

スヰフトの散文の文體を一言したい。彼ザ・イグザミナ "*The Examiner*" 紙の主宰となつて、政治論文を書き始めてから、數限りもない小冊子を發行して、獨特の諷喩を書いたことは以上述べた通りである。二三の例文にも見るやうに、驚くべき筆力は疾風のごとくに人心を煽り立て、論敵をして面を擧ぐることの出來ない鋭さを示して居るが、それが一つも學問を衒つた氣障な處がない。誰にでも理解が出來る通俗の文字を使用してゐる。隙のない論理と、常識とで武裝した文章である。ダフオウの文章も單純で明晰であるが、スヰフトの文章はダフオウ以上に明快で簡單である。だから學問のない人には、洋燈のやうに光り、學問のある人には、星のやうに輝いてゐると言ふのも無理

でない。今日ではスヰフトの文章を讀むことが教育に欠くべからざるものになつてゐる。スヰフトは政治的諷刺文の元祖と言ふべき人であるが、單にそればかりではない。單純で平易で、さうして端的で、而も深刻な最も獨創的大散文家の一人である。その文豪の晩年はむしろ悲慘であつた。愛人のステラが死んでからは、闇の夜の唯一つの光を見失つたやうに、ともすれば滅入り勝に、無愛嬌な性分であつたけれども、貪慾と思はるゝほど金錢に汚くなつた。絶えず眩暈を覺えながら、耳も遠くなつて、もう讀むことも書くことも出來なくなつた。やがて氣が違ふのであらうと彼自身思つてゐた。それで死後その全財產を、痴者や狂人を收容する病院の建設費にあてたいと、遺言を認めてから四年ばかりして、自分の寺に既に葬つたステラの墓の側に、永久に覺めない眠に就いたのは千七百四十五年の十月である。

第三節　隨筆の大家アディスンとスティール

新聞雜誌が盛に發行されて、堂々たる一流の文豪がその紙面を賑はしたことは、ダフオウやスヰフトの條に之を見た。社會の木鐸となり、智識の普及、趣味の向上、道德の啓發、風紀の改善といつた大きな役目を新聞雜誌が有つてゐることは言ふまでもない。然しダフオウやスヰフトは未だ完全にその任務を果したものとは言へない。王政復古期の人心の萎靡と風俗の壞廢を旋廻して、英國民に眞の紳士たり、淑女たるべき道を指示したのはアディスンとスティールである。ダフオウやスヰ

フトの書いたものが紳士的でないと言ふのではない。その小說でも論文でも隨筆でも社會道德の改良に稗益するところがないことはないけれども、或は粗野に流れ、或は品位に乏しい憾がある。アディスンとスティールは共に立派な敎養があつた。親切で、慇懃で、さうして一擧手一投足紳士たるべき資格を備へてゐた。社會の先覺者として、警醒家としてダフオウやスヰフトなどとは別個の使命を有つてゐたのである。アディスンとスティールとは同じ學校を出て、極めて親密な友達であつたばかりでなく、その事業の上からも離れがたい密接の關係を有つてゐるので、その名までも彼ボウモントとフレツチヤのように、並び稱せられてゐる。

ヂョゼフ・アディスン（Joseph Addison）の父はランセラット・アディスンと言つて、リツチフイールド（Lichfield）の副監督（ディーン）で學者で聞えてゐた。アディスンは千六百七十二年にエイムズベリ（Amesbury）のミルストン（Milston）に生れ、チヤータハウスから進んでオクスフアドのクイーンス大學やモードリン（Magdalen）大學に入學した。スヰフトの學生時代は隨分放縱不羈で、屢々戒飭を受け、譴責を蒙つたが、アディスンの學生時代は頗る几帳面で、勤直な勉强家であつた。性質も柔順で內氣で、拉典文學殊に韻文を研究してゐた。二十一歳の時「ドライデン氏に」"*To Mr. Dryden*" と言ふ詩を書いて、ドライデンを讃美し、まづドライデンの眷顧を受けた、ソマーズ卿の斡旋で三百磅の年金を與へられて、大陸旅行に出立したのが二十七歳の時だつた。フランスでは當時文壇の

耆宿で、殊に批評文學の權威であつたボアローなどにも面會した。此旅行から「イタリアの其方此方」"*Remarks on Several Parts of Italy*" が生れた。ヰリアム三世の崩御と共に年金の給與が止まつて英國に歸つた。そのころ英國民はブレニム（Blenheim）の戰勝に熱狂して居た時であつたので內閣の委囑を受けて、千七百四年に一篇の詩を書いたのが「戰役」"*The Campaign*" であつた。マールバラ（Marlborough）を威力絕大な天使にあて、その成功を前年の十一月の夜半に起つた大暴風雨に比したくだりは巧妙を極めてゐる。

But O, my Muse, what numbers wilt thou find
To sing the furious troops in battle joined!
Methinks I hear the drum's tumultuous sound,
The victors' shout and dying groans confound,
The dreadful burst of cannon rend the skies,
And all the thunder of the battle rise.
'Twas then great Marlborough's mighty soul was proved,
That in the shock of charging hosts unmoved,
Amidst confusion, horror and despair,

Examined all the dreadful scenes of war;
In peaceful thought the field of death surveyed.
To fainting squadrons sent the timely aid,
Inspired repulsed battalions to engage,
And taught the doubtful battle where to rage.
So when an angel of divine command
With rising tempests shakes a guilty land
Such as of late o'er pale Britannia past,
Calm and serene he drives the furious blast;
And pleased the Almighty's orders to perform
Rides in the whirlwind and directs the storm.

此詩が英國民に大なる感動を與へたと共に、官邊の氣受頗る好く、アディスンの立身の端緒になり、累進して遂に國務卿の椅子を占むることになつたが、それは文學には關係はない。千七百九年にワートン卿がアイアランドの總督に任命されたとき、アディスンはその書記官になつてアイアランドに赴任し、その滯在中友人のステイールが興した「タトラ」"*The Tatler*"と言ふ新聞に寄稿し

始めてから、アディスンの長處が發揮されることになつた。尤それまでに歌劇「ロザマンド」"*Rosamond*"や喜劇「鼓手」"*The Drummer*"など書いてゐたさうである。さうして「鼓手」はアディスンの死後ステイールの手に依つて出版され、又ステイールの手が入つてゐると言はれてゐる。アディスンとステイールはチャータハウス學校時代からの親友で、新聞の經營には互に助け合つてゐるし、その新聞のことを說くには、二人の名が絕えず出るので、此處にステイールの經歷を書いておく方が便利である。

リチャド・ステイール（Richard Steele）は千六百七十二年ダブリンに生れ、アディスンと同年齡だつた。父は辯護士だつたが、ステイールの五歲の時に死んだ。チャータハウスでアディスンと親しくなり、オクスフアドのクライスト・チャーチ大學に入り、後マートンに移つた。大學を去つて一兵卒として近衞聯隊に入隊したが、嘗つて恩顧を擔つてゐた、オーモンド公爵の配下について、大尉になり、二十年餘りの軍人生活を送つた。アディスンが內氣で遠慮勝であつたのに反し、ステイールは卒直で、明けつ放しであつた。軍人には有り勝であるが、隨分金使ひが荒ちかつた。斯んなに性行に隔りがありながら、意氣投合して、水も漏さぬ仲好しであつた。軍人としての公職の餘暇を偸み、詩を作り戲曲を綴り、又隨筆を書くことを怠らなかつた。處女作はアディスンのと同じ韻文の「行列」"*The Procession*"で、女王メイリの葬式を歌つたものであつた。千七百一年に「キリスト敎の勇者」

"*The Christian Hero*" と言ふ宗教道德に關する論文を書いた。平生の彼の素行と矛盾してゐるやうに見えるけれども、つまりスティールの荒んだ軍人生活の半面に、絶えず悔悟と慚愧の良心が燃えてゐたことを證明したものである。續いて四年ばかりの間に三つの喜劇を書き、千七百二十二年に四つ目の喜劇を書いた。「葬式」"*The Funeral*"、「嘘をつく情人」"*The Lying Lovers*"、「優しい良人」"*The Tender Husband*"、「正氣な情人達」"*The Conscius Lovers*" がそれである。「葬式」の筋丈書いて見る。ブラムトン伯爵（Earl of Brumpton）が頓死をし、三時間ばかりの後甦つたのが喜劇の始まりである。ブラムトン伯夫人は、後妻であるが、心の良くない女で、既にケヤビネットといふ男と結婚して居て、ブラムトンの死亡をよいことに色々惡巧みを廻らす。ブラムトン伯が後見をしてゐる二人の淑女シヤロットとハリオットに、ブラムトンの先妻の子ハーデイとハーデイの親友のカムリが想を懸ける。ブラムトン夫人がそれを知つて、邪魔立をする。執事のトラスティは若君ハーデイの幼少の頃から仕へて、忠義な老爺である。ブラムトン夫人の策略のうらをかいて、夫人と、その情夫ケアビネットと、腹の黑い女中のタトルエイドの三人を屏息させる。善人が榮え、惡人が亡びる趣意であるが、可笑味やくすぐりがたつぷりある。例へば女中が伯の死んだとき、泣きたくもないのに口に留針を哺んで空涙を流したり、夫人が何の思惑があつてか、莫迦げて裾の長い奇拔な喪服を拵へたり、伯は隣室に隱れてゐて、代りに柩の中に這入つて居たシヤロットが現はれて、惡人達

を驚かしたり、ブラムトンの室を覗いたケアビネットが、伯をてつきり幽靈と思ひ込んで駭いたりする。それに數多小唄を挿み、之に合せる踊などあつて、華やかな劇である。劇の改良を看板にした丈あつて、道德的である。王政復古期の戲曲作者は一般に婦人を輕んじたのに對し、スティールはシヤロットとハリオットに眞實の婦人を描いて、敬意を拂はせたものである。上品な喜劇であつて女中や夫人の友達などの間の對話はシエリダンの喜劇スクール・フォー・スカンダル "*The School for Scandal*" に似た節があるが、事件が錯綜し過ぎて、感興を殺がれてゐると言ふのは無理な批評ではない。近代のアイアランドの戲曲家シング（Synge）の「谷の影」"*The Shadow of the Glen*" などから見れば、餘り固苦るしい感じがするけれども、狙ひ處が違ふので、强いて咎める譯にはゆかない。餘り巫山戲た、不作法な、宗教を蔑した戲曲は檢閲を濟ませてやらないと、チエインバレイン卿が宣言した後でもあり、「嘘を吐く情人」を出したとき、オーモンド公爵に献題した文句にも、飾り氣のない心や、優しい氣立や、友情や、名譽から生れてこない凡ての娯樂を、對話から除き去つて終ふのが此劇の立案であるといふ意味が記してあるし、又「正氣な情人」を、キリスト教を信ずる人が見てよいものは此劇ばかりだと評した人があるやうに、淫猥らでなく、惡巫山戲のないものを書かうとしたのであることは明らかである。畢竟コリア（J. Collier）の演劇改良論に動かされたものであつたらう。戲曲を書いたと同じ精神で彼は新聞を發刊した。俗衆の趣味の低下は、男女の差別

なく、飯酒、博奕、好色の外にさらに娯樂はないものゝやうに、誰かれとなくそれに走らせた。寧ろ無學を誇りとして、智識を卑んだ傾向があつた。それを救ふには、讀書趣味を喚起するのが近道であると考へたスティールは、千七百九年に「タトラ」"*The Tattler*" と名付くる新聞を發行した。四月十二日の初號から、一週三度づゝ、一部一片の定價で發行して、千七百十一年一月二日まで繼續けた。同じ新聞でもダフォウの「リヴイユー」"*The Review*" の如きは、主に政治問題を扱つたものであつたのに反し、「タトラ」は社會問題を主眼とした。誤れる藝術を發き出し、狡猾、虚榮、虚飾の變裝を剝ぎ取り、衣服、談論、行儀、作法の單純を推し奬めるのがその目的であつた。ドウフインの皇子ルイが薨去され、英皇室が喪を發して、貴婦人達が皆黑の喪服を着けたのを機として、婦人の服裝を論じた。けばけばしい色の衣服を着るよりか、さうした單純な服裝がどんなに婦人の自然美を發揮するか知れないと言ふのである。

When artists would expose their diamonds to an advantage, they usually set them to show in little cases of black velvet. By this means the jewels appear in their true and genuine lustre, while there is no colour that can infect their brightness, or give a false cast to the water. When I was at the opera the other night, the assembly of ladies in mourning made me consider them in the same kind of view. A dress wherein there is so little variety shows the

face in all its natural charms, and makes one differ from another only as it is more or less beautiful. Painters are ever careful of offending against a rule which is so essential in all just representations. The chief figure must have the strongest point of light, and not be injured by any gay colourings that may draw away the attention to any less considerable part of the picture. The present fashion obliges everybody to be dressed with propriety, and makes the ladies' faces the principal objects of sight. Every beautiful person shines out in all the excellence with which nature has adorned her; gaudy ribbons and glaring colours being now out of use, the sex has no opportunity given them to disfigure themselves, which they seldom fail to do whenever it lies in their power. etc.

折に觸れ時に應じて斯ういふ論文が毎號タトラ紙上に掲げられた。流行の珈琲店の食卓の上には何時も此等の常識的な忠告、齎に落ちる樣な教へ草が、讀む人を待ち顔に横つて居たのだつた。タトラは一週三回の發行に過ぎなかつたが、目的も内容もタトラと同じ日刊新聞が、其年の三月一日に發刊された。それは「スペクテイタ」"*The Spectator*" であつた。スペクテイタは翌年の十一月五百五十五號で經營の都合上、一先づ廢刊になつたが、更に三月措いて「ガーディアン」"*The Guardian*" を發行した。之も都合で七ヶ月餘りで中止し、「イングリシマン」"*The Englishman*" 「ラヴ」

"*The Lover*"「リーダ」"*The Reader*" などを續いて出したが、此等の新聞の中最も名高いのがスペクテイタであつた。そしてタトラにもガーディアンにもスティールを助けて、アディスンは寄稿してゐたけれども、スペクテイタの隨筆の殆ど半分は、アディスンの筆になつたものであつた。スペクテイタに載つたアディスンの「サー・ロウジヤ・デ・カヴリ」"*Sir Roger de Coverley*" はそれぞれ特癖を備へた人物の縮圖であつて、デイキンズ（Dickens）の「ピクヰック・ペイパ」"*Pickwick Papers*" と共に上品な滑稽趣味の鼓吹に多大の貢献をなしたものである。田舍育ちの頭は古く、萬事獨りよがりの餘程變つた人物ではあるが、それでゐて惡氣は微塵程もなく、慈悲深い温い心で周圍の人を包んで、慕はれもし敬はれもしてゐる、老紳士のサー・ロウジヤを中心に、當世向き灰殼男の代表者ハニ・コームや、商人氣質を丸出しのアンドルー・フリーボートや、軍人の典型ケアブテイン・セントリや、お心よしで世話好きのヰル・ヰンブルなどの性格が、座いところへ手の屆くまで細かな巧妙な筆に寫されてゐる。サー・ロウジヤが巡回裁判所へ出掛けて、例の常軌を逸した一幕を斯う演じてゐる。

My worthy friend Sir Roger is one of those who is not only at peace within himself, but beloved and esteemed by all about him. He receives a suitable tribute for his universal benevolence to mankind, in the returns of affection and good will which are paid him by every

one that lives within his neighbourhood. I lately met with two or three odd instances of that general respect which is shown to the good old knight. He would needs carry Will Wimble and myself with him to the country assizes. As we were upon the road, Will Wimble joined a couple of plain men, who rid before us, and conversed with them for some time; during which my friend Sir Roger acquainted me with their characters, etc.

The Court was sat before Sir Roger came; but notwithstanding all the justices had taken their places upon the bench, they made room for the old knight at the head of them; who, for his reputation in the country, took occasion to whisper in the judge's ear, that he was glad his lordship had met with so much good weather in his circuit. I was listening to the proceedings of the Court with much attention, and infinitely pleased with that great appearance and solemnity which so properly accompanies such a public administration of our laws; when, after about an hour's sitting, I observed, to my great surprise, in the midst of a trial, that my friend Sir Roger was getting up to speak. I was in some pain for him, till I found he had acquitted himself of two or three sentences, with a look of much business and great intrepidity.

わしは此土地での利け者でござると言はぬばかりに、勿體らしく裁判官へ耳こすりをする。何ぞ重大なことでもあるのかと思へば、お天氣都合がよろしく洵に結構でござりますといふ。又裁判の進行中、ついと席を立つ。はらはらして見てゐると、夫でも物々しく度胸を据へて、ふたつ三つ立派に文句を捏ねあげて席に卽くなぞ、それからそれへサー・ロウジヤの奇言奇行を書いてゐる。サーロウジヤはスペクテイタの呼物の一つであつたが、「マーザの夢」"*The Vision of Mirza*" の如き、永劫の潮の上に、暗から暗へ掛渡した人生と言ふ橋の上を、疲れ切つた人間の群が押し合ひへし合ひして、落し戸を踏んで滑り落ちて行く、不幸に充ちた蹉跌の絶えない人生にも花笑ひ鳥歌ふ美しい天國の路は開けてゐるといふ、天路歴程の縮圖を見るやうな寓意的なものもあり「色男の頭腦の解剖」"*Dissection of a Beau's Head*"「男たらしの心臓の解剖」"*Dissection of a Coquette's Heart*" なり、解剖に借りて、輕薄な男女の心理を抉摘して餘蘊なく、更に一般男女の氣質の相違を "*Difference of Tempers in the Sexes*" に說きあかしてゐるなど、一々例を示したら限りもない。スペクテイタに載せた丈でも二百七十餘篇の隨筆は皆アディスンの筆に成つたものである。敎會と言はず劇場と言はず、凡そ人の集まる場所に在つて、どう振舞へばよいものか、どうすれば紳士淑女に耻ぢぬであらうか、家の内外を問はず、各人各自に省みて、修養の忽せにすべからざることを敎へて、十八世紀の箍の弛んだ人の心の桶を引き締めたものであつた。

スペクテイタの廢刊になつた翌年、千七百十三年にアディスンは「ケイトウ」"*Cato*" といふ悲劇を舞臺に上ぼせて、大向ふを呻らせたが永續きがしなかつた。それらの隨筆に見られるやうに、人間の描寫に於て特技が示されてる、詼諧もある、皮肉もあるけれども、ケイトウの如きローマの愛國者の動作を描くには熱に乏しかつた。強い同情が足らなかつた。自殺に臨んでの獨語の如き、修辭の上から完全な流暢なものであるけれども、畢竟讀むべきものであつて、演ぜらるべきものでない戯曲作家としては、ステイールの方が一枚上であつたらう。孰れにしろ、アディスンも詩人ではなかつた。戯曲作家でもなかつた。兩人共に十八世紀の上半期を飾る散文の大家であつたが、ダフオウやスヰフトの如き通俗の言葉を以て文章を綴つたのではなく、ラテイン系の語を交へて雅致に富んだ鍛冶を經た文章であることを知らねばならない。新聞事業の上に一生面を拓き、相提携して立つて來たアディスンは、晩年には政治上の意見を異にして、ステイールと冊子の上で論戰をした。ポウプとスヰフトも筆戰を交へたけれども、遠慮勝な、落着き拂つたアディスンは平生の主義として言葉に角を立てず、諄々として說くの風があつた。千七百十六年ウオリック伯爵未亡人と結婚したが、傲慢で短氣な、社交界の花形との同棲は、幸福ではなかつたらしい。その翌年サンダランド内閣に入閣したが、毫も昂ぶつた樣子も見せず、謙讓自ら持して、在職十一ヶ月で身を退き、千七百十九年六月喘息を病んで死去しウエストミンスタで盛大な葬儀が營まれた。

ステイールはアディスンより十年生き延びた。タトラやスペクテイタ時代の華やかな文學的經歷の最後を飾るやうに、代議士にもなつた。ヅルリ・レーンの監督にも任せられた。動爵士にもなつた「正氣な情人」を出して多少の成功を見たばかりで、特に記すべきこともなく、飲酒の祟りであつたか半身不隨となり、カマースン（Carmarthen）といふ田舍に養生に出掛けたが、夏の夕など田舍の人達の踊りを見に、利かぬ體を車に運ばせ、踊の上手な乙女に衣服を新調してやつたなど、どこまでも温味のあつた人である。

第四節　バークリ、マンダヴィル其他の散文家

ダフオウ以下四人の散文の大家を見た後、十八世紀上半期の散文家を一括して覗いて見ねばならぬ第一着に哲學者のバークリから始める。

ジオージ・バークリ（George Berkeley）はクロインの監督であつた。兩親は英國人の血を受けたアイアランド人であつた。千六百八十五年にキルケニに生れ、スキフトやコングリーヴを出したキルケニ・スクールを經て、ダブリンのトリニテイ大學に入つて哲學を修めた。ロックの學說から出發して、更にプラトウの研究に沒頭し、斯くして我等の視るもの、觸るゝもの、皆無形にして、永劫なるものゝ象徵に過ぎない、本來空であるけれども、唯在るが如く見ゆるものであるとする、バークリ一流の現象論が生れた。二十四歲で學位を取り、以後四年の間に「視覺の新理論」"*A New Theory of Vision*"「人智の原理」"*The Principles of Human Knowledge*"「ハイラスとフイロナス」"*Hylas and Philonous*"の三卷を著はした。二十八歲でランダンに出て、アディスンやポウプやスキフトの知遇を受けた。風彩が立派であつた上に、實直で如才がなく、少しも氣取つた風が見えなかたので、その學殖と人格は意地の惡いポウプでも、又拗ね者のスキフトすらも、敬愛させずにはおかなかつたのである。次いで大陸に旅行して八年の星霜を送り、三十九歲で妻帶して米國に渡つたが、その渡米は豫言的一篇の詩「アメリカに藝術と學問を植うる見込」"*Verses on the Prospect of Planting Arts and Learning in America*"を產んだ。歸英して「ハイラスとフイロナス」に同じプラトウの對話篇に倣つた「アルシフロン」"*Alciphron, or the Minute Philosopher*"を著はした。シャートフツバリの如き懷疑論者や、マンダヴイルの如き無神論者を說破せんとしたもので、バークリの哲學を理解するに最も入り易き書物とされてゐる。千七百三十四年にクロインの監督となり、人道の啓發に努力しつゝ、彼の愛用してゐたタール水の性質から始めて、哲學的考察に導いた「シリス」"*Siris*"を公にした。「アルシフロン」はロード嶋の海岸の洞穴で書いたと言はれ、對話の中にその海岸の風景の敍述がある。

We amused ourselves next day every one to his fancy till nine of the clock, when word was brought that tea-table was set in the library, which is a gallery on the ground floor with

an arched door at one end opening into a walk of limes; where, as soon as we had drunk tea, we were tempted by fine weather to take a walk which led us to a small mount of easy ascent, on the top whereof we found a seat under a spreading tree. Here we had a prospect on one hand of a narrow bay or creek of the sea, enclosed on either side by a coast beautified with rocks and woods, and green banks and farmhouses. At the end of the bay was a small town placed upon the slope of a hill, which, from the advantage of its situation, made a considerable figure. Several fishing boats and lighters, gliding up and down on a surface as smooth and bright as glass, enlivened the prospect. On the other side, we looked down on green pastures, flocks and herds basking beneath in sunshine, while we, in our superior situation, enjoyed the freshness of air and shade.

文はその人を現はすものである。引用せるものは敍景の數行に過ぎないけれども「ハイラスとフイロナス」の對話や又「アルシフロン」のユーフラナやクリトーやライシクリース間の對話に於て仰々しからずして嚴かに、華やかにして而も强き語法を見る。人間として殆んど批點の打ち處のなかつた稀有の人格者であり、ロックやヒュームと並び稱へらるゝ屈指の哲學者であることを思ふとき、その散文に對して深き注意と尊敬を拂はねばならない。千七百五十二年バークリは監督の職を辭

してオクスフアドに移らうとしたが、時の王ジョージ二世は何處に住むもよいけれども、榮ある一生を監督として送れよとの御諚を受けて思ひ止まつた。その翌年、長椅子に身を横へたまゝ眠るがごとくに大往生を遂げ、クライスト・チャーチに手厚く葬られた。

哲學上の意見を異にして、バークリから非難を受けたバーナド・マンダヴイル（Bernard Mandeville）（1670—1733）はオランダ生れの醫者で、早くからランダンに住居を定めてゐた。餘程の皮肉屋であつたと見え、千七百十四年に「蜜蜂の道話」"*The Fable of the Bees; or, Private Vices, Public Benefits*" と言ふ八音節の寓意詩を公にした。

空腹も苦しいには相違ないけれども、空腹なればこそ飯も甘いのだ。薄汚い、曲りぐねつた葡萄の幹があればこそ、葡萄酒が出來もする。惡德も用ゐ次第で有益なものだ。唯德ばかりで國家は榮えるものではないと言つた調子で、常識と諧謔で持ち切つてゐる。スヰフトを小さくした一種の諷刺家である。「蜜蜂の道話」に添へた註釋に、彼が又一かどの散文家であつたことが覗はれる。「蜜蜂の道話」の出版された三年前「人と作法と意見と時代の特徴」"*Characteristics of Men, Manners, Opinions and Times*" といふ書物が出版された。作家はシャーフツバリの三代目の伯爵で、アンソニ・アシユリ・クーバ（Anthony Ashley Cooper）（1671—1712）であつた。「クーバはロックの膝下に教を受け、更に深くプラトウの哲學を咀嚼した道學者の一人である。多少懷疑に傾いたけれども、宇宙の法則

自然の調和の嚴然として存在することを認めて、常に樂天的見地の上に說を立てた。上記の「特徵」の中には「熱誠に關する書翰」"*A Letter concerning Enthusiasm*"「作家に與ふるの言」"*Advice to an Author*"「德の研究」"*An Inquiry concerning Virtue*"「道德家」"*The Moralists*"などの論說が集められてゐウブの高名な「人間論」"*Essay on Man*"を基礎づけたものであり、文章も又古典の香の高い明澄壯麗なものである。

All things in this world are united. For as the branch is united with the tree, so is the tree as immediately with the earth, air and water which feed it. As much as the fertile mould is fitted to the tree, as much as the strong and upright trunk of the oak and elm is fitted to the twining branches of the vine or ivy; so much are the very leaves, the seeds and fruits of these trees fitted to the various animals: these again to one another and to the elements where they live, and to which they are, as appendices, in a manner filled and joined, as either by wings for the air, fins for the water, feet for the earth, and by other correspondent inward parts of a more curious frame and texture. etc. See there the mutual dependency of things! The relation of one to another; of the sun to this inhabited earth, and of the earth and other planets to sun! the order, union and coherence of the whole! and know,

my ingenious friend, that by this survey you will be obliged to own the universal system and coherent scheme of things to be established on abundant proof, capable of convincing any fair and just contemplator of the works of Nature.

斯く絕對の美を自然に認めて、キーツと同じく「美は眞實である、眞實は美である、是こそ我等地上に知る凡てであつて、是より外に知るの要はない」と叫ばんとしたのである。要するに自然神敎を奉じた一人である。クーバの外に貴族で猶一人のデイストがあつた。それはヘンリ・セント・ヂョン・ボリングブロウク子爵（Henry Saint-John, Vicount Bolingbroke）（1678—1751）である。クーバの學問とても深いものではなかつた。吹けば飛びさうな、上滑りのしたものだとの惡口もあるけれど、ボリングブロウクの哲學も宗敎も、その根底は極めて淺いものであると評した人もある。然し彼は一代の能辯家であつた。政治家として稀世の才幹を有つてゐた。我己主義であるとか、陰險であるとか、卑怯者、惡漢呼ばはりをされながら、苦しい胸の思の遣り塲を文學に求めたのであつた。「歷史の研究と利用」"*On the Study and Use of History*"「退隱の利用」"*On the Use of Retirement*"「愛國の精神を論ず」"*On the Spirits of Patriotism*"など數多の論文がある中に、理想的立憲君主の研究をした"*An Idea of a Patriot King*"が名高い。文章は暢達明晰では有るけれども、浮誇杜撰の嫌があると言はれてゐる。

キングストン公爵の長女のメアリ・モンタギュー（Lady Mary Montagu）（1689—1762）は十八世の書翰文の作家として名高い。ビショプ・バーニットに就いて學問した丈であるが、父の所藏の書籍を何くれとなく讀んで、可成學殖のある婦人であつた。良人のモンタギューが土耳古の公使として赴任したとき、隨伴してコンスタンテイノウプルに在住して、種痘法を習得し、先づその子に之を施して、英國にその術を輸入したことは誰知らぬものもないが、又ポウプと言ひ爭ひをして、ポウプの感情を害ひ、（Sapho）の名で散々こなされてゐるのも名高い話である。土耳古に滯在中故國の友人や知人に音信をした手紙の一部を、モンタギューの死んだ翌年出版されたものが「土耳古から」"*Letters from Turkey*" である。氣のきいた華やかな達意の文である。種痘のくだりを引用する。

The small-pox, so fatal and so general amongst us, is here entirely harmless by the invention of *ingrafting*, which is the term they give it. There is a set of old women who make it their business to perform the operation every autumn, in the month of September, when the great heat is abated. People send to one another to know if any of their family has a mind to have the small-pox; they make parties for this purpose, and when they are met (commonly fifteen or sixteen together), the old woman comes with a nut-shell full of the matter of the best sort of small-pox, and asks what veins you please to have opened. She immediately rips open that you offer to her with a large needle (which gives you no more pain than a common scratch), and puts into the vein as much venom as can lie upon the head of her needle, and after binds up the little wound with a hollow bit of shell; and in this manner opens four or five veins. etc.

良人の地位と女性と言ふ便宜があつた爲め、滅多に出入の出來ないトルコ後宮の婦人の日常生活や閨房の樣子まで目擊し、また社交場裡に立つて、トルコ人の服裝や人情、風俗を具に觀察してその書翰の中に書き記してゐる。文學としてのみならず、歷史の資料としてイヴリンやピープスの日記と同價値を有するものであらう。

スチフトがその經營してゐた新聞のイグザミナの編輯を讓つたほどスチフトからその鋭い諷刺の筆を認められた婦人がある。それはダ・ラ・リヴイエール・マンリ（Mary de la Rivière Manley）（1672—1724）であつた。一二の戲曲を書いて一時名を知られたが、聽て忘られ、困まり拔いた腹癒せに口汚い毒舌を誰彼れとなく朝野の名士達に浴せかけた「新アタランテイス」"*The New Atalantis*" が聞えてゐる。（その他不義密通を書いた小說が數多あるけれども、アフラ・ベーンの小說よりも劣つたものだと言はれてゐる。）

自ら制慾主義を實行し、その宣傳に努めたウイリアム・ロー（William Law）（1686—1761）に「大切なる義務」"*A Serious Call to a Devout and Holy Life*" の快著があつて、十七世紀のシェ

リミ・テイラの「聖死」"*Holy Living*" 以來の最も敬虔なる書物に數へられてゐる。彼獨乙のジェイコッブ・ベーメン（Jacob Behmen）の教理に共鳴した神秘家である。

當代の高僧として、神學者として知られた、サミュエル・クラーク（Samuel Clarke）（1675—1729）に「自然及び天啓宗教の證左」"*The Evidences of Natural and Reveald Religion*" 以下數多の著書がある。ニュートンの學說を把持して、獨乙の鴻儒ライブニッツ（Leibnitz）と宗教及び哲學の意見を交換した書簡も、ライブニッツの死後クラークの手に依つて出版された。

神學や哲學の方面で名の記すべき人々に、ベンジャミン・ホウドリ（Benjamin Hoadly）チャールズ・レスリ（Charles Leslie）ジョン・トランド（John Toland）トマス・シャーロック（Thomas Sherlock）などがあり、彼「スペクテイタ」や「タトラ」紙上に寄稿した隨筆家にユースタス・バジエル（Eustace Budgell）ジョン・ヒューズ（John Hughes）があり、歴史家も數多輩出してゐるけれども悉く省略して、十八世紀上半期の小說家に移らねばならない。

第二章　十八世紀の小說の勃興

第一節　四大小說家の特徴

ダフオウの「ロビンスン漂流譚」もスヰフトの「ガリヴ旅行記」も小說である。さうして共に世界的

である事は言ふまでもない。若しダフオウとスヰフトを加ふれば六大小說家になる譯である。然し「ガリヴ」も「ロビンスン」も空想から案出した冒險談であり、諷刺物語である。人間の日常生活を如實に描寫したものではない。一體眞實の小說といふと、全く想像的分子がないわけにはゆかないけれども社會の一人としての、人間の思想や情緒や行動の迹を辿つた、如實の細かい描寫であらねばならないさう考へると「ロビンスン」や「ガリヴ」は眞のノヴェルの埒外に出る。然しダフオウは「ロビンスン」の外に四つ五つの小說を書いてゐる。それはノヴェルの部類に入るけれども、新聞紙雜誌の發達を述べた時に、單獨にダフオウは可成詳しく書いたから、爰處にはリチヤドスン、フイールデイング、スモリット、スターンの四人を先づ說いてその他の作家に及びたい。序に一言して置きたいのは、小說が十八世紀から始まつてゐるのでないことは、既知の事實だといふことである。イリザバス朝に「ユーフユイーズ」といふリリの作品があつた。シドニの「アーケイディア」やグリーンの「バンドストウ」も孰れも小說であるけれども、極めてロウマンテイックなものである。ミルトン時代になつてバンヤンの「ピルグリムス・プロウグレス」や「ミスタ・バッドマンの生死」などあつたが、皆道德的意味の勝つた寓意物語である。更に王政復古期になつてジョン・クラウン（John Crowne）の「パンデイオンとアムヒイゲニア」"*Pandion and Amphigenia*" や、リチヤド・ヘッド（Rechard Head）の「英國の惡徒」"*The English Rogue*" などがあつても、アーケディア風の浪漫斯や、彼ピカルーン小

説の範疇を脱し切つてゐない。アフラ・ベーンの小説は卑猥の嫌があるけれども、自個の經驗を基礎にした日常生活の直寫に近づいて來た。コングリーヴの「インコグニタ」"*Incognita*" の如き、戀愛小説として十八世紀のフィールディンの前驅を務めてゐる。ダフオウが出るに及んでロビンスン・クルーソウを除く他の小説は、ピカルーン小説に屬するものであるけれども、謂はゞ一種の勞働小説として近代小説を基礎づけてゐる。ダフオウに次いで第一に記さるべき小説家はリチヤドスンである。

第二節　ザミユエル・リチヤドスンと女性心理の描寫

サミユエル・リチヤドスン（Samuel Richardson）は指物師の子で、千六百八十九年にダービシーアに生れた。子供の時分に多少の教育を受けたばかりで、十七歳の時ランダンに出で、植字工として印刷業者に住み込み、奉公大事に務め上げて、やがて自ら印刷業を經營し、衆議院の決議錄の印刷を引受けなどして業務を擴張し、遂に文房具會社の社長となつた。丁度五十歳になつた年出版業者の依頼を受けて「通俗書簡文」"*Familiar Letters*" を公にしたのが文壇の人となつた始めであつた。故郷に居た十三四歳の頃から書簡文を書くことが上手で、近邊の若い女達から内密に頼まれて艶書など盛に認めたことがあつたのが、いつとなく女性の心理に通曉する機會を與へられ、他日の大小説家となる素因を形成つたのであつた。「通俗書簡文」を公にすると共に同じ書簡文體で物語を書いて見ようといふ考が起つた。容色好しのたしなみ深い乙女が、女中に住み込んだ家の若主

人から、つけつまはしつ執拗に挑まれて、よく婦德を全ふし、遂にその若主人と公然結婚した話しを、聞いたことがあつたのを種にして、讀む人に婦德の貴いことを敎へると共に、書簡文にも通ぜしめ、又樂しみにもなるやうにとの趣意で筆を執つたものが「パミラ」"*Pamela, or, Virtue Rewarded*" といふ小説であつた。パミラ・アンドルースは勿論作の中心で、ミスタ・ビー（Mr. B）といふのがその若い主人である。パミラが遂に身を投げて死なうとまで、苦しい愁い立場をその兩親へ宛てゝ手紙で絶えず書いてやる體になつてゐる。さうした若い乙女の行屆いた細かい心理を筆にした人はフランスに、マリヴオー（Marivaux）、プレヴオスト（Prévost）、クレビロン（Crébillon）などあつたけれども、英國にはまだ一人も出ず、類書を一つも持たなかつた讀書社會は此書を手にして割れるやうな騒ぎであつたさうである。此書は三ヶ月ばかりで書いたさうであるが、その翌年にその續篇を書いたが出來がよくなかつた。それぎり筆を斷つて、六年の間を置いた千七百四十七年からその翌年へかけて「クラリツサ・ハーロウ」"*Clarissa Harlowe; or, the History of a Young Lady*" 七卷を著はした。パミラと同じ書簡體で書いてゐる。多藝な才子ではあるけれども、婦人に對する觀念の極めて不純な、箸にも棒にもかゝらない道樂者のロバト・ラヴレイスの爲に誘拐され、弄ばれて、心も體も散々に蹂みにじられ、惱み拔いて死んで終ふクラリツサといふ若い貴婦人の歴史である。例の纖細な筆でクラリツサの心を寫し出してゐる。リチヤドスンは女性の描寫に巧みであるが、殊に

此作が秀れてゐて、傑作中の傑作であり、クラリッサへ同情して、讀んだ人は皆こみあげて涙を禁めることが出來なかつたと言ふことである。オトウエイの悲劇に描かれた女性モニミアやベルヴイデラの最後の一幕は、しんみりと觀衆を泣かせたものだが、クラリッサは丁度オトウエイの描いた女性のやうに讀者を泣かせた。續物で卷を追つて出したため、餘りに悲慘である、もつと手柔かに書いてくれと、雨の降るやうに手紙がリチャドスンの許へ舞ひ込んださうである。唯に英國ばかりでなく、クラリッサの評判はフランスまで高く響いた。デイーダロウ（Diderot）はリチャドスンをホウマやユーリビディーズと同列に視たし、ルーソウやアルフレッド・ダ・ミユセーなど世界的名小說として讃辭を惜しまなかつた。フランス近代の文豪、バルザックの小說の一つ「谷間の姫百合」"*The Lily of the Valley*" が、脚色の上に、又性格の描寫の上にクラリッサに負ふところが多いと言はれてゐる。リチャドスンの第三の作物は「サー・チャールズ・グランデイスン」"*The History of Sir Charles Grandison*" である。ミスタ・ビーも、ラヴレイスも、男子として全く取柄がないでもないけれども、どつちかと言へば、人の風上におけない厭はしい人である。そのうめ合せに人物好きのする立派な紳士を描いて見ようと思つて書いた、そのサー・チャールズは諸藝に達して、裕福で、身持ちがよく、婦人達の尊敬の的となつてゐる、上流を代表する好個の紳士である。さうして又彼に匹敵する淑德の高い、美しい佳人と偕老の契りを結ぶのであるが、男子の描寫はリチャドスンの畑のものでな

かつた。彼は實業家であつて、貴族社會の生活や事情には全くの門外漢であつた。婦人を描いたと同じ心持で、唯想像に任せて貴公子の身上を寫さうとしたのは間違つてゐた。上品に書かうとして却つて感興を殺ぎ、言葉扱ひまで態とらしく、ぎこちなくなつて終つた。殊に結婚の條りの贅澤な衣服などの地質や模樣など、餘りに管々しくて讀むに堪へないと評した人もある。クラリッサと同樣七卷に分版されたもので、隨分長篇の小說であり、作中に出る人物も數十人の多きに達し、その一人一人を綿密に描き出してゐるけれども、稍々作り過ぎた傾があつて、英國ではバミラやクラリッサほどの評判はなかつた。けれどもフランスでは矢張大もてにもてたものである。以上の三つの逸作を通じて、リチャドスンが女性の描寫に特技を有してゐたことは誰も異論はない。十九世紀のオーステイン（Austen）や、イリオット（Eliot）などの作物に女性の描寫が秀れてゐるのは當然であるけれども、リチャドスンが斯くまで委曲明細に女性を描き得たのは、全く不世出の天才を有つてゐたことを想はせる。而も彼は專門の小說家ではなかつた。忙しい業務の合ひ間、帳簿も繰り、算盤も彈きながら、その間暇を偸んで想を爰處に致し、筆を執つたものである。されば千七百六十一年の夏、ランダンで卒中で永眠したが、五十一歳から丸二十ケ年の間に、僅か三篇の小說しか書かなかつたのは敢て怪しむに足らないし、又それで澤山である。家も富み名も榮えて、昔、カクスタンが、印刷工場へ毎日詰め掛けた貴婦人達から、お世話を振り撒かれたやうに、リチャドスンも其方此方の茶

會に招ばれもし、又自らの茶に招んだ貴婦人達の隨意渴仰の的となつたのは至福な人である。リチャードスンの文體については、取り出で、言ふべきもなし。稍々まはりくどく、複雜であるけれども、きちんと組織立つてゐる。クラリッサが叔母なるから、虫の好かないミスター・ソルムズに縁組を强いられた心の惱みを、ホウエンといふ婦人に書いてやつた手紙の一部分を引く。

Friday, *March 3rd.*

Oh, my dear friend, I have had a sad conflict! Trial upon trial; conference upon conference! But what law, what ceremony, can give a man a right to a heart which abhors him more than it does any living creature?

I hope my mother will be able to prevail for me. —— But I will recount all, though I sit up the whole night to do it; for I have a vast deal to write, and will be as minute as you wish me to be.

I concluded my last in a fright. It was occasioned by a conversation that passed between my mother and my aunt, part of which Hannah overheard. I need not give you the particulars, since what I have to relate to you from different conversations that have passed between my mother and me, in the space of a very few hours, will include them all. I will begin then.

I went down this morning, when breakfast was ready, with a very uneasy heart, from what Hannah had informed me of yesterday afternoon; wishing for an opportunity, however, to appeal to my mother, in hopes to engage her interest in my behalf, and purposing to try to find one when she retired to her own apartment after breakfast: but unluckily there was the odious Solmes sitting asquat between my mother and sister, with so much assurance in his looks! —— but you know, my dear, that those we love not cannot do anything to please us.

Had the wretch kept his seat, it might have been well enough; but the bent and broad-shouldered creature must needs rise, and stalk towards a chair, which was just by that which was set for me.

I removed it to a distance, as if to make way to my own; and down I sat, abruptly I believe. etc. He took the removed chair, and drew it so near mine, squatting in it with his ugly weight, that he pressed upon my hoop. etc.

I saw that my father was excessively displeased. When angry, no man's countenance ever

shows it so much as my father's. Clarissa Harlowe! said he with a big voice —— and there he stopped. —— Sir, said I, trembling and courtesying (for I had not then sat down again); and put my chair nearer the wretch, and sat down —— my face, as I could feel, all in a glow.

第三節　ヘンリ・フィールディングの小說と自然主義

委曲人情を寫して、ホウマを散文で行つた大小說と評せられた、ヘンリ・フィールディング（Henry Fielding）は、千七百七年サマシットシーアのシャーバム・パークに生れた。父は陸軍の將官で而も名門の出であつたが、贅澤が過ぎて身代を滅茶々々にして終つた。フィールディングはイートンからレイダン（Leyden）大學に進んで法律を修めたが、學資が豊かでなかつたため、二十歳の時大學を去つてランダンに出て、文士の仲間入りをし、戯曲や諷刺詩に筆を染め始めた。さうして約十ケ年ばかりの間に　悲劇喜劇茶番狂言など取交せて二十幾つか書いたが、印刷に附せられて殘つてゐるのは、道化劇の「悲劇の悲劇」"*The Tragedy of Tragedies*"ばかりである。二十八歳の時妻帶したが、至つて呑氣な氣性の人で、田舍に歸つて、僅少の地所の收入と、妻の財產を居食ひにして、道樂遊びにうき身を窶してゐた。やがて金も地所もなくなると、ランダンに舞ひ戻り、又本氣に法律の勉强を始め、辯護士の資格を取つたのが千七百四十年であつた。丁度その年に出版になつたリチャドスンの「パミラ」を讀んでその道德的杓子定規と感傷主義がきざでたまらず、その裏を行つた

ものを何か書いて見ようと考へた。「チャンピオン」"*The Champion*"と言ふ、一週三回發行の新聞に、社交的並に文學的題目の隨筆を載せながら、小說に筆をつけ、千七百四十二年に出版した「ヂョーゼフ・アンドルーズ」"*The Adventures of Joseph Andrews*"は「パミラ」の滑稽の作り換へと銘打つたものであつた。飾り氣のない學者肌のバースン・アダムスと、小意氣で極淡泊りした馬丁のヂョーゼフを中心とし、パミラが住み込んだ家の主人から挑まれたと同じ寸法で、ヂョーゼフが住み込んだ家の女主人から挑まれ、體よく拒絕けて雇を解かれ、バースン・アダムスと諸處を經廻り、結局ヂョーゼフが戀をしてゐた美しい乙女と夫婦になるのである。リチャードスンはフィールディングが此作り換に含めた、當て擦りを甚く怨んで忘れなかつたさうである。「ジョーゼフ・アンドルーズ」を公にしたその翌年に、それまでに書いたものを「雜集」"*Miscellanies*"三卷にして出版した。一二卷には詩もあり、論文も戯曲も入つてゐたが、寓意的な「此世から彼世へ」"*A Journey from this World to the Next*"が注意を惹いた。三卷目は「ヂョナサン・ワイルド」"*The History of Mr. Jonathan Wild the Great*"といふ諷刺小說であつた。同じ名の、家後切や、强竊盜を働きながら警察の密偵になつてゐた惡漢が、タイバーンと言ふ處で絞罪になつたのを種に、人間は善でないと、唯偉いといふ丈では足りない。兎角傳記を書く人は華やかな行爲に眩んで、暗い裏面を閑却しがちであると皮肉つたものである。「ヂョーゼフ・アンドルーズ」には驛馬車、ちやぶ屋などの事が明細に書いてあ

るやうに、「ヂョナサン・ワイルド」には盗賊や牢獄の記事が詳しい。人生の暗い方面の研究として娯樂以外に意味を持つた小説と見てゐる人が多い。「雜集」の出版後五ヶ年を、フィールディングはどう過したか明らかでないけれども、千七百四十八年にウエストミンスタの保安官に任命されたまでに、妻に死に別れ、女中を後妻とし、その女中が立派な人格の人であつた爲め、フィールディングの無二の慰安者となり、子供も出來て、幸福な家庭の主となり、辯護士の職務に從ひながら、雜誌などに筆を執つてゐたらしい。然るにその五年後の千七百十九年フィールディングの力作、否寧ろ英國小説を通じての大傑作とも言ふべき「トム・ジョーンス」"*The History of Tom Jones, a Foundling*" 六卷を公にした。勿論その年に一度に書いたのではなく、數年來書き蓄へてゐたものであつたらうが、兎に角一遍に出版された。表題にも明にしてあるやうに、捨子のトム・ジョーンズの生ひ立からトムが、拾はれ、養育を受けた地主の娘のソフィアの初戀に、複雜な事件が絡んで、トムは立身の道を求めにその養家を出る。ソフィアには心に染まない縁談が生じて、これも女中と一緒に家出をする。斯うしてトムもソフィアも別々に浮世の浪風に揉れ、數々の難儀を重ねて、結局トムとソフィアの縁の糸は結ばれることになるのである。此長篇小説の出來事を、一々記すことは勿論出來ないけれども、織り込まれた人物は頗る多數であり、而も多種多樣なその人物が個々にそのクラスを代表して、その特徴と共に巧妙に緻密に描かれてゐる丈でも、作家の非凡の技倆を認めしめ

てゐる。ソフィアの父の鄕士ウエスターンやミスタ・オールワージやバートリッヂの如き代表的紳士の性格や言動から、識者ぶつた二幅對のスクウエーアやスワカムや、淫蕩な上流婦人の典型のレイデイ・ベラストンや、その外家僕や、下婢、浮浪民、鑄掛師などまで、數限りなき人物が、トムとソフィアを中心に絶えず變化する場面に出沒して、村落と言はず都會と言はず、十八世紀の活社會の映畫を見るやうに描かれてゐる。殊に目立つのはソフィアが、容色の勝れて美しいばかりでなく、淑德の高い、どこまでも純一な可憐な乙女であるのに反し、社會に乘り出してからのトムに對しては非難すべき點が屢々ある。淡泊で剛直で常識の發達した快男子ではあるけれども、折節その廉耻心の有無をさへ疑はしめる行動があるし、道德的良心の痲痺を思はしめる場合がないでもない。さればトムの如き不純な缺點の尠なくない男に、清淨で圓滿なソフィアを配さしめたのは、穩當を欠いてゐるといふ議論も聞くのである。然し世の中にはさうした例がいくらもあるばかりでなく、此小説の眞の價値は唯單にその結構にあるのではない。それぞれ異つた個別的性格や差別的世相の描寫に加へて各卷の冒頭に挿んだ緒言が、かいなでの小説に見ることの出來ない特質を備へてゐる。例へばBook VII の「戀愛論」"*Of Love*" Book VII の「世の中と劇場との比較」"*A Comparison between the world and the stage*" の如き堂々たる論文である。種々の見地から「トム・ジョーンズ」は深味もあり、巾もある大力作であることを認めない譯にはゆかない。人情を散文で寫したホウマのイリアッドだと

言ふ評もまんざら無理でないと思ふ。

「トム・ジョーンズ」を出してから二年して「アミーリヤ」"*The History of Amelia*" を公にした。「トム・ジョーンズ」に較べて甚しく遜色があると言ふけれども、恐らくフイールデイングの小説中最も現實的で、最も情味の深いものである。むら氣な而して利己的なケアブテイン・ブースを良人に持ち、絶えず逆境に沈湎して、憂い目、愁い目の見つゞけをよく堪へ、よく忍んで押し通して行く貞婦の典型と言ふべきアミーリアは、作家自身の妻のシャーロット・クラドック(Chalrotte Cradock)をモデルにつかつたものである。「トム・ジョーンズ」のソフイアも矢張り、クラドックがモデルであるが、「トム・ジョーンズ」には何處となく明い、からりとした氣分が浮いて見えるのに反し、「アミーリヤ」には、じめじめとした暗い氣分が漂つてゐるやうに思はれるのは、若い時分の深酒と夜更しが祟つて、とかく病らひがちに衰へ行く心身の疲れと、亡き妻に對する悔悟と追懐に滅入り込む日が多かつた爲であらうし、若しケアブテイン・ブースを自身に當てたとすれば、殊更にその缺點を誇大にして、せめて亡き妻への罪滅しとしたものかも知れない。兎に角に、此小説によつて、善德を進め、時代の病弊を救ふに志のあつたことは、親友のレイフ・アレンに宛てた緒言に明らかである。

Sir, — The following book is sincerely designed to promote the cause of virtue, and to expose some of the most glaring evils, as well public as private, which at present infest the

country; though there is scarce, as I remember, a single stroke of satire aimed at any one person through-out the whole. etc.

フイールデイングの作物を通じて、男性の放逸を或程度までは認容しながら、女性の節操に期待するところが高きに過ぎる觀があり、或塲面の描寫の如き露骨に失して、極めて潔癖な一部の讀者の顰蹙を買ふ嫌がないでもないけれども、それはフイールデイング自身の齒に衣を被せない、實直で恬淡で、かつ快活な性格が然らしめたものであるのと、一つには風紀も道德も、見覺ましきばかり弛廢した時代の作家として、蓋し已むを得なかつたであらう。人間の部分的微細な瑕瑾は看過しても常に道德の大網を握つて、邪曲を庇ひ、正直を虐ぐることをしなかつた、フイールデイングの道德觀念は單純ではあるけれども、健全であると言はれてゐる。

フイールデイングの晩年はむしろ寂寞であつた。「アミーリヤ」の出版以後、嘗つて政府の機關雜誌「ベイトリオウト」"*The Patriot*" を起した經驗から二三の雜誌を出したに過ぎなかつた。既に破壞されてゐた健康を氣遣ひながら、法官の激務に鞅常しつゝあつたが、千七百五十三年には水腫に罹り、轉地療養の目的で、翌年七月溫暖なリスボンに向けて英國を去つた。その地に着いて二ヶ月後の十月八日、病が革まつて遂に世を去り、そこの英國墓地の土となつた。航海の途上に筆を執つた「リスボンへの航海」"*The Voyage to Lisbon*" は死後に出版になつたが、純粹の英國紳士とし

てのフィールディングの風格を想ふに絶好の材料となつてゐる。ダフォウは英國小說の土臺の石を一つ置いた。リチャードスンも又同じ石を一つ置いた。然しフィールディングは殘る二つの石を完全に置いたものであつて、スコットが言つたやうに英國小說の元祖であらう。

リチャドスンの文例を「クラリサ・ハーロウ」の緣談の一章に取つた。フィールディングの文例も「トム・ジョーンズ」から、ソフィアの緣談の一幕を借りてゐよう。ソフィアの物思はしげな表情をもつてつまり戀の病と見た叔母が、ソフィアの父のウェスターンに告げ口をする問答である。

Being at length, however, thoroughly satisfied of the truth of her observation, she took an opportunity one morning when she was alone with her brother, to interrupt one of whistles in the following manner:

'Pray, brother, have you not observed something very extraordinary in my niece lately?'

'No, not I,' answered Western. 'Is anything the matter with the girl?'

'I think there is,' replies she, 'and something of much consequence too.'

'Why, she doth not complain of anything,' cries Western, 'and she hath had the small pox.'

'Brother,' returned she, 'girls are liable to other distempers beside the small pox, and

sometimes possibly to much worse.'

Here Western interrupted her with much earnestness, and begged her, if anything ailed his daughter, to acquaint him immediately, adding, 'she knew he loved her more than his own soul, and that he would send to the world's end for the best physician to her.'

'Nay, nay,' answered she, smiling, 'the distemper is not so terrible; but I believe, brother, you are convinced that I know the world, and I promise you I was never more deceived in my life if my niece be not most desperately in love.'

'How! in love,' cried Western in a passion, 'in love without acquainting me! I'll disinherit her; I'll turn her out of doors, stark naked, without a farthing. Is all my kindness vor 'ur, and vondness o'ur come to this, to fall in love without asking me leave!'

'But you will not,' answered Mrs. Western, 'turn this daughter, whom you love better than your own soul, out of doors, before you know whether you shall approve her choice. Suppose she should have fixed on the very person whom you yourself would wish, I hope you would not be angry then?'

'No, no,' cries Western, 'that would make a difference. If she marries the man I would

ha' her, she may love whom she please, I shan't trouble my head about that.'

'That is spoken,' answered the sister, 'like a sensible man, but I believe the very person she hath chosen would be the very person you would choose for her. I will disclaim all knowledge of the world if it is not so; and I believe, brother, you will allow I have some.'

'Why, look'ee, sister, said Western, 'I do believe you have as much as any woman; and, to be sure, those are women's matters. You know I don't love to hear you talk about politics, they belong to us, and petticoats should not meddle; but, come, who is the man?' etc.

'And now, good politic sir, what think you of Mr. Blifil? Did she not faint away on seeing him lie breathless on the ground? Did she not, after he was recovered, turn pale again the moment we came up to that part of the field where he stood? And pray what else should be the occasion of all her melancholy that night at supper, the next morning, and indeed ever since?'

'Fore George!' cries the Squire, 'now you mind me on't, I remember it all. It is certainly so, and I am glad on't, with all my heart. I knew Sophy was a good girl. and would not fall in love to make me angry.'

フィールディングの小説の寫實主義（Realism）が近代小説に及ぼした影響は甚だ大なるものであつて、サッカリ（Thackeray）の如き最も著しき感化を蒙つた作家の一人であるが、近代の海事小説（Sea-novel）に直接大影響を與へた他の一人の作家を見ねばならない。彼ケアブテイン・マリヤット（Captain Maryatt）を經て、現代のヂョーゼフ・コンラード（Joseph Conrad）に至る海事小説の連鎖のその根本を形成つたのはスモリットである。

第四節　トバイアス・スモリットと海事小説

トバイアス・スモリット（Tobias Smollett）は千七百二十一年にダンバートンシーアのダルクアーン（Dalquhurn）に生れた。夙く父を失つて祖父の家に移り、ダンバートンの語學校からグラスゴウ大學に入つたが、親譲りの財産がなかつたため學問を廢して、ゴラスゴウの醫師に年期奉公に住み込み、十八歳の折「私虐」"*The Regicide*" と言ふ、ジエイムズ一世の暗殺を扱つた悲劇の草稿を懷にして、ランダンに出たが、微々たる一青年の脚本が上場される筈もなく、頼みにした祖父にも死なれて糊口の道に窮し、千七百四十一年海軍軍醫の助手となつて、カータジナ（Cartagena）の遠征に加はり、海上生活の體驗と共に海軍部内の敗德や殘虐を目睹して、小説の資料を蒐めることが出來た。西印度に暫らく足をとゞめ、千七百四十四年にランダンに歸り、醫師を開業し、傍ら文學に志し、貧苦と戰ひながら三年の月日を送り、嘗つてジャメイカで知己を結んだ、ラセルズ（La-

seelles）と言ふ婦人と結婚して生活にゆとりが出來た。その間に書いた「ロダリック・ランダム」"*The Adventures of Roderick Random*" を匿名で出版した。作家自身の生立から、カータジーナへの冒險的遠征までの、想ひ出を綴つた一種の自敍傳である。作中の人物も悉く自身接觸した知己交友から直寫したものである爲に、筆が生々と動いてゐる。「ドン・キホーテイ」"*Don Quixote*" や「ジル・ブラス」"*Gil Blas*" の體に倣つて、滑稽を加味した冒險譚に、更に眞實味を添へたものである。「ロダリック・ランダム」は成功して、三年の後「ペリグリン・ピクル」"*The Adventures of Peregrine Pickle*" を公にした。野蠻で殆んど野獸に等しい主人公のペリグリンの修學時代や、大陸旅行やランダン生活に、汚い下がゝつた漁色の事件を點綴して、大體ロダリック・ランダムに似てゐるけれども、想像の分子が多い丈力がないと言はれてゐる。三つ目の小說は「ファーディナンド」"*The Adventures of Ferdinand, Count Fathom*" であつて、人間の屑の屑、箸にも棒にもかゝらない惡漢の行動を描いたもので、フイールデイングの「ヂョナサン・ワイルド」と好一對の、最厭はしい、不愉快な小說である。此三篇の小說を書いた後、或は「クリテイカル・レヴユー」"*The Critical Review*" の編輯に從事し、セルヴンテイーズのドンキホーテイを譯し、ヒューム（Hume）と共に英國史 "*The History of England*" を著はし、「ブリテイッシ・マガジイーン」"*The British Magesine*" に「サー・ラーンスロット・グリーヴズ」"*The Adventures of Sir Launcelot Greaves*" を連載し、「復讐

行動」"*Reprisals*" と言ふ茶番狂言を書いて上演などした。「サー・ラーンセロット・グリーヴズ」は世間の苦情や紛擾事を矯め治めようとして、田舍廻りをして歩るく間に、新參者のケアプテイン・クロウとの鞘當筋を道化交りに面白く書いたものである。嘗つて英國海軍部内の不始末を「クリテイカル・レヴユー」誌上にくそみそに叩いて、訴訟沙汰になり、誹毀罪に問はれて、三月ばかり臭い飯を食べたこともあるにかゝわらず、猶懲りずまに誰彼の區別なく、八つ當りに口汚い惡口を叩いて、作家の常癖を遺憾なく發揮したものである。セルヴンテイーズを氣取つて、純英國式のドン・キホーテイを書かうとして、不成功に終つたものであつた。精神過勞のために健康を破壞した上に、一人しかなかつた愛娘に先立たれ、保養と言ふよりは自暴自棄氣味に二ケ年餘り、フランスやイタリを旅行し "*Travels in France and Italy*" を書いたが、見るもの聽くもの悉く癪の種であつた。それらの國々の人間はもとより、明媚な風光に對しても、稀代の藝術品に接しても、遠慮會釋もなく、むしやくしや腹の咆罵を恣にしてゐる。身體の衰弱と共に神經はいやが上に尖つて、猛烈な諷罵を昔の庇護者ブート鄕やその他二三の知名の人達に浴せたものが "*The Adventures of an Atom*" であつた。一旦大陸の旅から歸つたが、猶轉地の必要に迫られ、再び旅裝を整へて、イタリヤのレグホーンに赴き、衰弱の恢復を計つたけれどもその効なく、千七百七十一年の九月世を辭し、フイールデイングがリスボンの墓地の土になつたやうに、レグホーンの英國墓地の石の主となつた。レグホーンに滯在中書

きをつて、死の少し前に公にしたものが「ハンフリ・クリンカ」"*The Expedition of Humphry Clinker*" である。「ハンフリ・クリンカ」は彼の小説の最後で而も最も優れたものである。スターン（Sterne）などの感化を受けて、角が取れ、温味も出てゐる。ウエールズの、個々に一癖ある一家族が、イングランドやスコットランドやウエールズを旅して廻る間の、市や人や雑多の事件に逢着して、その観察を面白く記述してゐる。「ロダリック・ランダム」その他の小説に見る、苛酷皮肉の筆はないけれども、鋭い機智の鋒芒が絶えずひらつき、ひりゝと辛い諷刺も頭を擡げてゐる。作家の生國のスコットランドの部分が最も優れてゐるのは當然である。寫された人物の中でも、マシウ（Matthew）、ウイニフリッド・ジエンキンズ（Winifred Jenkins）、リスマーゴウ（Lismahago）、タビサ・ブランブル（Tabitha Bramble）などが強い印象を殘す。想も筆も豊熟した「ハンフリ・クリンカ」が秀れてゐるけれども、明快な而も底力のある暴風雨を敍した一節"*A Storm at Sea*"を「ロダリック・ランダム」から取つて、コンラードの「暴風」"*The Typhoon*"などの文と比較する便りとしたい。

We got out of the channel with a prosperous breeze, which died away, leaving us becalmed about fifty leagues to the westward of the Lizard: but this state of inaction did not last long; for next night our main-top sail was split by the wind which in the morning increased to a hurricane. I was wakened by a most horrible din, occasioned by the play of

the gun-carriages upon the deck above, the cracking of cabins, the howling of the wind through the shrouds, the confused noise of the ship's crew, the pipes of the boatswain and his mates, the trumpets of the lieutenants, and the clanking of the chain pumps. …… The sea was swelled into billows mountains high, on the top of which our ship sometimes hung as if it was about to be precipitated to the abyss below. Sometimes we sunk between two waves that rose on each side higher than our top-most head, and threatened by dashing together to overwhelm us in a moment! Of all our fleet, consisting of a hundred and fifty sail, scarce twelve appeared, and these driving under their bare poles, at the mercy of the tempest. At length the mast of one of them gave way, and tumbled overboard with a hideous crash! Nor was the prospect in our own ship much more agreeable; a number of officers and sailors ran backward and forward with distraction in their looks, hallowing to one another, and undetermined what they should attend to first. Some clung to the yards endeavouring to unbend the sails that were split into a thousand pieces flapping in the wind; others tried to furl those which were yet whole, while the masts, at every pitch, bent and quivered like twigs, as if they would have shivered into innumerable splinters! While I con-

sidered this scene with equal terror and astonishment, one of the main braces broke, by the shock whereof two sailors were flung from the yard's arm into the sea, where they perished, and poor Jack Rattlin was thrown down upon the deck, at the expense of a broken leg.

第五節　ロランス・スターンと「トリストラム・シャンディ」

スモリットはフイールデイングと共に、英國小說の寫實主義に貢献する處があると共に、ルー・サージのピカルーン小說を完全に英國化した一人である。十八世紀小說壇の三幅對の觀のあるリチャードスン、フイールデイング、スモリットと並んで、その作物は少なかつたけれども英國小說中の珍書を以て目せられてゐる「トリトラム・シャンデイ」"*Tristram Shandy*" の著者ロランス・スターン（Laurence Sterne）は千七百十三年にアイアランドのクロンメルに生れた。父が陸軍歩兵少尉であつたので、幼少の頃は父に隨つて兵營内に生活し、十歳の時ハリファックスの語學校に入つて八年の星霜を送り、そうして父に死別れたけれども、親戚には知事や學者などが多かつたので、勉學には都合がよかつた。ケンブリヂの Jesus College に入學したが、學長はリチャード・スターン博士で、彼の曾祖父に當つてゐた。二十三歳の時バチエラーの學位を取り、一時叔父のジャクーズ・スターン博士の厄介になつてゐたが、それから二年後に Sutton-on-the Forest の准牧師になり、二十八歳で妻帶した。慰に繪を畫いたり、胡弓を彈いたり、狐狩や兎狩に憂身を窶し、呑氣な平凡な月日を

送つた。が、元來自惚の強い氣儘な性質で、界隈の僧侶達とそりが合はなかつたし、又妻に對せる擧作も卑劣で利己的であつたさうである。僧侶にあるまじく酒を飲んだり、女にからかつたりして、二十幾年を無意味に過し、千七百六十年に、ふと世に問ふた名著の「トストラム・シャンデイ」"*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gent.*" の最初の二卷が、その文體が奇拔珍妙であつたので、スターンは一足飛びに文豪の仲間入りをした。怪しからぬ書物だと地方の檢閲官が目を丸くした。素敵な本だと中央文壇の批評家が唸りを擧げたと言ふのは嘘ではあるまい。遂にランダンへ引つ張り出され、ひつきりなしに晩餐に招ばれ、ひつきりなしに客が訪れて、文壇の名物男として社交界の世辭追從に醉はされてゐた。再び田舍に引き籠つて、翌年の中に「トリストラム・シャンデイ」の三卷から六卷まで書き、それから三年置いて七卷と八卷を、更に二年經過つた千七百六十七年に九卷目を出して「トリトラム・シャンデイ」は完結を告げた。ばらばらと頁を繰つた丈でも、一風變つた小說であることが目につく。長短の差の甚しいチャプタが入れ交つて、思はせ振の星點（アスタリスク）が其處此處に散點し、書き掛けて省いた棒（ダッシ）の行列や、餘白（ブランク）で殘した箇處も少なくない。讀んで行くと、枝葉に渉つた無駄話が際限もなく續いて、何處が段落なのか全く見當がつかない。五里霧中に彷徨つてゐる感じがする。斯う言ふ散文はスターン以前には絶えてない。以後にも全く見られない。只不用意に書き捨てたやうに見えて、時によると練りにねつた文章になつてゐる。さうして主人公が一體誰な

のか、それすら明瞭でない。シャンデイの兩親なのか、叔父のトウビ（Toby）なのか、コーポラル・トリム（Corporal Trim）なのかドクタ・スロップ（Dr. Slop）なのか、孰れが中心人物かわからない。要するにシャンデイー一家の生活を斷片的に紹介したエピソウドの連續である。その枝葉の出來事に就いては、Digressions, incontestibly, are the sunshine,——they are the life, the soul of reading:— take them out of this book, for instance, you might as well take the book along with them;——one cold eternal winter would reign in every page of it: restore them to the writer, he steps forth like a bride groom,——bids all hail; brings in variety, and forbids the appetite to fail. と公言してゐるやうに、此書の生命はそのダイグレッシンに在る。從つて定まつた筋のないのは當然である。然し人物の描寫は相當に成功してゐる。シャンデイの兩親は言ふまでもなく、トウビやトリムなどは父と共に兵營生活をしてゐた昔の想ひ出から來てゐやうし、ドクタ・スロップやミセス・ワドマンなどは、永い僧侶生活の經驗から描いたものであらう。忍耐强く、落着きがあつて、同情と親切とを有つてゐるトウビは、蠅一匹でもむざむざ殺すやうなことはしない男である。食事の時トウビの鼻つ先をぶんぶんと蜚び旋つて、散々トウビを苦めた大きな蠅を、辛つと拳の中に收めながら、翅一つ捥ぎもせず、窓を明け、手を開き、さあ行けよ、俺は何もお前を傷めることはありはしない。世の中はお前と俺を容れ得ない程狹くはないのだと、ぶいと逃してやつたトウビの博愛の精神には一生忘れることの出

來ない印象を刻まれたと書いてゐる。やれ打つな蠅が手を擦る足を擦ると歌つた、此國の俳人の面影をトウビの性格に認められる心地がする。

My uncle Toby was a man patient of injuries; — not from want of courage; — I have told you in a former chapter, "that he was a man of courage;" and will add here that, where just occasions presented, or called it forth, — I know no man under whose arm I would have taken shelter; ..... but he was of a peaceful, placid nature, — no jarring element in it — all was mixed up so kindly within him, my uncle Toby had scarce a heart to retaliate upon a fly.

— Go — says he, one day at dinner, to an overgrown one which had buzzed about his nose, and tormented him cruelly all dinner-time, — and which, after infinite attempts, he had caught at last, as it flew by him: — I'll not hurt thee, says my uncle Toby, rising from his chair, and going across the room, with the fly in his hand, — I'll not hurt a hair of thy head: — Go, says he, lifting up the sash, and opening his hand as he spoke, to let it escape; go, poor devil, get thee gone, why should I hurt thee? — This world surely is enough to hold both thee and me.

斯う言ふ好人物のトウビにミシズ・ワドマンが心底から惚れ込んでゐるけれども、更にその反響がない。ワドマンはもどかしがり、一策を案じてトウビに思ひを通じようとする。其場面は蓋にもかかれてゐる。その一策とは眼に物の入つたふりをして、トウビの椅子に身を摺り寄せて、見て呉れと言ふ。

— I am half distracted, Captain Shandy, said Mrs. Wadman, holding up her cambric-handkerchief to her left eye, as she approached the door of my uncle Toby's sentry-byx; a mote, — or sand, — or something, — I know not what, has got into this eye of mine; — do look into it: — it is not in the white. —

In saying which, Mrs. Wadman edged herself close in beside my uncle Toby and squeezing herself down upon the corner of his bench, she gave him an opportunity of doing it without rising up …… Do look into it, said she. etc.

I see him yonder, with his pipe pendulous in his hand, and the ashes falling out of it, — looking, — and looking, — then rubbing his eyes, — and looking again, with twice the good-nature that ever Galileo looked for a spot in the sun.

In vain! for, by all the powers which animate the organ — Widow Wadman's left eye

shines this moment as lucid as her right; — there is neither mote, nor sand, nor dust, nor chaff, nor speck, nor particle of opaque matter floating in it. — There is nothing, my dear paternal uncle! but one lambent delicious fire, furtively shooting not from every part of it, in all directions into thine.

If thou lookest, uncle Toby, in search of this mote one moment longer, thou art undone.

ワドマンの兩眼から、赤々と燃えてゐる戀情の焰を認めたのは、軍人氣質の單純鈍感なトウビではなく、傍で觀てゐたトリストラム卽作家自身である。斯うしてその時々に、機微に觸れた燃犀の觀察を遂げ、燦爛たる機智の閃きを見せてゐる。然し書物全體が純金でもなければ、清水でもない。殘滓もあれば、沈渣もある。脫線が此書の生命であるやうに、その沈渣と殘滓は捨てず濾さず、其儘讀んで行くところに妙味がある。之もその渣滓の中であるが、折々猥褻な筆意がある。而もそれがフイールディングやスモリットに見るように開放的でない。下司張つたことを語りかけて、語り殘し自らそれと感づかせると言つた調子である。井原西鶴と爲永春水ほどの筆の相違であらう。十六世紀のフランスの僧ラベレイ（Francois Rabelais）がその時代の病弊を嘲り、僧侶の無智と腐敗をあて擦り、巫山戲散らし、洒落のめして、醜惡卑猥な文字を羅列し、而も絕えずあらぬ方に筆が逸れて行く工合が、スターンに似て居ると言ふけれども。スターンの脫線はラベレイ以上である。一層尾